戦紀絶唱《シン》フォギア（仮）？

星屑英雄

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主の転生に巻き込まれ、転生してしまった俺氏。与えられた役割は……響の夫にして、クリスの恋人だとォ!?　まるで意味がわからんぞ!?　←紅蓮の悪魔の仕業でございます。←どういう…ことだ…

とまあ、こんな感じで始まるが、これは俺がヒーローになる物語だ。

この小説は驚くほどの軽さと、信じられないくらいのノリで出来ています。あと、多分、きっと、おそらく、シリアスはな……かったらいいなぁ……

一話短め。

キャラ崩壊、キャラが違う、誰だお前!?　ってのも、当たり前にあります。それでもよければどうぞ!!

目次

特別篇
特別編　1 ―― 1
特別編　2　第一回チキチキ、皆には内緒だよ!!　装者だらけの親睦ゲーム大会!! ―― 9
プロローグ
一話　転生って？　↑ああ!!　それってテンプレ？ ―― 13
二話　役割とは何ぞや？ ―― 16
無印前
三話　俺と響とぐだぐだな日常 ―― 19
四話　急変 ―― 22
五話　入院生活と決意 ―― 31
六話　全校集会の時間だオラァ!! ―― 35
七話　迷いと心配と響の覚悟 ―― 39
無印開始
八話　会合の装者 ―― 42
九話　集う装者 ―― 45
十話　想いの平行線 ―― 47
十一話　変身 ―― 50
十二話　罪のノイズ ―― 56
十三話　死闘 ―― 62
十四話　未来の？仲直り大作戦!! ―― 66
十五話　ダブルクロス ―― 73
十六話　激槍・ガングニール ―― 83
十七話　兄弟子 ―― 90

１８話　お見舞いとデレと野暮用　96
１９話　サクリストＤ　102
２０話　デュランダル　108
２１話　真実は一つ!!　……じゃない　116
２２話　暴走　124
２３話　エクスドライブ　137
２４話　我ら思う、故に我ら在り　155
Ｇ編開始
２６話　英雄問答　168

特別篇
特別編　1

～CM～

ここは二課の部屋の一室。

響、未来、切歌、調、クリスの５人は宿題を片付けていた。

「は～、宿題が終わらないよぉ……」

装者としての雑務をこなす内に、学校の宿題を貯めこんでしまった響が、大量の宿題を前にしてぼやく。

未来は、てきぱきと自分の宿題を取り出し、響に渡しつついう。

「仕方ないよ、だって響が貯めてた宿題だよ？　この場所も貸してもらって、私も手伝ってあげてるんだから、しっかりしなきゃ！」

「え～、遊びに行こうよぉ～」

「それ、却下デース☆」

後輩である、切歌にまでそう言って断られる始末。

そんな姿を影から見ている男がいた。

そう、小日向遊策である。

彼は、影から見守っているだけだったのだが、彼も何か響の役に立ちたいと思っていた。

「頑張る響を、応援したい!!」

そう言った遊策の肩にポンと手が置かれる。

「でも、自分の力で成し遂げないと……」

「翼……」

更に、遊策の後ろからスッと奏が出て来て遊策の背中を押す。

「意味ねーんじゃねーか？」

「奏……」

遊策は二人の顔を見て、うん、とうなずく。

「なら……」

そう言って、どこからともなくあるものを出してくる遊策。

「届け!!」

「「元気ハツラツパワー!!」」
あるもの――――オ○ナミンCを響の机に置き、響にこう言う遊策。
「レベルアップだ!! ビタミンC!!」
それに、翼、奏も続く。
「ビタミンBも!!」
「保存料、着色料0(ゼロ)!!」
そして、遊策が、翼、奏とハイタッチしこう〆(シメ)る。
「一緒なら、何でもできる!! 元気ハツラツ!! オロナミ○C!!」

「お兄ちゃん(お兄さん)、うるさい……」
心底イラッと来たような声色でそう言う、響と未来。
「あっ、はい……って、なんで俺だけぇ!?」
思わず、敬語になってしまう遊策なのであった……

「……って、いうS・O・N・GとのオロナC○ンCコラボCMどうですかね?」
そう言って、風鳴司令に直訴する遊策だったが……
「それ、却下デース☆」
「ですよねッ!!」
あえなく撃沈したのだった。

「てか、先輩たちも何やってるんだよ……」
頭を抱えるクリスに、翼と奏は――――
「い、いや、いい息抜きになるかなと思い……」
「あたしは、面白そうだったからやっただけだけどな。はっはっは」

～とある今回出番が無かった人たちの呟き～
「あれ? 私のセリフは?」
「私なんて、登場してすらいない……(血涙)」

「ふふ、私もいるかもね？」
「!?」
チャンチャン！

～俺と響のある日～
響が中学入ってすぐの事……
「ふぁ……」
「おい、どうした？　寝不足か、響？　夏だからって、気を抜いてたら駄目だぞ？」
「真夜アニメがそれはもう面白くて面白くて、ですね……その時間まで起きていたら……」
「夏だからって、油断しすぎだ。録画してたらいいのに……」
「っは!?」
「え、なにその今気づいたみたいな顔？」
「あはははは、視聴率をとるためですよー……今度から録画にしとこ」
「おいこら、最後小さく言っても聞こえてるぞ、このアホガール」
そんな会話をして、川の近くに差し掛かった時……
一人の少年が、川の岸辺を歩いているのを見かけた。
「あ、川の中に、石がある。拾いに、いこ……あっ、この川、深い!!
ボクはまだ、死にたくない!!　助けて!!　しんちゃん、ねねちゃ……」
そう言って、浮かんでこなくなる少年。
不味いと、俺は身を乗り出し、響に言う。
「おい、あの子、おぼれたぞ!?」
「私!!　浮かぶものとあったかいもの持ってきます!!」
「あったかいものは後にしろ!!　俺は、助けに行ってくる!!」
そう言って、川に飛び込む遊策だったが……
「あ、ほんとだ。この川、深いッ!!　てか、足つる!?」
準備運動をしなかったために、足をつりかけた遊策だったが、何とか川でおぼれる少年を掴み、響が投げてくれた浮き輪に捕まる。
その後、ゆっくりと岸に戻ると、少年は礼を言ったあと、走ってど

こかに行ってしまった。
「なんだったんだ……？」
「ふふふ、川の妖精さね……」
「うおっ!!　お婆さん、あんた何処から!?」
　唖然とする遊策と響の間に、腰の曲がった老婆がいつの間にか居た。
　お婆さんはそれだけ言って、後ろを向いてどこかへと消えていく。
「本当に何だったんだろうか？」
「と、とりあえず……あったかいもの、どうぞ」
「あったかいものどうも」
　響が渡してくれたあったかいものを飲む。
　夏とは言え、終わりかけだ。１０分程度とは言え、いきなり川に入って、ぐっしょり濡れていたら体温を奪われる。
　そんな時の、あったかいものは嬉しいものだ、遊策は思った。
「とにかく、このままいるのは不快感がすごいから一旦、家に帰ることにするわ……」
「そうのほうがいいですよね、これは」

「ただいま～」
「お帰り～。あれ、早くない……って、どうしたの!?　お兄ちゃん!!」
　アイスを頬張っていた、未来が俺の姿を見てビックリ仰天する。
「まあ、色々あってな」
「色々って……？」
「ああ!!」
　軽く笑って流す。そして、いそいそと洗面所に行き、服を取り着替えた。

「さて、どこ行こうか？」
「そうですねぇ～、まだ残暑もありますし、映画にでも行っちゃいましょうか！」
　そう言った響の後ろからヒトデ頭の少年が現れる。

「へぇ～、デートかよ」
「あ、同じクラスの亜手無（アテム）くんじゃねーか」
「やっとお前もその気になったんだな!!　ガンバレヨ!!」
そう言って、亜手無くんは帰っていった。
何しに来たんだアイツ……？
「でぇ？　映画だったな……子供だけではいれるかな……？」
「もう、私は中学生ですよ？　中学生同士なら問題ないですよ!!」
「まあ、俺は高校の年齢だがな……まあ、いいや何が見たい？」
俺は映画の上映時間一覧表を見て、響に見たいタイトルを聞く。
「これ、これ見たいです!!」
響が指をさした映画のタイトルは――――
『団地妻ミズホの秘め事　～夜に鳴く小鳥編～』。
「……」
「あれ？　どうしました？」
「これ、見るの……？」
「はい!!　ダメ、ですか……？」
満点の笑顔からの上目遣いのコンボだとぉ!?
「じゃ、見ようか!!　すぐ行こうか!!」
「やった!!　響ちゃん大勝利ィ!!」
響が満足そうでよかったです。……

『ミズホ……お前、どうしてこんな姿になるまで!!　クソォ!!　血が、血が止まらねぇ!!』
『あなた……ごめんなさい……それでも、私は……あなたを守りたかった。こんな、無様をさらしてしまった私でも、あなたは愛してくれる？』
『ああ、愛すさ!!　もう、喋るな!!』
『そう、よかった……愛、してるわ……あなた……ううん、私の愛しい人ヤリザ……』
『ミズホ……ミズホ、いや!!　ミズホ殿ォォォォォォ!!!　くっそ!!

ぜってぇゆるさねぇでござる!!　六武カンパニー社長、紫炎!!!!!』
……なぁにこれぇ。
R―18の何かだと思ったら、よくわからないバトル物だったでござる。
しかも、不思議なことに、よくわからないのに全く飽きない。適度なお色気と、熱い展開のオンパレードで、映画を見ている人の心を離さないように配慮していて、憎い演出をしてくれる!!
あっという間にラストシーンにまで行ってしまった。
『紫炎!!　もう、お前が影武者でない事までわかっているでござる!!』
『っふ、君は一体いつから私が、貴様の妻であるミズホを殺した、と思っていた?　そうさ、私ではない紫炎……つまり、影武者が貴様の妻を殺したのだ』
『……何……でござると……』
『ははははは!!』
『それはそれとして、お前は許さないでござる』
『ゑ?』
『いざ!!　南無三!!』
『ブルァァァァァァ!!!』
『完』
『団地妻ミズホの秘め事　～決着!!　そして現れる真・六武カンパニー編～へ続く』

俺と響は、映画館から出て家に帰る道を歩いていた。
響が、興奮しきった様子でさっきの映画の事を喋る。
「いや～、おもしろかったですね～!!!」
「ああ、面白かったのは面白かったんだが……」
なんだか釈然としない終わり方だった……
とりあえず、続編を見ようと決心する俺だった。
俺達は、さっきの映画についての考察を話し合ったりしていたのだが……

「ごめんなさい……あなたとは付き合えません……」
「えっ!!　そんな……っつ、ううっ!!　振られたショックで、急に心臓がっ!!」
「ええ……っちょ、誰か来てぇー!!」
何か馬鹿げた理由で心臓発作を起こした人に遭遇した。
「っちょ、助けるぞ、響!!」
「合点承知ィ!!」

「貴方のおかげで、助かりました……」
「いえいえ、どうってことないですよ」
頭を下げてくる女の人に、頭を上げてくれるように言うと、女性は俺の腕を掴んできた。
「いえ、お礼として、お茶でも……」
「いいですから～、お兄さん!!　行くよっ!!」
響は、パッと響チョップで、女性と俺の間に入ると俺の腕を掴み強引に引っ張っていく。
そのまま、ずるずると俺は引きずられていった。

引きずられて、数分……
「そろそろ、放してくれるか？」
「嫌です」
「いやでも……」
「イ・ヤ・で・す!!」
「はい……」
何とも言えない威圧感から、何も言えなくなる俺。
響は無言でズンズンと俺を引きずっていく。

……はぁ。
「響」
俺はそう言って、立ち止まり、地面に立つ。
響は一生懸命、俺を引きずろうとするが俺は両足に力を込めて、自

身を大地に固定する。
　響は俺を動かそうと、顔を真っ赤にして引っ張っている。
「ふんぐぐぐ、んぎ……」
　可愛い……ではなく、俺は真剣な表情を響に見せる。
「響」
　もう一度、俺は響の名前を呼ぶ。
「……なんですか？」
　むくれた顔を隠しもしない響に、クスリと俺は笑うと、響に向かって今俺が思っていることを言う。
「俺はお前を放ってどこかに行ったりしないよ」
「え……？」
「だから、お茶も断るつもりだったし、引きずらなくても歩くさ。お前の傍に、俺はいるからさ……だから、むくれる必要はないさ」
　俺は響の手を取って、歩き出す。
「心配なら、手をつないでいてやるよ。放すなよ？」
「……うん」
　夕焼けの太陽が、俺と響を照らす。後ろの影はしっかりと繋がっていた……

特別編　2　第一回チキチキ、皆には内緒だよ!!　装者だらけの親睦ゲーム大会!!

「第一回チキチキ、皆には内緒だよ!!　装者だらけの親睦ゲーム大会ィ～!!」
「「「「イエェェェェェェ!!」」」」
響が言うとその場にいた全員・俺、未来、クリス、奏、翼が叫ぶ。
ちなみに現在、午前2時を回った所です。みんなは絶対マネしないでね!!
……多分この皆のハイテンションは、深夜特有のアレだ。
しかし、ゲームに支障が出るわけじゃないので、今回はこんな感じで送っていきたいと思います。
「と、いうわけで会場は俺の間借りしている一軒家でお送りします!!」
「お兄ちゃん、誰に向かって言ってるの？」
「気にするな、未来。深夜特有のイザナミだ」
「うん、うん……うん？」
未来は首を捻りながら、他の装者の輪に入る。
多少のネタこうやってスルーされてしまうんだね……深夜ってコワいなー。
なぜ未来がいるかって？　丁度、土日と遊びに来ていたからだ。
～以下、このゲーム大会開催までの流れをダイジェストでお送りします～
「さあ、闇のゲームの時間だ……」
「まぁた、遊策の奴が何かほざいてやがる……」
「まあまあ、とりあえず聞いてみてからにしようよクリスちゃん」
「ん？　何のゲームするんだ？　あたしも混ぜろ!!」
「ゲームは、苦手だな……」
「おう、皆、今度の土・日曜日空いてるか？」
「「「空いてる（ぞ）（よ）」」」
全員、奇跡的にその日は空いていた。それを確認すると俺は声を上

げた。
「親睦会をかねた、ゲーム大会を深夜ぶっ続けでやろうと思うんだが……どうだろうか？」
「「「「いいーねぇ……」」」」
全員の参加が決まった。
と、まあ、そんな流れだ。
まあ、昼の2時からみんな遊びに来るとは思わなかったが……
そして、各々、深夜までの間、好きなゲームで暇をつぶした。
「ふふふ、私の六武衆に勝てるかな？」
「満足させてくれよ……」
「おー、遊戯王か……そういや、ルール変わったんだっけ？　最近はやってなかったな、どうなってるんだ？　ん？　なんだこのフィールド……はー、リンクモンスターねー。まるで意味がわからんぞ？」
ウキウキの翼と、いきなり満足ルックになりハーモニカを拭き始めた遊策。と、それを眺める、奏。
彼らの後ろには、立体映像の槍を構えた武者と頭に輪っかがついたドラゴンが火花を散らしていた。
「ちょせぇ!!　はっ、ちゃんちゃらおかしすぎる!!　ちょろくせぇゾンビどもには……鉛玉の大バーゲンセールだぁ!!」
「クリス!!　弾は限られているから、このステージでは撃ち過ぎは……」
「弾が出ねぇ、なんでだっ!?」
「あーあ、クリスちゃん弾使い切っちゃった……」
クリスと未来と響はテレビでゾンビゲームを楽しむ。
そうやって、時間を過ごしていた。
そして、現在――――
「さあ、始まりました、この企画!!　まず最初はこれです!!
『大乱闘!!　スマッシュブラザーズＸＸ』
登場キャラにゲーム『マイティアクションＸ』から、マイティとプロトマイティゲンムていう二キャラが参戦した最新ゲームだ」
くじ引きで対戦を決めた結果、クリス・響・俺チームと奏・翼・未

来チームの大乱戦となった。
　手始めに俺と響とクリスの大乱戦だ。
　クリスはサ○ス、響はキャプテンファル○ン、そして、俺はゲンムをセレクトする。
　そして戦いが始まった。
「っち、なんでだ!!　あたしのキャラはダメージは全然たまってないのにぶっ飛ばされちまったぞ!?」
「ははは!!　雪音クリスゥ!!　何故君のキャラが６０％でフットバされたのか、何故俺を軽く吹っ飛ばせたのか、何故ポンポンとキャラクターが吹っ飛ぶのくわァ！　」
　奏は、ネタバレは心が躍らないからと、注意を促す。
「それ以上言うな！」
　それに構わず、いやむしろ愉悦を浮かべ、続ける。
「その答えはただ一つ……」
　翼は奏に代わり止めようとするが、遅い、真実が語られてしまった。
「やめろー！」
「アハァー……俺が、設定を吹っ飛び率二倍に書き換えたからだぁぁぁぁ!!」
　その設定にクリスは文句を言う。
「ずるいぞ、遊策!!」
「バカヤロー!!　勝てばよかろうなのだー!!　俺が!!　俺達がっ!!
ガン……ルールだぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
　高笑いを続ける遊策――――だったが……
「ふぁるこんぱーんち!!」
「イワァァァァァァクッ!!!!?」
　響が操るファルコンの拳がゲンムの顔面をとらえた。
　ゲンムは有無を言わさず、いや、『私は……不滅だー』とか言いつつぶっ飛ばされ、光の柱を上げるゲンム。コンテニューのための残機は……ゼロだった。
「ゲンムの残機が無くなって、お兄ちゃんが死んだー!!」
「「この人でなし!!」」

負けてしまった俺を除き、火花を散らすクリスと響。
そして、激闘を制したのは――――響だった。
続いて第二チームと続き、勝ち残った者同士で優勝を決めるともう一戦、もう一戦と、キャラと相手を変えて何度も戦った。

「次は、人生ゲーム行くぞー!!」
まだまだ、お楽しみの夜はこれからだ!!

プロローグ

一話　転生って？　↑ああ!!　それってテンプレ？

俺は　俺氏遊策（おれしゅうさく）!!

同級生の毛利桜と待ち合わせをしていたら、創作によくある転生トラックに跳ね飛ばされそうな奴を助けようとした奴を見つけてしまう。影から様子を伺いつつ、そいつを助けたら、その時不思議なことが起こって気絶、誰かに薬を飲まされ、目が覚めた時には……転生してしまっていた!!

たった一つの真実見抜けぬ!!　見た目は子供、中身も子供（精神年齢３０代前半）!!

その名は、小日向遊策！

……はい、お気づきの方もいますでしょうか。

小日向ですよ、小日向。お気づきじゃない方も、これの原作名と小日向未来という名前を聞けば思い当たるかもしれません。

そうです、自分、妹がいるんですよ。

小日向未来っていう、黒髪の白リボンがキュートな天使です。

……どう考えても、シンフォギアです。

シンフォギアというのは前世での変身ヒロインに当たるもので、正式名称『戦姫絶唱シンフォギア』。アニメは三期まであり、さらには四期五期と放送が決定している最近のアニメの中では珍しい部類だ。原作は、俺はやっていないが『ワイルドアームズ』を手掛けた金子彰史さん。そして、二期からだが、監督があの遊戯王５Ｄ，ｓの監督である小野勝巳さんがやっているアニメだ。……アークファイブ？知らない子ですね（すっとぼけ）

アークファイブはシンクロ次元編が悪かった。あと、デュエルの中断と軽視。それとザァークの雑な扱い。過去キャラも出さなければもっとスムーズにいけただろうに……。ファンサービスにこだわりすぎたんだ。希望を与えられ、そしてそれを奪われる……まさしくⅣ

のごときファンサービスだよ!!　まあ、いい点もあったし、嫌いじゃないわ（京水並感）!!
と、まあ、話が大幅にずれた。
とにかく、シンフォギアの世界に来てしまったことは確かだ。
それに俺が転生した経緯は大体上記の通りだが、この世界がシンフォギアだと確信したのは未来がいたから……だけではない。
実は神と名乗るものからここに転生するまでの経緯と、この世界での役割を示唆した手紙が俺が5歳のころに届いたのだ。
役割の内容がトンでもないもので、今度聞かせるとして、実は俺が助けてしまったのは元々オリ主……つまり、オリジナル主人公になるべき者だったのだが間違えて、俺の方を殺してしまったらしく、そのままじゃヤベーから適当な世界に転生させとけ、と、この世界に転生されたのだ。
なんて雑な転生だろうか、もう少し事情説明とかをして欲しかった。二次創作にある、神の間みたいなところでのあーだ、こーだは一応事情説明としては親切な方だったんだなと、俺は痛感した。
そうこう思考してると、窓から家に、マイリトルスイートエンジェル未来が友達の立花響ちゃんを連れてやってきたのが見えた。
……お菓子の用意しておくかな。
「ただいまー！」
「おじゃましまーす!!」
「はいよ、お帰り」
鍵を開けリビングに入ってきた未来と友達の響ちゃん。響ちゃんは俺を見て挨拶しながら飛び掛ってきて、未来は俺のやってることを理解したのか、まだ用意してなかったジュースを取りに冷蔵庫に向かう。
「こんにちは!!　おにーさん!!　おにーさんのたちばなひびきですよー」
「おにーちゃん!!　ジュースとってー」
「ええい、うるさーい。今、お菓子の仕度してるからちょっと待って!!」

天真爛漫な笑顔で抱きついてくる立花響ちゃん（１０才）。そして、腕を限界までプルプルさせながら冷蔵庫の中の少し高めのところにあるジュースを取ろうとしている妹の未来（１０才）。そして、ズリズリと響ちゃんを引きずりつつ、お菓子を出してもてなしの用意をする俺（１４才）。

これが今の俺の日常だ。

二話　役割とは何ぞや？

おはこんにちばんわ、皆さんの小日向遊策です。
今日はこの世界での自分の役割を考えて行きたいと思います。
えー、神様（仮称）から貰った手紙によると自分の役割は……
①▪立花響と夫婦関係になる。
②▪雪音クリスと恋人になる。
③▪小日向未来をオリ主と結婚させよ。
の三つですね。
……おおいっ!?　神様（仮称）！　まるで意味がわからんぞ!?
まず、1と2はこれ二股かけろってことですよねぇ!?　なんかもう、2の雪音クリスとの関係が愛人枠なーと言っているようで、もう駄目だろ!!
意味がわからねー……恋愛もしたことが無い俺にこれは酷過ぎる……
しかも、達成条件が死ぬまでって書いてあるんですけど!?
死ぬまで響と夫婦しながらクリスと恋人プレイしろと!?　大概にしろよ、神この野郎テメー!!
つーか、こんな俺と夫婦にならされる響ちゃんがかわいそうだし、クリスちゃんが恋人どまりとか、なに考えてんだ神のやつ……ぶっ殺してやろうか……
あっ、ぶっ殺されたのは俺だった。
とか、考えていると手紙に文字が浮かび上がってきた。
②　雪音クリスと恋人になる。（夫婦でも可）
どういう…ことだ……？
と、まあ、不思議な手紙のギミックにより疑問に思ったところや詳しいことが判明する。
そして、1や2の細かい事項を確認した俺は、次に役割を出来なかった場合を読んでみる。
以上のことを達成できなければ、あなたが死ぬだけでなく、世界が

終わりますから、頑張って下さいね。応援してます。ふぁいと！
キャっ）はぁと　　ｂｙ　神

と締めくくられていた……
なんだろう、この気持ち……このむしょうに苦しくなって、ドクンドクンと胸が叫ぶがごとく煮えたぎる気持ち……

Ｐｓ　そうか、それが君の愛なんだね☆

なぜそこで愛ッ!?　チゲーよ、殺意だよ!!

ところで、オリ主ってだれだろ？
うちのかわいい妹を嫁にやるくらいだし、ちゃんとした奴がいいなぁ……というか、妹は嫁にやらん!!
なんてくだらないことを考えていると、また文字が浮かんで来た。なんというか、さっきはああ言ったが説明無しの転生は不親切だとか何とか言ってたけど、かなり手厚く質問とか疑問に答えてくれてるよね。
俺は手紙に目を落とし、知らなくていい真実を知ってしまう。

ＰＳ　オリ主は君が助けた人だからね

ゑ？　ん、ちょっと待って、俺が助けたの女の子なんだけど……
どゆこと？

……ネタバレはよろしくないので、アディオス。
手紙がそう締めくくられると共に何の変哲もないただの手紙になってしまった。
いや、違う。文字が書き換えられて――――
ピーカンの空に　シュワシュワな……
神さん、これ手紙（切ちゃんの黒歴史）!!　手紙じゃない!!　って、え？　おい!!

ちょっ、待てよ!!　今回、これで終わり……だと？
……マジで？

～とある施設～
「デ、デ、デ、デースッ!?」
「き、切ちゃん!?　ま、マリア!!　セレナ!!　切ちゃんが泡を吹いて倒れたー!!」
ということがあったそうな……

無印前

三話　俺と響とぐだぐだな日常

俺、小日向遊策!!

ただのテンプレ的転生者。転生してから16年経ちました。

思い返せば、色々なことがあったなぁ。アメリカに旅行にいったら、ジャック・バウアーって言う人と24時間の大事件に巻き込まれたり、ワイルドなスピードを感じるカーチェイスに巻き込まれたり、リー警部やカーター刑事とラッシュでアワーな事件に巻き込まれたり、ミッションインポッシブルな事件を解決したり、怪しげな政府の研究施設に偵察に入ったりと大変だった。他にも、バルカン半島にいったり、バルベルデ共和国にいったりもしたなぁ……何度死に掛けたかわからない。はぁ、やっててよかった……エオンフヤー。フジサキバレンシアが無ければ即死だった……ありがとう、黄老師。

しかも、だ。中学の進級日数が足りなくて留年してしまったのだ。でも、なぜか今、俺は生徒会長をしているのだが……どういうことだってばよ?

そして、そんな数々の危機を脱した俺の最近の悩みは、色々ありすぎて留年してしまったということ、ではない。妹の幼馴染が俺に対して猛アピールして来ることだ。

この前なんか……

「おにーさん、おにーさん!!　どの道で行きます?　ここは響ルート行っちゃいましょうよぅ」

などと、中学からの帰り道に大声で俺に向かって叫んでいたり。

「何、食べようかなー。こういう所って、何を食べようか迷っちゃいますよね。あっ、お兄さんはなに食べます。とりあえず私のお勧めは……ワ・タ・シを食べることです!!」

と、何か食べるために店に入ったら流し目で言われたり。

「遊策お兄さんは、私の婿!!」

とか何とか、供述しており、重傷なようです。くっ、どうしてこん

なになるまで放っておいたんだ!!
今なんか、ドストレートに……
「結婚するべきですよ!!」
とかなんとか言っていたり。
あれれ～？　おかしいな～、俺いつフラグ立てたんだっけ？
というかそもそも、何かがおかしい。何かがというか、主にキャラがおかしい。すでに、原作の面影が全くない!!
初めてあった時は普通の元気っ娘だったのに何でだ？
「響ちゃん、君ってそんなキャラだったっけ？」
これまたドストレートに聞いてみたところ……
「やだなー、不思議なこといいますねー。ずっとこんな感じじゃないですかー」
手をヒラヒラーとさせながらそう言う、響。
んー？　こんなんだったけなぁー、と俺は頭を悩ませるがやはり答えは出るはずもなく、ただ時間が過ぎていくばかりである。
「遊策お兄さん!!　そろそろ覚悟決めて、命燃やして、私とゴ・ゴ・ゴールと行きましょうよ!!」
俺は小日向遊策!!　１６歳の誕生日に結婚を迫られ、ゴールと行きそうになった俺は、原因を探すため１５個の英雄のシンフォギアを集めてる（大嘘）!!
……中の人ネタですね、わかりますわかります。
まあ、下らない事をしていると、響が俺の服の袖のチョイチョイと引っ張り、言う。
「ところで、お兄さん。私、クッキーを焼いてきたり、なんかしちゃったりしてー……」
おずおずと可愛いラッピングされた袋を出してきた。
「へー、クッキーかぁ……ありがとな、響」
俺は礼を言ってそれを貰い、ラピングを丁寧にはがして、ひょいと一口。サクサクといい感じの音が口の中でなり、プレーンクッキーの素朴な優しい甘さが口の中に広がる。
「うん、うまいよ。良い嫁さんになるな」

「やった、響ちゃん大勝利イ!!」
俺が褒めたことでガッツポーズをして喜ぶ響ちゃん。
沖田さんインしたの？　やっぱ、完全にキャラが別キャラなんだけど……
と、まあ、これが俺と響ちゃんの日常だ。
……しかし、これが長くは続かないことを今の俺達は知らない。

四話　急変

俺の名は、小日向Ｐｌａｙｍａｋｅｒ……Ｐｌａｙｍｅａｓｕｒｅかな（遊策並感）。１７歳転生者だ。……なんだよ、Ｐｌａｙｍｅａｓｕｒｅって。

それにしても、遊戯王の主人公って遊だから、Ｐｌａｙばっかだな。Ｐｌａｙｈｏｒｓｅとか　ＰｌａｙＳｔａｒとか……

なんだか、キュア～とかと同類に思えてきた。キュアキャッスル、キュアスター、キュアホース、キュアアロー……なんだ、違和感ないじゃん。

「ん？　そう考えると、遊戯王はプリキュアだった？　いや、この場合、プリキュアは遊戯王だった!?　そうか、そういうことか、こんなことが……これで論文を書かないと!!　やったぞ、これで俺はノーベル賞確定だ!!」

こうしちゃいられない、帰って書かなきゃ（使命感）

「はい、すとーっぷ！　お兄さん、ここに来た目的忘れてません？」

「知らん……こんな所に居てられるか!!　俺は帰らせてもらうぞ!!

ヒデブッ!?」

引き留める声を流し、家に帰ろうと振り返った瞬間に電柱に激突、俺の（顔面の）ライフで受ける。

あいたたたた……。俺は電柱に強か打ち付けた顔を押さえそこにうずくまる。そんな俺の頭上から、響ちゃんの声が聞こえる。

「死亡フラグっぽいもの、立てちゃうからですよぅ……」

そう言って、俺にハンカチを差し出してくれる。天使だわ、この子。

それを受け取ると、響が俺の鼻を指さす。どうやら、俺の鼻から結構な量の血が出ているようだ。

ティッシュもなくなってしまったので、ありがたくそれを使わしてもらう。

「すまにゃい……うあー、はにゃじがヤバイにゃ……」

鼻血で上手く喋れないが感謝の言葉を伝えると、二コッと笑う響ちゃん。

……響ちゃんマジアークエンジェー。
そして、それにしても、俺の言葉がキモイ。
とりあえず、鼻血を押さえながら、何のためにここに来たのかを思い出す。
すぐに思い出した。人気アーティスト、ツヴァイウィングのライブだ。
昨日の夜、未来が俺の部屋に来て、頼まれたことに起因する。自分が響をツヴァイウィングのライブに誘ったのだが、自分が家庭の事情でいけなくなってしまった。当然、俺も家族なのでその中に入った訳だが、響が一人では心配だからと、自分の分のライブチケットを俺に渡してきたのだ。親にも話を通しているらしく、それならしかたないわね、と快諾してくれたらしい。
てな訳で、今は俺の憧れのアーティスト、ツヴァイウィングのライブ会場に来ていたのだ。
……俺何帰ろうとしてるの？　馬鹿なの？　死ぬの？
遊戯王とプリキュアから見る世界の真理とその法則なんて、下らない事を考えてる場合じゃなかった。なんか、世界の真理を掴んだ気がしたが、そんなことはどうでもいい!!
「さあ、響ちゃん夢のステージへいざ行かん!!　……なんだ、お前ら、俺は（チケットナンバー）７５だぞ!!　ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ!!」
「待って、お兄さん。チケット見せなきゃ入れないよ!!　あと、７５３８３１５です!!」
ガードマンのお兄さんにつかまりますた。
みんなも、ライブではちゃんとティケッツを見せようね！　お兄さんとの約束だ。
売店でサイリウムを買い、指定の場所へ。
「あ～う～、なんだか緊張してきたよぉ……」
「ふ、始まる前からそんなんじゃ、持たないぜ？」
「……お兄さんは、とりあえず他の人の迷惑になるからその地鳴りのごとく振動する脚をどうにかしましょうよ」
くっ、俺が!!　ビビってるっていうのかよ!!　止まれ、止まれ止ま

れぇぇぇ!!!

とまあ、さすがに迷惑になるので一旦止める。震え出しそうになるが、気合で押しとどめる。

いやー、楽しみだなー、ライブ!!

……ん？　ツヴァイウィングのライブ？　何か忘れているような……？

ま、いっか、忘れるってことは重要なことじゃないだろ。

お、ライブ……始まったァァァァァァ!!!

……この後、俺は後悔することになる。なんで忘れてたんだと。忘れていなければ防げたかもしれないのに、と。

「きゃあああああああ!!!!　ノイズよぉぉぉぉ!?」

クライマックスで会場全体のテンションが最高潮に達した時、それは突然現れた。特異災害―ノイズ、人間を殺すことに特化したそれがライブ会場に突然現れたのだ。

会場は阿鼻叫喚の渦に巻き込まれ、一人一人また一人とノイズによって殺されていく。

そうだ、響ちゃん、ツヴァイウィング、ライブ会場……この三つがそろったことの意味を俺は忘れていた。

ノイズ襲撃事件だ。この世界の大きな転換点である大事件。この事件で響ちゃんの回りが大きく変わっていくのだ。

時期が少し早い気がするが、所詮うろ覚えの記憶だ、誤差もあるだろう。しかし、俺はこれを最も警戒していたじゃないか!!　どうして、どうして忘れていた!!　忘れてさえいなければ、もっとやりようがあったのに!!

自分自身の愚かさに反吐が出る。硬く噛んだ口と握った拳から、血が流れる。

自分を責めるのは後だ。俺はやるべきことをやらなければ!!

「響!!」

「は、はい!?」

「お前は係りの人の誘導に従って安全にここを離れろ」
「ぇ？　お兄さんは？」
「俺は……ちょっくら、野暮用だ」
　それだけ言うと、俺は走り出す。
「待って、お兄さ……」
　響が何か言っているが今は気にしている暇はない。確か、このライブ会場でのノイズ被害は最多の1万2千超だったはず。しかも、死因が避難時のドミノ倒しなどだ。
　ならば、それを止める。
　向かうは……ステージ!!

　ステージから見る景色は阿鼻叫喚の渦、この世の地獄を見るがごとしだ。いや、実際地獄(そう)なのだろう。
　人が出口を争い、殴り合う人々、若い男が女子供であろうが関係なく、わが身可愛さで押しのける。そうして倒れ伏した人々を襲うノイズ。

　しかし、ノイズは思ったよりも少ない。
　視線を移すと、そこには鎧を纏ったツヴァイウィングの二人がノイズを殲滅していた。あの鎧がシンフォギアというやつなのだろう。
　よし、この数なら……
　状況を即座に把握して、俺は落ちていたマイクを拾い上げる。さて、ここからが勝負どころだ。生徒会長の力(カリスマ)、見せてやるぜ。
　スウーと息を吸い、大声で叫ぶ。
『ぜーぃん、落ち着けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』
　ピタッと、出口を争っていた観客も、押し合いへし合いをしていた人も止まる。止まってくれる。
　よかった、なんとかなってくれた。
　ノイズが今の声で俺の方に向かってきたが好都合だ。これで観客が逃げやすくなる。
　俺は、また争いが起こらないうちに、さっさと次の言葉を言う。

『いぃいぃいぃいかァァァぁぁぁぁぁぁ!!!!!　よぉぉおおく聞けぇぇぇぇ!!!　ノイズは今、止まっている!!!!　焦らず進めぇぇぇ!!　急な動きに反応してノイズは襲ってきてる!!　だから、ゆっくり、落ち着いて進めぇぇぇぇぇぇ!!!　係り員の人ぉぉぉぉぉ!!!!　非常出口への案内をよろしくぅぅぅぅぅうううう!!!!　いいかぁぁぁぁぁぁぁぁぁアああァァァァァ!!!!　もう一度言う!!!　焦らず進めぇぇぇ!!　動きに反応してノイズは襲ってくる、ゆっくり、落ち着いて進めぇぇぇぇぇぇぇ!!!　安全に!!!　迅速に!!　喋らずぅ!!!!　押さずうううううう!!!!　怪我人は肩を貸してやれ!!!　女子供を優先にイィイィイ!!!!!』

　一旦、集団は止まった。そして、落ち着き冷静になったのか、ゆっくりと、しかし確かに、確実で着実に人数が減っていく。

　……で。

「上手く言ったはいいけど……どうしよ?」

　辺り一面、ノイズノズルノイズノボルノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズノイズ……

　ノイズのゲシュタルト崩壊だ。

　大声を出した俺に狙いを定めたらしい。一斉に俺に向かってくる。

「う、ぅうおおおおおお!!!　し、死んでたまるかぁぁぁぁぁぁぁ!!!」

　向かってくるノイズを身を捻り、ステップを踏むように回避する。

「うおおおお!!!　ステップステップ、1・2、1・2、クルリと回ってイナバウワー!!　ハーイ!　ハーイ!　ハーイ!　ハーイ!　トーントーントーントーン……ハーイ!　ハーイ!　ハーイ!　ハーイ!　トーントーントーントーン……うお!?　あぶねっ!?」

ノイズをゴロゴロと地面を転がって何とか避ける。
死ぬ、死ねる……俺がジェネシスとテニヌをやってなければ即死だった……
ゴロゴロと回避をしている内にステージから転落してしまった。しかも、その時大変なモノを見てしまった。
大変なもの、それは俺の連れである響がノイズに囲まれかけてるところだ。ヴァイウィングの、天羽奏さんがノイズから守ってくれているが一人ではギリギリだ。いつ、その均衡が崩れるかわからない。
だったら、行かないと!! 未来とも約束したのだ。響を守ると!!
バンッと地面に掌底を繰り出し衝撃で跳ね起き、走る。
それにしても、まだ残っていたのか、アイツッ!! っち、大方、自分と同じ境遇な人を助けていて逃げ遅れたのだろう。あいつはそういう奴だった。一人にした俺のミスだ。
グングンと響に近づいているが、しかし、そうして大分近づいてきたところで致命的なものを見てしまう。
そう、響を守っていてくれたツヴァイウィングの一人、天羽奏の武器である大きな槍が砕け散ったのだ。
そして、その欠片の射線上に響がいる事も偶然にしても出来過ぎてやがる!!
「響イイイイイイイイイ!!!! 間に合えええええええ!!!!!!!!」
響がこちらに向いた気がした。
そして……
ズブッと肉に欠片が刺さる音が響き、赤い血が舞った。
「…ぁ」
それは、俺には自分か響かわからない。しかし、一つ言えることは

「……まに、あっだ……ゴフッ!」
ザックリと俺の背中に突き刺さる感覚を感じながら、庇い腕の中にいる響に怪我が無いかを確認し、無傷であることを認識する。
と、同時に吐血、俺の全身からスッと力が抜け、倒れこむ。
不味いな、これ背中から心臓近くに届いている気がする。

「いや、いや、いやぁぁぁぁぁ!!!　お兄さん、お兄さん!!!　死なないで!!　もう、死なないでよぉぉぉぉぉ!!!」
「お、おい!!　しっかりしろ、死ぬな!!」
声が聞こえる、響と多分天羽奏さんだ。
「生きるのを諦めるなッ!!」
そう声を聴いた。元より、死ぬつもりは毛頭無い。
しっかりと、自分の意思を相手に示す。
「おれは、死ねない……いや、死なない、生きる……生きる、いき、る」
まずい意識が混濁してきた……。
しかし、意識があることに一先ず、ほっとしたのか奏さんは表情を緩め、そして、決意を秘めた表情でノイズを睥睨する。
俺はかすれる視界の中で、その表情を見て、思う。
……このままでは死ぬ。
俺が、ではない。この俺達のために戦ってくれているこの人が死ぬ。一瞬見えた彼女の瞳は死を覚悟した者の目だった。
死、それだけは避けなければならない。
ザッザッと、一歩一歩ノイズに、死に彼女が近づいているのが分かる。
……しかし、俺に出来る事はもう、ない。
この怪我では、何もすることが……いや、一つだけだがある。
俺はもう一度、脚に力を込める。
多分、響が俺を泣きながら背負うように肩を貸してくれている。俺は朦朧としていた意識を気合でねじ伏せ、響に声をかける。
「響」
「お兄さん!?　大丈夫、今病院に!!」
「待っ、てくれ……あの人に、あの女の人に言っておかなければならない、ことがある」
「でも」と言いよどむ響をまっすぐ見つめる。俺の視線を受け、仕方ないと言う風に奏さんに声をかける。
「奏さん!!」
「……なんだ!?」

奏さんは振りむいて俺達に声をかけてくれる。
俺は響の肩に捕まり立つ。背中からの出血があるが気にしている暇はない。
「奏、さん……貴方は、俺に、生きるのを諦めるなと、言い、ました。でも、そのあなたが死を、覚悟した、目をしている……あなたも、ゴッフッ!!」
「お、おい、無茶をするな!!」
吐き出した血に構わず、いや、まさに血と一緒に吐き出すように続ける。
「あなたも!! 生きるのを諦めないでください!! 死ぬために歌うのではなく、生きるために!! ゴフッ」
俺の意識は限界だ。
俺に出来るのは言葉を伝えることだけ……
これで、未来が変わってくれることを祈る……
「お、お兄さん!!」
ダメ、だ。もう、意識が持たない。ガクッと膝が折れるのを感じる。響が引き寄せてくれるがもう駄目だ。響に全体重を預けてしまう。
ゆっくりと、暗闇が俺を飲み込んでいく最後に聞こえたのはこんな会話だった。
「奏!! 彼は……酷い怪我だ……」
「翼……あたしはどうしたらいいんだろうな? 絶唱を使うつもりだった、でも、コイツがさ言うんだよ。生きるのを諦めるなって、コイツの方が死にそうだってのに……」
「そっか……なら、私が歌うよ。アームドギアがあれば……」
「いや、お前ももう限界近いだろう!?」
「でも、それしか方法は……」
「あたしも歌う。それでどうだ?」
「そんなことをしたら、奏は!!」
「もちろん死ぬつもりはない、二人ならって思っただけだ」
「……そっか、二人一緒なら、か。わかった、歌おう!! 私の天羽々斬が全部受け止める!!」

「ああ!!　そうだ、そこのお前、ありがとうな。さあ、二人とも離れておけ。な～に、すぐにすべて終わるからよ!!　いくぞ、翼!!」
「ああ!!」

「「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ――――
Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌ　ｂａｒａｌ　ｚｉｚｚｌ――――」」

大きな衝撃音と爆音の中、俺の意識は闇に沈みこんだのだった。

5話　入院生活と決意

オッス!!　オラ、小日向遊策!!
目覚めてみりゃぁ知らねぇ天井でオラワクワクすっぞ!!
いや、ワクワクはしないけど……
通りすがりのキモイイルカ〉ワクワクを思い出すんだ!!
……誰だ今の？　何か体が生えたイルカが何か言っていたような……

「お兄ちゃん!!」
その時、ドアを蹴り破るように入って来た我が妹様が抱き着いてくる。
「おー、未来。元気かー」
田舎のおじいちゃんもかくやという表情で、未来を受け止める俺。そして未来はぎゅっとそのまま俺を抱きしめ、泣き出してしまう。
「よかった……本当によかった……わたし、私本当にお兄ちゃんが死んじゃうんじゃないかと思って……怖かった!!」
もっと力を入れて幻ではないここに俺が存在しているということを確かめるように、そして、もう手放さないというように、強く、強く抱きしめる、未来。
俺はそんな未来の様子を見て帰ってこれたと実感すると共に、未来が泣き止むまで、無言でそっと頭をなで続けていたのだった。

「え？　もう3ヶ月もたっているのか!?」
未来が落ち着いたのを見計らって話を聞くと、衝撃の事実が判明する。なんと三ヶ月とちょっとの歳月がたってしまっているらしい、それにしても俺よく寝ていたな……
「うん、怪我も大分良くなってきていたのに全然目覚めないから、もうこのままなのかなって……」
「心配かけた、悪かった」
「ううん、私が無理を言ってついて行ってもらったんだから、私のせい

だよ……お兄ちゃんは、私との約束を守って響きを庇ってそうなっちゃったんでしょ？　そもそも、私が響をライブに誘ったりしなければ……」
「おっと、それは無しだぜ、未来さんよ。俺は行って楽しかったし、響も楽しめたと思う。だから、お前が責任感じる必要はナッシングだよ」
　その言葉に未来は納得していないような顔をして、なおも食い下がろうとする。しかし、俺は、しー、と未来の口に人差し指を当て強制的に口を開かせない。そして、トドメとばかりに一言。
「あえて何が悪かったと言えば、ノイズがすべて悪い。それで終わりだろ？」
　俺がこの話はこれで終わりだと打ち切らせる。
　おっと、そうだ。こればかりは聞かなければならないな。
「響は？」
　未来はその言葉を聞くと、少し顔を伏せる。
「……お兄ちゃん、響の事なんだけど」
　そこから未来は語り始めた。なぜか責任を感じて俺を避けているらしいこと、そして、今回のノイズ事件のせいで学校でいじめられていることだ。
　今回のノイズ事件はかなりの規模の事件であったため、いろんな憶測が飛び交い、生き残った人たちが不当な評価を受けているらしい。
　響もそれに巻き込まれ、いじめられてるみたいだ。家にまで来て、死ねなどを書いた紙を貼ったり、スプレーで壁を汚されたり、石を投げ込まれガラスを割られたり。……犯罪じゃないかこれ？　と、聞いてみたが、警察は動いたが相手が学生であることと直接相手を傷付けていないことを合わせ、厳重注意くらいしか出来ないらしい。まあ、ガラスを割った奴らは罰金でしょっ引かれたらしいが。
　なるほど、なら生徒会長として、響の友として、ほっておくわけにはいかない。
「わかった、早く復帰して勤めてみるよ」
「うん、お兄ちゃん、生徒会長だもんね。早く良くなってよね？　生徒

会長が長期欠席って示しがつかないもの」
「おう」
そう言って、未来は帰っていった。
未来が帰った後の病院の個室は広く感じる。
さて、次にすべきことは、と……

「……なるほど」
この空白の三か月間の穴埋めとして、情報収集のため、俺は未来が持って来てくれていた物の中にあった三ヶ月分の新聞を読んでいた。
その新聞には大きな見出しでこうかれていた。
『今世紀最大のノイズ事変発生　被害者数５０００人超』
中を一瞥して、読んだ記事の内容を思い浮かべ頭で反芻（はんすう）する。
『人気アーティスト、ツヴァイウィングのライブ会場で起こった悲劇より一ヶ月、そのライブ会場で起こったノイズの襲撃により行方不明者・死者あわせ５０００人超確認された。
５０００人を超える人々が死んだこの事件は、ノイズが起こしたと思われる事件の中で最大の被害者数であった４５８２人を超え今世紀最大の被害者数を更新した。これは、人的な被害も多かったことが確認されており。（中略）生き残った者たちが証言するに、何者かが状況を冷静に考え先導し、それによって冷静さを取り持ったスタッフの活躍が無ければ、被害はさらに拡大したであろうと予測される。
（中略）
なお、この事件により大怪我を負っていたツヴァイウィングの二人は病院に運び込まれたが、現在は治療が完了し、復興ライブなどをしている』
「そっか……、７０００人とツヴァイウィングは、奏さんは生き残ったんだな……よかった」
そう俺は独り言ちる。それだけで、救えた人がいるという事実だけで、少し救われた気がした。
全員を救えるというほど思い上がってはいない。が、しかし、もっと早く思いだせていたらもう少しなにかやりようがあったのではな

いかという思いが、ひどく俺を焦がす。
誰かを助けられるようなヒーローにでもなったつもりか、所詮お前に誰かを救うようなことは出来ない、と俺の中のナニかが言う。それでも、この悔しさと後悔を、俺は忘れない。俺の怠慢、俺の傲慢、俺の怠惰が招いた……俺の罪だ。
……俺は決めた。俺は、きっと、いや、必ずなってやる。
誰かを助けられるようなヒーローに。
俺は決意で拳を静かに、しかし、硬く強く握りしめた……

6話　全校集会の時間だオラァ!!

俺は非常に緊張している。
俺が目を覚まして早2週間、リハビリも終わり、昨日学校に登校した。
そして、職員室に行き教師の皆さんに、翌日、つまり今日のことだが、緊急の全校集会をするように手配させてもらった。
そう、この学校の現状、ライブの生還者がいじめられるという現状を打破しなければならない。
どうやら、響にのみ矛先が向いているようだ。
それは未帰還者である俺の同級生であり、サッカー部の人気者ノズル君の彼女が最初の原因であるらしい。
彼女はどこかで響がライブ会場の息の頃だと知り、詰め寄ったらしい。なんで、あんたが生きていてノズル先輩が死んだんだ、と。
それに、今世間で色々な憶測が飛び交っていて、その中の悪評、今生き残っているものは自分だけ生き残ろうとして、誰を犠牲にした者たちだ、など言われているいることなども起因し、学校でのいじめにつながったらしい。
そして、いじめが深刻化している理由として、この学校で生き残ったのは響のみだと思い込まれていることが原因だと、事前の調査で分かっている。
未来は言っていないし、響が生き残ったことを軽々しく言う訳もない。響がライブ会場から生還したことを知っている人物もいるはずだ。
きっと、響がここまでいじめられるのはライブ会場にいて生き残った者は他にもいるはずなのに、その人たちの分のひんしゅくも響一人に集中しているためだろう。
ならば、どうすればいいのか?
全校集会その場で、俺は壇上に立ち一礼、そして、ゆっくりと話し始める。
「皆さん、おはようございます。突然ですが、皆さんにお話がありま

す。久しぶりに出て来て何を言ってるんだと思う方もいるでしょうが、少々お付き合いください。実は三ヶ月前、ある事件に巻き込まれました。……お気づきの方もいるでしょう。そう、あのツヴァイウィングのライブ会場の事件の場に自分もいたのです」

そう簡単だ。そのベクトルを分散させればいい。自分から事件の被害者だと名乗り出て、怒りの矛先を俺にも向けさせる。つまりは、そういうことだ。

「その事件の際、怪我を負ってしまい、三か月も休むことになってしまいました……そして話はここからです。療養中に悲しいことを聞きました。ライブ会場の生存者が世間から冷遇され、更に死ね、税金泥棒とそしられ、いじめを受けているという噂です」

そこで一旦会話を区切り、周りの反応を見る。周りは困惑の雰囲気のようだ。

それを見て、スッと息を吸い、続ける。

「……この話を聞いた時、俺はとても悲しい気持ちになりました。……皆さんに問います」

俺はグッと拳を握って、全生徒に訴えかける。

「自分は、俺は死んだ方がよかったのでしょうか!! こうして復帰できたことを俺はとてもうれしく思っています。でも、俺は死んでいた方がよかったのでしょうか!?」

瞳に涙を潤ませ、続ける。

「お願いします。そんなことは言わないでください。俺はあの時、言いようのない恐怖を感じました。自身が死ぬかもしれない、そんな恐怖からやっとこの場に帰って来たんです。きっと、ほかの被害者たちも同じ気持ちです。だからどうか、この学校内だけでもいい。俺達を暖かく見守ってくれませんか？ どうか、お願いします!!」

俺は全校生徒の前で、頭を下げる。

そうして、全校集会はお開きになった。

と、まあ、ここで俺がしたかったことが3つある。

1つ、自分が事件の被害者だということをアピールし、被害者が響

だけじゃないということを認識させること
２つ、哀れな被害者を演じ、全校生徒の慈悲と同情を引き出すこと
３つ、全校生徒にやってほしいことをストレートに伝えることにより、この件に関する方向性を変えること
の３つだ。
しかし、まあ、この程度でいじめが無くなることはないだろうが、軽くはなるはずだ。
とりあえず、生徒会長が被害者ということであまりひどく言えないことがストッパーになるはずだし、周りの空気にあてられていじめをしているケースだってあるはずだ。今回の事で少し冷静にはなるだろう。
団結すべき時は団結するような校風に俺はしてきた。今までは、悪い風に団結していたが、方向性を変えてやるだけで変わるはずだと俺は信じている。

時は流れ、お昼休み。俺は、響の教室に来ていた。
そっと、中をのぞいてみるとそこでは、響が未来を含め６人くらいの女子たちと昼食をとっていた。
最近では見ていなかった笑顔で、だ。
まだ、嫌味を言ってくるような奴もいるようだが、周りの女子たちや他の人達が響を庇っているようだ。これなら、安心だろう。
俺は、安心して、そっとその教室を離れたのだった。

「ね、ねぇ？　さっきの、あの教室の扉から見えたすごい目は何？」
「ああ、あれ生徒会長だよ。きっと、響が心配で来たんでしょうね」
「なるほどぉ、確かあの会長、未来と響の事となると必死だよねぇ」
「うん、うん、俺なんか小日向さんに話しかけただけで、すごい目で見られたぜ？」
「多分、今回の全校集会も響のためなんだろうなと思うわ」
「「本当に仕方ねーな、あのシスコン会長」」
その後、ハハハと言う笑い声が教室に響いたという。

小日向会長のシスコンを見守る会、という謎の会があり、その会が遊策の働きかけにより一致団結し動いた結果であり、遊策が思った一致団結とは、かなりかけ離れているということを遊策は知らない。

7話　迷いと心配と響の覚悟

おかしい、と俺こと小日向遊策はそう思った。
何がおかしいかと聞かれると、響だ。
最近、響が俺に構いに来ないのだ。昔は、アピールがうざいくらいにあったのに最近なくて寂し……じゃなくて、落ち着かない。
と、言うか、俺を避けてさえいるような気がしてやっぱり、寂し……じゃなくて、悲し……そうじゃなくて……いや、自分の気持ちを偽ってもしょうがない。寂しくて悲しいんだ、俺は。
なんで避けられるんだろうなァ……なんだか、無性に死にたくなってきた。
鬱ダ・ｓｉノウ。……なんかこう書くと、暁切歌ちゃんのカットイン技名みたいだよね。　うん、至極どうでもいい☆
まあ、死ぬのは響に真相を聞いてからにしよう、そうしよう。
廊下を歩く、響を見つけ声をかける。
「と、いう訳で、響～」
「わ!!　お、お兄さん!?　え、なに?　どういう訳ですか?」
「そこはあんまり関係ない。……いや、何、俺を最近避けてるみたいだったからさ。何かあったんじゃないかなって。……それで、何かあったのか?」
あんまり、まどろっこしいのは好きじゃない。だからこそ、語尾を少し強め、ド直球に問い質す。
「あっ……ッ。……ごめん」
「あっ、おい!　ちょ、待てよ!」
しかし、響は何かを言おうとしたが、口をつぐみ、そのまま駆け出して行ってしまう。
「はぁ……」
俺は家のソファーに腰を下ろし、ため息を吐いた。そこに、未来が

現れ心配そうに近づいてくる。
「お兄ちゃん？　どうしたの？」
「い、いや、響に避けられててさ……直接、なんでだって、聞いたんだがやっぱり逃げられちゃって……しかも、手に小さくない、傷があったし何か危ないことでもやってんじゃないかと思ってな。そうだ、未来、お前何か知らないか？」
「……さぁ？　私は、響じゃないし、それは分からないよ」
そう言って、手を後ろに持っていって、リボンをいじる未来。
……嘘だ。未来がこうやって意味もなくリボンをいじるときは、何か俺に隠し事をしている時だ。
「そうか……」
しかし、俺は言葉を濁し、それ以上追及することをしなかった。いや、出来なかった。
あの響の反応。それと、あまり隠しごとはしなかった未来が隠そうとするのだ。何か、俺が知ってはいけないことがあるのだろう。
「ま、いつまでも考えていてもしょうがないな。さあ～て、母さんたちは今日いないんだったな……俺が作ってやるよ!!　何が食べたい？」
そう考えた俺はあえて明るく振る舞い、この話題を流すことにした。
未来もホッとした表情で、「じゃあ、カレーが食べたいな」と、俺の意見に同調する。
「へへ、俺のカレーは絶品だぜ？」
「うん、知ってるよ。私はチキンカレーがいいな」
「おう、まかせとけ!!」
俺はエプロンをしつつ、袖まくりをして、未来のリクエストに答え、キッチンに入る。
俺は、野菜を切りつつ思う。
今は、まだ踏み込めない。きっと、いつか話してくれることを信じよう、と。
そこからは淡々と野菜を切る音だけがキッチンに響いていた。

『ねえ、本当にお兄ちゃん言わなくてよかったの？』
私のスマホから親友である小日向未来の心配そうな声が聞こえる。
「うん、だって巻き込めない。きっと、知ったら、お兄さんは自分から巻き込まれに来ちゃうと思うから……」
『響……』
そうだ、そうやって、私や未来や他の人を助けてくれた。だから、きっと今度も私のことを知ったら、来てしまうだろう。それでまた傷ついて、それでも、私達の前では笑うのだ。
だから……
「だから、今度は私が守るんだ。お兄さんが、もう傷つかなくていいように!!　この力で、この拳で!!」
決意と共に、ギュッと、胸の前で揺れる赤いペンダントを私は握りしめた。

無印開始
8話　会合の装者

俺俺、俺だよ俺、小日向遊策だよ！

色々あったライブ事件から2年とちょっとが経った。

俺は今では、中学とは別の町にあるリディアン音楽院付属高校（男女共学）に通ってて、妹と妹分の二人は私立リディアン音楽院高等科に通っている。

まあ、俺19歳だけどな!!　……仕方なかったんだ!!　だから、そんな蔑んだ目で見るなァァァァ!!!!

と、まあ、それは置いておいて……

それにより寮通いになったので、別の寮の二人とは離れることになった。まあ、週に一度は、お好み焼き屋のフラワーでバッタリ会ったりしているので寂しくはないが。

ちなみに、今でも響に避けられている。

なんで!?　はぁ、どうやら、時間が解決してくれる問題ではなかったらしい。バナナでつれねーかな……アホじゃあるまいし、ダメか……

と、まあ、そんなこんなで元気でやっている。問題は解決してないけど……

そうそう、ところでこの町、ノイズ被害が多いのだ。町を歩けば、一ヶ月に1回くらいの頻度でノイズがやってくるのだ。

で、何でこんな話をしたか？

察しのいい人ならわかると思うが、只今、現在ノイズの襲撃を知らせる警報が頭上で鳴り渡っている。人が歩けばノイズにあたる、と。うん、実にありがちなパターンだね。

ノイズ出現に対し、俺は避難民とは逆の方向に突っ走っていた。ノイズ警報が聞こえなかったり、逃げ遅れた人がいないかを探すためにだ。

何でそんなことをしているかって？　あのライブ会場での事件を

皮切りに、自分にできることをしようと思い、こうやって逃げ遅れた人がいないかを毎回見るようにしているためだ。
「ママ、ママどこ？　ママ～」
いた、６歳くらいの男の子だ。多分さっきの警報の折にシェルターにどっと人が押し寄せていたので、そこで母親と逸れたのだろう。
俺はすぐさま駆け寄り、その子の手を握る。
「大丈夫？　ここは危ないからお兄さんとシェルター行こう！」
「えっ、でも、ママが待ってなさいって」
「多分、お母さんもシェルターにいるよ、だから行こう!!」
「知らない人についていっちゃだめって、ママが……」
えー、教育がちゃんと行き届いてるなぁー……めんどくせぇ!!　感心するけど、緊急時にこれはめんどくせぇ!!
「わかった、なら君が俺についてくるんじゃなくて、俺が君についていく。それで、一緒にお母さん探そっか？　それならいいだろ？」
「うーん、それなら大丈夫!!　わかった！」
うーん、さすがにここまでは教育できていなかったらしいな……チョロイぜ、と思いつつゲス顔をしながら、歩き出したが偶然コンビニに奴等がたむろっていた。
そう、ノイズの軍団だ。
……っーか、コンビニにたむろするとか、お前らあれか、一昔前の不良か。
せまる～ノイズ～、殺戮の集団～♪　我等を狙う～、色んな影～♪とか何とか歌っている場合ではない。こちらに気づき、追ってきた。
「っつ!?　逃げるぞ!!」
「あいあいさー！」
少年の手を握り、走り出す。必死に逃げるが、如何せん少年は６歳くらいだ。すぐに限界が来る。
「あっ」
転んだ。手を咄嗟にぐいっと引っ張り、俺は少年を抱える。そのまま、１００ｍ９秒フラットの速さで走り出し、ノイズを振り切ろうと

する。
グングンと距離を離すことが出来た、が、しかし、なぜかは知らないが回り込まれてしまう。どんどんと追い込まれ、ついには周りがノイズだらけになってしまった。
俺の腕の中にいる少年が怯えた様子で俺に大丈夫か聞いてくる。
「お、お兄さん、ぼくたちどうなってしまうんでしょう？」
「大丈夫だ、君だけは逃がして見せるから、お兄さんに任せてしっかり捕まっていてくれ」
一か八か、自らノイズたちのいる方に踏み込み襲い掛かってくるノイズをすべて見て避けるという賭けに出ようとした。
その時、一発の銃声が聞こえる。その銃声によって、俺に向かってきていたノイズが打ち抜かれ、炭へと変わる。
そして、フワリとスカートを揺らし、赤の少女が俺の前に降り立った。……あっ、黒。
……俺はさっき見た光景を忘れるべく首を振りつつ、俺の前の少女に声をかける。
「君は……？」
「っは、あたしのことはどうでもいい。今、大事なのはその子のことだろ？　まあ、安心しろ、このあたし様がいるからな!!」
赤色の少女が俺と子供をかばいつつ、ニヤリと笑いノイズに銃を向け宣言する。
「さぁて、蜂の巣になりたいのはドイツからだ？」
これが俺とシンフォギア装者との――――雪音クリスとの出会いだった。

9話　集う装者

圧倒的、その一言に尽きる。
少女の放った弾丸は的確にノイズの脳天を打ち抜いていき、そのことごとくを炭へと変え、大地に返えす。さらに、少女の歌う歌は聴くものに勇気を与える、そんな歌だった。
そして、俺は思う――――
あ、そういえばこれ、戦姫絶唱シンフォギアだった、と。
そう思考できるくらいには、赤い彼女が来て安心していたのだろう。俺は死角から迫るノイズに気づかなかった。
気づいた時にはもう遅い。すでに回避できない所、つまり、抱えている少年のすぐ近くにまでノイズたちが迫っていた。赤い少女も俺たちに気づいたが、遅い。
俺はとっさに少年をノイズの射程から逃がし盾となる。
そして――――
「全く、だから先走るなと言ったんだ」
声が聞こえた
次いで、剣戟の音、槍を振るう音、そして、拳を振る音が聞こえてくる。

俺の周りのノイズが炭へと変わり、俺達を救った者の姿が見える。
「雪音。まずは、住民の安全確保が先だといっただろう!!」
ライブ会場で見たままの青……風鳴翼が俺の左側に降り立ち、そういった。
「まあ、いいじゃん。あたしらがこうして来てたんだし、大丈夫だろ」
いいつつ、これまたライブ会場で見たままの橙に近い朱……天羽奏が、今度は右側に立つ。
「お兄ちゃん!!　大丈夫だった!?　怪我してない?」
そして見慣れた奴……響が見慣れない黄色で、俺の後ろから現れ、ベタベタと俺の体を触る。
……これは一体?

俺の戸惑いを残して、響が「大丈夫、すぐに殲滅してくるからね！」といって、ノイズに向かっていった。
そこから、ワンサイドゲームだ。
俺たちにノイズが近づくことさえなかった。信じられないほどの速度で、響と奏さん、赤い少女で瞬く間に対象にいたノイズが倒されてしまった。あっ、翼さんは俺たちを守ってくれてます。
それにして、色々疑問点がありすぎて困る、というか、戸惑う。
なんで、雪音クリスがここに？　逃げたのか、まさか自力でフィーネから脱出を!?、とか。何で、ガングニールと融合していない響がガングニールで戦っているのか、とか。
しかし、いつまでもそうしてばかりもいられない。
ノイズの殲滅が終わったようだ。
俺は、ボーとしていた頭をふり、意識を現実に戻す。
とりあえず、お礼を言わなきゃな、と俺が四人に向き直った時。

カチャリッと何かが俺の腕にしまる音がした。
「カチャリ……？　って、なんじゃこりゃぁ!?」
俺の腕には、よく漫画の奴隷とかがはめているようなゴツイ腕輪がはめてあった。
この腕輪をはめた張本人、風鳴翼が言う。
「あなたには、私たちに同行してもらいます。ちなみに拒否権はありません」
「えぇ……」
そうして、俺はドナドナよろしく、その場から連れ去られたのだった。

１０話　想いの平行線

ぼくはせんとうじゅーと!!
ノイズからあやしいお兄さんとにげてたぼくは、ついにノイズにかこまれてしまったんです!!
そこにきれいなおねえさんたちがあらわれて……
プッ…ククク……
なぁーんちゃって☆
可笑しくて腹痛いわぁｗｗｗ（賞味期限切れ）
ゆーと？　だぁれそれぇ？　俺、遊策☆
鈍いなぁ、俺が遊策だよォ!!
とまあ、茶番を演じてしまったが、絶体絶命の、ピンチの、ピンチの、ピンチの連続、そんなときにシンフォギア装者が来てくれたことにより俺たちは助かった。
現在、俺は事情聴取と機密保護のための書類受け取りのため特異災害対機動部策二課の本部に連れてこられている。
そうそう、少年君とは途中で別れた。二課の人が親元に帰したらしい。
現在、事情聴取と機密保護のための書類も書き終わり、軽く装者の説明を終えて、リディアン音楽院の地下にあった特異災害対策二課の本部の一室でお茶菓子をいただいている。
「で、響。なんで、お前はここにいるんだ？」
「うっ……ななな、なんででしょうねーピュ～」
下手な口笛の真似で誤魔化そうとする響、しかし、俺は逃がさない。
「誤魔化すにしても口笛ふけてねーぞ!!　それにしても、口でピューとか言うやつ始めてみたわ!!　そこはだな……」
「そこ!?　大切なのそこですか!?」
いや、もちろん、違う。話が脱線しかけたがしっかり路線を戻す。
「いや、大切なのはお前がここにいるってことだ。前から何か隠してることは知っていた。もう、巻き込まれてるんだ。話してもらうぞ？」

響は俺の話すまで逃がさないという雰囲気を感じたのか、はぁ、とため息をつき、自身の境遇について話始めた。
「私こと、立花響は秘密のエージェントである!!　私達、秘密のエージェントによって、平和は守られているのだ!!」
「いや実際、あの風鳴って人や櫻井って人から、聞いた話からすると、その通りすぎて困るんだが……てか、俺が聞きたいのはもっと詳しくだよ!!　いつから、とか、未来は知っているのかとか」
　ま、あの時の反応から知っているだろうことは予想できる。
「いつからっていわれると、ライブの日から数日後、機密保護のためリディアンに来た時から。未来が知ってるかで言えば、知ってます」
「……は?　え、ちょっと待て、あの日からずっとか?　ずっと戦っていたのか?」
「はい」
　いや、二コッと笑って、はい、じゃねぇよ!!　2年前からだなんて、全く予想外の真実をサラッと語るんじゃない!!
　俺は全く理解が追いついていなかった。
　やっと絞り出せたのは、疑問の声だけだった。
「じゃあなにか、俺にかかわらなかったのは……」
　その言葉を聞いた時、響の顔が少し曇ったのだが、俺はそれに気づかなかった。それがいけなかった。そして、話しずらそうにぽつぽつと話をし始めたころには遅かったのかもしれない。
「……巻き込みたくなかったから、ですよ」
「いや、でも、それでも!!　俺は話してほしかった!!　もし力になれることがあるなら、俺は!!」
　この言葉が響の逆鱗に触れてしまった。我慢していた最後の抑えが切れ、そう俺が話した瞬間、響は声を上げた。
「私は!!　それが嫌だって言っているんです!!　私が話したら、そうやって関わろうとするでしょう!?　それで、いつも危険なことをするんだ!!　それが嫌だから、私は、私は!!」
　そう言った響の顔には雫が伝っていた。この時初めて気づいた。俺は響を追い詰めていたのだと。

俺は、何が響を怒らせたのか分からないまま、どうにか落ち着かせるべく、言葉をかけようとする。
「いやでも……」
しかし、それは油に火を注ぐ行為にしかならない。
「お兄さんは、お兄さんは何もわかってない!! いつもいつも、私や未来、それだけじゃなく他の人を助けるため、命を懸けてくれて……でも、私は何もできなくて……せめて、せめて私もそうやって、誰かの、お兄さんの平穏を守れたらなって!!」
響は涙を拭おうとするが、涙があとからあとから溢れ出し止まらないようだった。
……ああ、これはずっと思ってきたこと、心からの言葉なのだろう。それがわかってしまった。
元々、正義感と責任感が強くて、困ってる人を見たら助けるような子だった。だからこそ、余計に背負ってしまったのだろう。俺の怪我を見て、自分のせいだ。自分は何もできていない、と思い込んで。
俺はこの子に、なにか、なにか言わなければならない。何て言ったら正解なのかなんて、わからない。でも、言葉は想いを伝えるためにあるのだから。
俺も心からの言葉で、ぶつかろう。そう決意し、口を開く。
「なあ、響……」
俺が言葉を紡ごうとした、丁度その時、響の持っているスマートフォンが鳴り響く。スマートフォンを確認した響は席を立つ。
「……訓練の時間だから、行くね」
「ちょと、ま……行っちまった……」
そう言って、俺の静止の声も聞かずにこの場から走って出ていく響。
響の涙の軌跡だけがその場に残った。
ああ――――
何も言えなかった……クソ……
俺は、その場で頭を抱えるしかなかったのだった。

11話　変身

腹の調子が治まった、小日向遊策です。
遅いかもしれないが、響の後を追い二課の廊下をさまよってます。
すると、向こうから歩いてくる男の人が一人。
確か、俺のもろもろの手続きを手助けしてくれた人で、名前は確か、緒川さん。
丁度いい、彼に道を聞こう。
「すいませーん」
「おや、どうしましたか？」
俺が近寄って行くと、親切に接してくれる。
その後、教えてもらった通りに道をたどっていくと、第3シュミレーター室と書かれた部屋があった。
俺はその部屋に入る。すると、一番初めに目に入ったのは、ノイズに囲まれ止めを刺されそうになっている響の姿だった。
何でノイズが？　それよりも響を助けないと!!
と、俺は良く考えずに飛び出し、響の元に走りよる。
もう後先考えていなかった。ノイズ相手にただの人間である俺にいったい何が出来るのか、なぜここにノイズがいるのか、そもそも俺が今入った部屋がなんであったのかを。
ただ響の元に一刻でも早く行かなければ、それだけだった。
「響イイイイイイ!!!!」
叫んだ瞬間、光が俺の胸から溢れ出た。その光に導かれるまま、駆け出し　歌う。
「Ｂｅ　Ｓｔｒｏｎｇ　ｓｏｍｅｗｈｅｒｅ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ」
光が治まり、何かを俺は纏っていた。
『ガングニールだとォ!?』と、いう声が聞こえるが知ったこっちゃない。
これは――良き力だ……この力は心地がいい。これならば、響を助

けられる。そう確信した。
「そいつから!! 離れやがれぇぇぇぇぇ!!」
響を追い越し、ノイズに向かって拳を放つ――――ことが出来なかった。
ノイズが唐突に消え、今まで見えていた景色も消え失せ、殺風景な部屋へと変わった。
「へ？　え？」
拳を空ぶったままの体制で動きが止まる俺。
まったく状況が理解出来ていなかった。
「お、兄さ、ん……？」
響が信じられないものを見るような目で俺を見ている。
そして、黒服の職員達が何処からともなく出て来て取り押さえられる俺……
……なんなんだ、これ？

その後、色々あった……
精密な検査をして、あることが分かった。
それは、俺の背中、心臓に近い部分に刺さった、天羽奏さんのガングニールの破片が俺と融合し、本来は纏うことが出来ないはずのシンフォギアを纏わせたらしい。
そう、原作でいう響と同じ状態と言ったらわかりやすいだろう。
ギアを作った櫻井了子さんも、「ギアの破片からもギアを作ることが可能だということは、響ちゃんのガングニールで証明済みだけど、まさか、人と融合して覚醒するなんて……」と、予想外の事に、ビックリしつつも研究者として調べがいがある!!　と、目をキラキラさせていた。
……腹の事はまだ根に持ってるからんなァ、櫻井了子ォ？
まあ、そうやって色々あり、午後９時を回った所でやっと解放された。
それにしても、結局、響とは話が出来なかったなと、思いながら俺

が帰ろうとしていると……
「お、おい、お前!!」
と、後ろから声が聞こえた。
クルリと後ろを振り返り、見ればこちらに走ってくる少女が確認できた。
「あん？　確か……」
俺を呼び止め、走ってくる、灰色に近い白がかった銀髪の少女。
俺は先ほどの事を思い出す。
銀髪をいじりながら、『ゆ、雪音クリス……よろしくな』と少しぶっきらぼうな挨拶をしてきた少女。……そして、神様からの指令によると、俺の恋人候補。
「雪音クリスだったよな？　俺に、何か用か九日十日？」
駄目だな、実際に面と向かって会うとものすごく緊張する。
とにかく小っちゃかわいい。それが、彼女を言い表すとしたらの印象だ。
それでいて、消えそうな儚さはなく、しっかりとした存在感を漂わせる。そんな娘だった。
そんな彼女は、俺に追いつくため走ってきたようで、肩で息をしながら息を整えてから、本題を切り出す。
「いきなりで悪いが、私と会ったことあるか？」
「いや、知らん。会った事もあるかもだが、結構いろいろな所いってるからわからないなぁ」
彼女の質問に即答する。実際、俺は多くの人とかかわって来た。恥ずかしい話だが、俺はあまり物覚えがいい方ではない。そのため、どこで会ったのか、会ってないのかは覚えていないのだ。
しかし、彼女は諦めず俺に更なる情報を与える。
「バルベルデだ!!　バルベルデで何か思い出すことは？」
なるほど、バルベルデか……うーん、いろんな人がいたから絞り込むのが大変だな。
麻薬組織を2～3ぶっ潰したし、テロリストとも戦った記憶がある。

まあ、それらは表立って行動してなかったから、別として、公に活動したのは、あれくらいかな……？
「うーん、兄弟子とボランティアに行ったということならあるが、確か爆破テロ中で兄弟子と町中を駆け回ったことしか、記憶に残ってないな。それがなにか？」
「そっか……やっぱりそうだったんだ」
何か納得したようなしぐさと共に、ボソッと何かつぶやいたかと思うと、いきなり頭を下げてきた。
「ありがとな」
「なぜそこで感謝⁉」
「ああ、あたしと家族はあんたに救われたんだ」
ああ、じゃねーよ！
いや、マジで救った覚えはない……ん？　いや、待てよバルベルデ？　どこかで会ったな……どこだ？
「音楽祭の会場、爆破テロ、音楽家の夫妻、何か思い出すことはないか？」
「音楽家の夫妻、雪音……」
脳裏にひとつの光景がよみがえる。
爆破間際のコンサートホールで大人三人と子供一人を抱えて飛び出たことがあった。……まあ、俺も十代前半の子供だったが。
んで、チラッと見えたコンサート案内に英語で、雪音と書いてあったような。
「もしかして、君はあのときの女の子⁉」
「そうだ、ずっと感謝を言いたかったんだけどな。言う暇もなく他んとこにトンでいっちまったからな」
「ははあ、それでさっきのありがとうか。別に気にしなくてもいいのに、律儀な奴だな。俺たちはやるべきことをやっただけだって」
兄弟子のＦＧ崎ボス男さんは、色々な国にいってそこで助っ人をしている。俺もそれに同行しているだけに過ぎない。まあ、結構荒事になること多く。命がけなのは確かだが、やるべきことをしただけというのが正しい。

……あの人に同行すると、更に厄介ごとに巻き込まれることが多かったのは、俺のトラブル気質のせいだろうなぁ。俺はかなり厄介ごとに巻き込まれやすい。多分、留年したのもこの気質のせいだ。

ま、でも、兄弟子には悪かったが、それで救われたっていう人がいてくれるのは正直言って無茶苦茶うれしい。俺のトラブル気質もよかったと思える。

「あたしからは、それだけだ。引き留めて悪かったな。帰るんだろ？」

「まあ、そうだが……あ、そうそう、俺はお前じゃない。小日向遊策、遊策と呼んでくれ」

「ああ、そうだな。なら、あたしもクリスと呼んでくれてかまわねぇよ」

「わかったクリス、んじゃ、ちょっと厄介なことになったから、明日からもよろしく頼むぜ！」

「あ、じゃ、またな」

別れた瞬間、クリスの携帯が震える。後ろから，スマホを取り出して電話に応答する声が聞こえた。

「知らない番号からだな？　もしもし……誰だ、お前……パパ、ママ!?

……一体、何が目的だ」

小声だったが、確かに聞こえた。

何かトラブルか？　と、思った俺は怪訝な顔で振り返る。

クリスは俺の視線に気づくと曖昧に笑って、そそくさとその場を立ち去った。

……なんだったんだ、今の？

あたしは人目がある場所を避けて、あまり使われない女子トイレの中に入り、電話に応答する。

「お前は一体なんだ？　パパとママを人質にして、あたしに何をさせやがる!?」

突如としてかかってきた電話は、あたしのパパとママを人質にしたという電話だった。

ご丁寧に、目隠しをされ縛られたパパとママの動画も一緒に添付さ

れて、だ。
『ええ、私は駒が欲しいの。自由に動いてくれる駒が、ね？』
甲高い、ボイスチェンジャーでも使っているような声は続ける。
『貴女には、二課を裏切って、色々してもらいたいのよ』
「はあ？　あたしに二課を裏切れ!?　ふざけてんじゃ……」
『あら、断ってもいいのよ？　ただし、あなたの両親は灰になってもらいますけどねぇ？』
そう言って、縛られたパパとママの近くにノイズが召喚される。
「やめろ!!　一体、何が目的だ？」
『貴女が知る必要はないわ。ただ私の駒になればいいの』
生死の声をかけると共に、せめて相手の目的を知ろうとするが、先程と同じ情報くらいしか得られない。
ノイズを操れるならば、駒なんぞ要らないだろうに……しかし、ここは従うしか、ない。パパとママを人質なされたら、私は従うしかない……見事にあたしの泣き所をついてきたって訳だ。
思わず、舌打ちするが、何の解決にもなりゃしない。
「っち!!　……あたしは、何をすればいい？」
『ふふふ、いい娘ね、クリス』
相手の声は楽しそうだった。ああ、思い通りに進んで、さぞ愉快だろうさ。
だが、そうは問屋が卸しやしねぇぞ……
必ず、絶対だ!!　テメエの正体を看破してやる!!　そんでもって、パパとママを取り戻す!!
その時まで、首を閻魔様にでも差し出して待ってやがれ!!

12話　罪のノイズ

俺は今日もまた二課に来ている。今俺がたたずんでいるのは、昨日俺が痴態をさらした第3シュミレーター室だ。

今回は戦闘訓練と題したギアの起動確認と戦闘力の測定だ。

それにしても戦闘訓練か……

黄老師やボス男さんとの修行を思い出すなぁ。

『エオンフヤーの極意は流しにある!!　受け流しなど、攻撃を流す技が多いのはそれが理由だ!!　攻撃の流れを感じろ!!』

『はい!!　ボス男さん!!』

そう言って、絶え間ない攻撃をくらわされた記憶が、ガガガガガｇ……

『よし、準備はいいか、遊策君。……と、どうした?』

っは!!　意識が飛んでた……この事は考えない方がよさそうだ。

司令、風鳴弦十郎さんが、心配している。とりあえず、返事をしておかなければ。

「大丈夫っす、全然行けます!!」

『よし、仮想ノイズ展開!!　さあ、始めてくれ』

司令が指示を出すとノイズが十体ほど現れる。ほえ～、それにしてもよく出来てるなぁ……本物のノイズとそっくりだ。

本物のノイズを再現した立体体感映像とは……科学の力ってスゲー。

まあ、感心している場合ではないな!!　よ～し、俺の力を見せてやるぞ!!

胸に浮かんだ歌を歌う。

「Ｂｅ　Ｓｔｒｏｎｇ　ｓｏｍｅｗｈｅｒｅ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ」

それと共に、俺の身に鎧が纏われていく。

まず、シャツとズボンが形成され、その上から赤い羽織とプレートアーマーが装着される。次に、腕にガントレットが装着され、脚に具足が纏われ、そして、最後にヘッドギアとバイザーが装着、ギアを纏

い終わる。
和洋がゴチャ混ぜになったようなデザインだが、俺は気に入っている。ちなみに、鎧部分はすべて赤と白、シャツは黄色で、ズボンは黒だ。
正直、派手すぎて目立つなぁ、が、俺が一番初めに見た感想だった。
響や奏さんと違うのは、ギアは纏うものに合わせて形や色を変えるからだそうだ。
俺は歌わず、地面を踏み込み、一歩。瞬間、俺はノイズ達の真ん前にいた。
……すごいな、シンフォギアっていうのは!!　まさか、一歩踏み込んだだけで約３０メートルを一瞬で詰めることが出来るなんて。
これならば、存分に暴れられる!!
「今度こそ喰らいやがれ!!」
拳を振りかぶり、一番近いノイズに叩きつける。
殴　ったノイズの腹には穴が開き、炭へと変わる演出の後、データの海へと帰っていった。
「おっし!!　ドンドン来い!!」
俺は拳を構えなおし、そう言った。

「なるほど、戦闘力は申し分ないわね」
「ああ、アームドギア無しであそこまで戦えるのは、入って来たばっかりの響を思い出すな」
そう言った、青髪の防人――風鳴翼と、橙に近い朱色の髪の女性――天羽奏の視線の先では、ノイズを次々と屠る遊策の姿があった。
「おい、馬鹿。一体、どうしたんだよ?　元気ねーぞ?　いつもの馬鹿騒ぎはどうした?」
「ごめん、クリスちゃん。私、気分が悪いからちょっと外出てるね……」
装者達全員で訓練を観戦していたのだが、いつもの元気が無い響をクリスが心配する。しかし、響は一言断って、外に出てしまう。

「アイツ、どうしたんだ？　そう言えば、昨日の訓練の時も動きがおかしかったな」
「まあ、なんとなくわかるさ。あの二人のよそよそしさを見るとさ」
「あれは二人の問題だ。私達に出来る事はないと思うぞ、雪音。今は、見守っててやろう」
「……ああ、そうだな」
　クリスは思う所があるようで、スッと目を伏せたがそれに気づくものは誰もいなかった。

「はぁ……」
　一方、その話の主である響は、シュミレーター室から出て自動販売機が立ち並ぶ休憩コーナーで、ホットココアを片手にため息をついていた。
「あ～あ、なんで私ってこうなんだろ……クリスちゃんがせっかく心配してくれたっていうのに……」
　自身の至らなさと未熟さが時々嫌になるのが、この響と言う少女だった。
　自分が兄と慕う遊策にだってそうだ、と響は思う。遊策を避けているのは、何も遊策が悪いのではない。そんなことは彼女もわかっている。
　ただ、自分が一方的に遊策に戦場に立ってほしくないと思っているだけの事だ。
「わかってる、こんなのはただの私のワガママでしかないのは……」
　そう言った、響の脳裏に、パッと、響を庇い大量の血を流す遊策の姿と、手術後、一向に目覚める気配のなくベッドに横たわる遊策の姿がフラッシュバックする。
　その記憶に、響の手が震え出す、それを必死になって押さえようとするが抑えられない。響はそれを頭を振って打ち払おうとするが、一向に消える気配が無い。
　気分が一気に悪くなり、吐き気がしてくる。

吐き気を押さえきれなくなり、身近なトイレに入り、カギをかけ……そして、吐いた。
「う、うう、……グスッ……あ、う、うううう、ぐう……」
吐き、胃の中のものを全部出しつくした後、嗚咽と涙の音がトイレの中に響いていた。

しばらくして、落ち着いた後、トイレで口をゆすぐ。そうしながら、彼女は己の思いを口にする。
「……でも、やっぱりお兄さんにはもう戦ってほしくない」
フラッシュバックした光景を見て、あんなことをもう一度起こさせないためにも、自分が闘い、遊策を守らなければと、彼女はもう一度決意を再確認する。
その時、通信機が震え、風鳴司令――――響からすれば師匠に当たる人物、からの緊急通信が入る。
『響君!! B市にノイズの反応が現れた!! 翼や奏君、クリス君も向かっている。至急向かってほしい!!』
「了解しました!! 出ます!!」
通信機から聞こえる声に、精いっぱいの元気を装った声で返す。
顔を水で洗い、気分を一転させるとトイレを出て、駆け出すのだった。

『司令!! 響ちゃん、他の装者と合流!! ノイズとの交戦に入りました!!』
「よし、これで――――」
一安心だな、と言葉を紡ごうとした、風鳴司令に急報が入る。
『ッ! 司令!! 別方向にノイズの反応を検知しました!!』
「何っ!? 二か所……だと? まずい、こちらには出せる装者は……」
そう、すべての装者はノイズの迎撃に宛ててしまっている。一人、二人をそちらの方に向かわせようか、と考える。しかし、丁度、そこに訓練を終えていた遊策が名乗りを上げる。
「はい!! 俺、行けますよ、ノイズくらいなら」

その発言に、風鳴司令は少し迷ったようなそぶりを見せた。
「(うむ、戦闘力は申し分ないとは言え、まだ、なったばかり……しかし、遅かれ早かれ実践もしなければならないし、今回のノイズは少ない様だ。ならば……)」
と、一考した後、各所に指示を出す。
「そうか……すまない!! ノイズ反応だ!! 本番となるが、行けるか遊策君!! 他の者はサポートに回れ!!」
「了解、すぐに出ます」
遊策は軽く返事をすると司令室を後にした。
部屋を出ると、緒川さんが「こっちです」と、手招きをしていた。
遊策はそちらに走っていくと、そこでは緒川さんがバイクのエンジンの調子を見ていた。
「遊策君、このバイクを使ってください」
「緒川さん、いいんですか?」
「ええ、免許は確か持ってましたよね? 足があるに越したことはないですからね」
「ありがとうございます!! 小日向遊策……出ます!!」
サムズアップを緒川さんと交わし、バイクのエンジンを吹かす。
そして、ゲートが開くと共に飛び出す。そのまま、徐々に見えなくなる背を緒川さんは見守っていた。

「ここか!!」
見れば、炭が所々にある。
……っ!! 少し遅かった……犠牲者が出てしまった。
しかし、悔やんでいる暇はない。バイクから降り、聖詠を紡ぐ。
「Ｂｅ Ｓｔｒｏｎｇ ｓｏｍｅｗｈｅｒｅ ｇｕｎｇｎｉｒ ｔｒｏｎ」
シンフォギアを纏うと俺は、手前に居たノイズに飛びかかる。
「おらぁぁぁぁぁ!!!!」
拳を一閃。ノイズは簡単に炭へと変わっていった。

次、次と、屠っていくこと、１０分後――――

「ふう、粗方片付いたかな？」

炭の山の中俺は立っていた。

周りを見渡してもノイズの姿はない。

そろそろ、帰ろうかと、バイクに乗り込もうとした時、それは起こった。

『!!　大きなノイズ反応を検知!!　何か来ます!!』

黒い霧のようなものが俺の後ろに流れていくのが分かった。

体に重圧を与える程のプレッシャーにゾッとし、反射的に後ろを振り返った。

「一体何が、グアッ!?」

瞬間、自身の視界が揺れ、バイクごと吹き飛ばされる。

ビルに突っ込み、何とか止まる。バイクが大破し俺の横に転がっている。

……シンフォギアを纏っていなかったら、と思うとゾッとする。初手で炭になっていたし、仮に生きれたとしてもバイクやビルにつぶされていたかもしれない。

瓦礫に捕まりながら立ち上がり、俺を攻撃してきたノイズを視界に収める。

が、なんだ？　あれは……？

「なんだ……このノイズは!?　黒いノイズだとォ!?」

そう、そのノイズはこの世のすべての汚れを背負ったかのように、黒かった……

13話　死闘

「ぐあああああ!!!」
俺は攻撃を受けて、派手に地面を転がる。
「ぐっ!?　なんだこの強さは!?　こんなノイズもいるのか!?」
そう、俺の言葉の通り、この黒いノイズは相当な強さだった。
俺の攻撃が当たらないどころか、相手は俺の目に負えない程の速さがあった。
『ガングニールのバイタル、急速に低下!!　まずいですよ!!』
俺のギアを通して、オペレーターの藤堂さんの声が聞こえてくる。
『こちらはモニターの切り替えが出来なくなった。遊策君、いったい何が起こっている!?』
何か向こうでもトラブルがあったらしい。何が起こっているのか、つかめていないようだ。
俺は何が起こっているのかを伝えようと、喋るが、黒いノイズは攻撃の手を緩めず、地面をまた転がる羽目になる。
転がりながら、何とか通信に応じる。
「黒いノイズが!!　コイツ、強い!!　ボボボッ!!」
転がりながら通信している途中に蹴り上げられて、しこたま殴られる。空中コンボを喰らったのは、黄老師（ウオンろうし）との修行以来だ。
だが、通信を続け相手の情報を伝えなければ!!
「このノイズ、強いっ!!　強いから、強い!!　ボボボッ!!」
また殴られ、蹴られ、石のように転がされる。
あれ？　これ、感想にしかなってなくねぇか？
そう思い、俺は起き上がりながら、もっと詳しく説明する。
「シンプルに速度と攻撃、そして、耐久力もろもろ……まとめて防御力!!　全部が他のノイズとは比べ物にならない位です!!」
何とか情報を伝えたが、状況は何も変わらない。
「ゴアッ!?」
後ろに回りこまれ、鞭のような触手の連打で強か打ち付けられる。
纏っているギアの一部が砕けて散らばる。

『モニター回復!!　響ちゃん達から切り替えます!!　っこ、これは!?』
『黒いノイズ……!?　こんなノイズ、見たことない!!』
どうやら、向こうの方でも見たことのないノイズらしいな……!!
『っく、大丈夫か!?　すぐに響君たちに応援を……』
「ッ!?　大丈夫です!!　まだまだ行ける!!　だから、応援は大丈夫です!!」
とんでもない、響に来られては困る。俺は一人でも行けるということを証明しなければならない……こんな、雑魚に後れを取ってちゃダメなんだよ!!
「はあ、はあ……響に来てもらっちゃ、困るんだよ……こんなやつ、俺一人で十分だ!!」
そう啖呵を切り、拳を握って、立つ。
基本を思い出せ、エオンフヤーの基礎にして極意を!!
俺は、目を閉じ、自然体になる。
『攻撃の流れを感じろ……どんな攻撃にも相手に攻撃を加える瞬間、一瞬だけ放出される殺気というものがある。それを感じて、流す!!そうすればどんな攻撃でも流すことが出来る……どう流すかは経験が必要だ。だからこそ、今から俺が攻撃を加える。それを千手流し切って見せろ』
俺は兄弟子の言葉と、目に負えない攻撃の経験を思い出す。
……そうだ、殺気を、流れを感じろ!!
眼を閉じると思考がクリアになり、神経系が一層研ぎ澄まされる感覚がする。
その感覚の中で、一瞬、揺らぎを感じた。
「そこだ!!」
繰り出された触手をはたき落とし、更に繰り出された攻撃を受け流す。
更に襲い掛かるノイズの攻撃を左右に身をひねることで流す。
蹴りを流す。
攻撃を、流す、流す、流す流す流す流す流す流す流す流す流す流す
流す流す流す流す流す流す流す流す流す流す流す流す流す流す流す流す

流す流す流す流す流す流す流す流す流す流す、流す!!!!
ノイズは攻撃の手を止め、動きも止まった。まさか、迎撃されるとは思っていなかったようだ。意志があるかは知らないが。
しかし、そう、動きを止めるということは決定的な隙にほかならない!!
ダンッと足元を蹴り、真っ直ぐに、爆発的に黒いノイズに近づき、懐に入る。
一撃、二撃、三撃……腕、足から繰り出される連続攻撃コンボにたまらず、後退するノイズ。
自身が攻撃されたことに戸惑いを起こすようなそぶりをして、理解できず自棄を起こした。
真っ直ぐに俺に向かって突っ込んできたのだ。
「それを待っていた!!」
そう、ただ我武者羅に突っ込んでくるのを待っていたんだ!!
俺は足を地面に叩きつけ、地面を陥没させる。
そして、ゆっくりと腕を前に出し、空間の流れを腕に感じさせる。
「……エオンフヤーの極意は流しにある!! フジサキ、バレンシアアアアアアアア!!!!」
感じた空間をグッと掴むように腕の動きが流れを描き、空間が流れる。そして、黒いノイズがその流れに引き込まれた。遊策は流れに乗って来た黒いノイズを横にトンッと押し、受け流す。
その時、不思議なことが起こった。
押された黒いノイズが空間の流れに耐え切れず、その体を上下に引き裂かれたのだ。
【奥義・フジサキバレンシア】
そう、空間の流れに干渉し相手を引き込み、そして、空間の流れによって引き裂く。
これが、真のフジサキバレンシアだった。この技、考案者本人は相手が引ったくり犯……人であったため、空間で引き裂くことはなかったが、その威力は相手を一瞬で気絶させ、トドメを指している。
まったく恐ろしい技だ。

そう思いながら、俺はノイズが消滅するのを見届ける。
黒いノイズが空気にとけていったことを確認すると、意識を手放した……

先程まで、戦闘があったが今は静かだ。避難した人々はまだ戻ってきていない、誰もいなくなった場所に一人の女が姿を現す。
「ま、こんなものかしらね？」
彼女は周りをぐるっと見渡すと目的のモノを見つける。
ノイズを女は呼び出し、持ってこさせる。女は拾わせたものを回収すると、ノイズをしまい込み、ノイズが持ってきたものを見る。
そう、それは砕けたギアの一部、先程、砕かれた遊策のギアの一部だ。
「このギアの欠片と戦闘力の見極め……目的は果たしたし良しとしましょう。しかし、まあ、型式番号『カルマ』、罪シリーズのノイズが自然発生するとはね。これは、早急にソロモンの杖を起動させなくては」
女はそう言って、次に、ギアの一部を太陽にかざす。
「融合症例……さて、このギアにはどんな秘密が隠されているのかしらね？」
研究者としても、超古代を生きた巫女としても、この未知には心が躍る。これから起こることを想像し、頬を釣り上げるのだった。

１４話　未来の？仲直り大作戦!!

「はっ、知っている天井だ……」
　何か足に重みを感じ、起きてみるとそこは見慣れた病室だった。二年前に入っていた病院と同じ病院で、そして、これまた同じ部屋だ。内装も花がいけてあるだけだ。
　この寝たままの体制で、視線をそっと下にずらすと、そこでは未来が寝息を立てていた。
　さらに、視線をずらし、時計を見る。このご時世だ、時計に日付もかかれてあった。
　――――なるほど、翌日の午後２時か……確か、訓練を始めたのが午前１０時だった。それから、３時間後くらいにノイズの襲撃を聞いたので、どうやら、一日寝ていたようだ。
　俺はそれを確認すると、もう昼か、未来を起こそうか、と悩んだ。起こさなければ、夜に響きそうだし……いや、しかし、あまり寝れていないのだったら起こすのもかわいそうだ。
　そんな事を考えていると、俺が起きたことによって微妙に振動を与えていたのか、未来が起きてしまう。
「お兄ちゃん!?　大丈夫!?」
　未来は、瞬きし俺の姿を確認した後、そう言って勢いよく布団をはぎ取り、傷の確認として服を脱がしてくる。
「ちょ、まっ……いやァァァァ、未来さんのエッチィィィィィ!!!!!」
「ちょっと静かにして!!」
「あっ、はい」
　俺のあーんなとこやこーんなとこ、いろんなとこを見て無事であることを確認すると、ホッと息を吐く。
「……うう、お婿に行けない」
「とにかく、よかったよ……お兄ちゃんが無事で……」
　俺のギャグはスルーされた。……虚しいものだ。９８４Ｄｅａｔｈ（クヤシー）（憤死）。
　まあ、冗談は置いといて、また心配かけちゃったなァ……俺。ヒー

ローってのは誰かを心配させちゃダメだって、どこかのアニメでも言っていたし、やっぱり俺じゃ、ダメなのかなァ……。
そう思考していると未来は、今俺が抱える問題にズバッと探りを入れてくる。
「そう言えば、お兄ちゃん響と何かあった？」
「……」
何と言っていいのか、言葉に詰まった……。
未来が聞いてきたのは多分、響に変化が現れたからだろう。あいつはとても変化がわかりやすい。何かを悩んでいる時は、私悩んでます、といった風に表情にダイレクトにでる。
きっと、俺とのあの時のやり取りの後、学生寮で暗い顔でもしていたからじゃないか、と俺は推測した。
何を言っていいのか分からないが、俺はとりあえず言葉を出した。
「かくかくしかじかなんだが……」
「えっ、お兄ちゃんシンフォギア起動したの!?　それで、響に戦ってほしくないと言われて、響も守れるくらい俺は強いぜー!!　最強の力で、響の信頼を手に入れてやるぜー!!　と、証明しようとして、ノイズにフルボッコにされた!?」
「おう、かくかくしかじか、としか言ってなかったのに……さすがだな、その超解釈能力」
流石、未来さん!!　誰にでも出来る事じゃないよ!!　さすみく!!
と、茶化(ちゃか)すが「うるさい、少し黙って」と、強めに言われ、沈黙するしかない。
……やべぇよ、本気切れの兆候じゃねぇか。
俺はどうなるか、固唾を飲んで見守る。
……あたたかいめぇ（ダミ声）。
ぶん殴られた。反省しよう……。
未来は沈黙していた姿勢から、バッと立ち上がり、自分の胸を叩いた。
「それなら、まかせて!!　いつまでも、お兄ちゃんと響がギクシャクしてるのは耐えられないもん!!　私にいい考えがあるから!!」

おお……とても、頼もしい……あなたは天使か……
あっ、天使だったわ。俺のなぁっ!!　マイスイートエンジェル・未来ぅ〜!!
ぶん殴られた。……なぜだァ!?

「と、いう訳で、遊策君!!　ようこそ、特異災害対策機動部二課へ!!」
パアンッ!!　と、クラッカーが次々に開く音がする。
大きく腕を広げる風鳴司令と拍手するオペレーターの人と二課のシンフォギアを纏う者、つまりは装者達と、ついでに未来。
そして、中央に『ようこそ、小日向遊策君!!　特異災害対策機動部二課所属装者歓迎パーティー』と書かれた横断幕がかかっている。
どういう……ことだ……？
あれ？　一日後、退院したと思ったら、なんか未来に連れ出され、気がついたらリディアン音楽院の中に入り、エレベーターに乗せられ、特異災害対機動部策二課本部にたどり着いたと思ったら、この始末。
……まるで意味がわからんぞ!!　未来ルドォ!!
俺と響の関係修繕のため閃いたんじゃなかったのか？
裏切ったのか、俺を売ったのか!?　未来うぅぅぅぅ!!
「……」〈無言の腹パン
「おうっ!?　こんなんじゃ、満足できねぇぜ……」
マジで、無言の腹パンはやめろ、未来エル。本気で吐きそうになったから……
文句を言おうとした俺に未来は、そっと、耳元で言う。
「後で、それとなく二人にしてもらえるように言ってあるから、そこからが勝負だからね？　逃しちゃ駄目だよ、お兄ちゃん？」
「……ああ、ありがとう、頑張ってみる」
俺は未来に頷いて返すと、未来は「よろしい！」と、言って笑って響たちの方に行った。
それをボーと、見ていると、俺を呼ぶ声が背後から聞こえた。
「遊策君」

「あっ、はい!!　なんでしょうか？」
　振り向くとそこには大柄の赤い髪を持つ大男。風鳴弦十郎……風鳴司令が立っていた。
　司令は、俺を見るとスッと頭を下げる。
「すまなかった……」
「え？　いや、なにがですか？」
　何故、頭を下げられているのか見当もつかなかった。
「まだ実戦経験のない君に、大物を任せてしまった……すまない」
「……なんだ、そんな事ですか。こちらの方が感謝したくらいですよ。あの時の、俺だけでいいっていうワガママを聞いていただいたんですし」
　本当に感謝している。ワガママを聞いてもらって、文句など言えるはずもない。
「しかし、だな。危険なノイズを相手にさせたということは、真実だ」
「頭上げてくださいって、こうやって俺は無事なんですし、そういうのは無しにしましょう。今はパーティーを楽しみましょう!!」
「……そうか、それもそうだな。祝いの席でする話ではなかったな」
　そう言った風鳴司令に俺は、気になってしょうがないことだけ聞いておこうと、話しかける。
「ところで、危険なノイズって何か通常のノイズとは違うんですか？
　あの黒いノイズ」
「ああ、了子君が言うには、タイプ『カルマ』、カルマノイズと呼ばれるノイズでその力はシンフォギア装者複数人分と同等……らしい」
「ふぁ!?　シンフォギア装者複数人分……通りで強いはずですよ……」
　良く生きて帰れたものだ。しかも、それを聞くとなおさら、響たちを越させなくてよかったのかもしれないな、と思う。
「なぜ発生したのか、などは現在調査中だ。と、まあ、この話はこの辺りにしておこうか。ほら、彼女たちが呼んでいる。行ってあげるといい」
　そう言って、クイッと顔を横に向ける風鳴司令。

視線を追って見れば、天羽奏さんが俺に向かって「こっちにこいよー」と手振っている。
風鳴司令は、ふっとニヒルに笑うと俺の背中を押して言う。
「今日は君が主役だ。存分に楽しんで来い」
「……はい!!」
……かっけぇよな、この人。本当にＯＴＯＮＡって感じがする。
俺はぺこりと一礼してから、装者達が集まるテーブルに俺は向かった。

「おう、来たか!!」
俺がついたと同時に、奏さんは俺の首に手を回し、ヘッドロックの体制になる。……なぜに？
「お前、一人で大物倒しちまったんだろ？　しかも、あたしらの救援を断って。すげえじゃねえか!!」
「ははは……まあ、病院に運ばれましたけどね」
「それでも大きな怪我はしてないだろ？　だったら大手柄だ」
言って、パッとヘッドロックを外す奏さん。
「あっ、そうそう、敬語は無しだ。同い年くらいだろ？　あと、奏、な!!」
「え、いやでも、人気アーティストのツヴァイウィングの一人をそんな呼び捨てだなんて……」
そう言った俺に、今度は奏さんの横にいた翼さんが続く。
「なら、私も翼で構わない。歳はあなたの方が上みたいだし」
「いやいやいや、一人じゃなくて二人ならって訳じゃないでしょう!?
有名人を呼び捨てにするのはまずいんじゃ、って話ですよ!!」
頑として譲らない俺に、二人はため息をつくという。
「あのなぁ、これから仲間になるのに敬語とか使われてたら、なんかモニャるだろ？　堅苦しいのはなしだ」
「そう、私たちは仲間になるんだから、そういうものはなしにしましょう？」
……そうか、仲間、か。そう言われちゃぁ、何も言えないじゃない

か。
「なら、しょうがないな。よろしくな、奏、翼」
そう名前を呼んで、手を差し出す。
その手を握りながら、「ああ」と翼はいい、「こっちこそよろしく頼むぜ！」と奏が言った。
「おい、そこ、三人だけで盛り上がってるんじゃねーよ!!」
クリスが乱入してきた。そのまま、クリスは言う。
「こっちに膨れた奴がいるんだ、こっちも相手してやれよ」
指をさした方には、未来、そして、響がいた。
そのまま、料理を持って来て、みんなで話をしながら食べることになった。
……響は黙ったままだったが。

ほぼ食べ物が食い終わり、食器を集めている時、その中で、クリスが俺に話を振る。
「そう言えば、カルマノイズ……だったか？　そいつの戦い、どうだったんだよ？」
「まあ、基本防戦一方だったよ。んで、ちょぉっと、無茶して……」
そこで、今までずっと黙っていた響がポツリと言う。
「やっぱり、無茶するんだ……」
「ひ、響？」
響の顔は、伏せられていてわからない。でも、嫌な雰囲気なのはわかる。
そのまま顔を伏せたまま、響は喋る。
「お兄さんはすごいよ……私達でも倒せなかったかもしれないノイズを倒しちゃうんだから……でも、なんで？　なんで私達に応援を頼まなかったの？」
「それは……」
「私たちは、ううん、私は、そんなに頼りないの……？　私も強くなったと思ってたのに……やっぱり駄目なの？」

「ち、違う、響、俺はただ……」
スッと、顔を上げた響の目には涙がたまっていた。唇をかみしめ、悲しみの表情でいっぱいだった。
違う、俺はただ、響にそんな顔をさせない様に俺一人でも大丈夫だってところを見せたくて……。
だが言葉が出ない。
そして、響はポツリと言う。
「いい、よ。もう、いいよ……もう、放っておいて!!」
「待って、待って、響!!」
そう言って、立ち上がり走って部屋を出ていった響を、未来が走って追う。
しかし、俺は動けなかった……。
俺はただ響に笑ってほしかっただけなのに……俺は、何を間違えた？　俺はどうすればいい……？
誰か、誰か教えてくれ……

15話　ダブルクロス

ただ立ち尽くすだけだった俺に、声がかけられる。
「何をしているの？」
「え？」
その声の主は、シンフォギアの製作者、櫻井了子だった。
了子さんは俺の肩に手を置き、有無を言わさぬ迫力で言う。
「追いなさい」
「え？」
「ほら、さっさと追った追った。女の子を泣かせたままでいるのは、男の子としてどうなの？」
グイグイと俺をドアの方にやり、押す。
「さっさと追って、涙を拭ってあげなさい!!　それがあなたの役目よ!!」
パンッと、尻を叩かれ、衝撃でドアの向こうへ。
俺は尻を押さえつつ、戸惑いながら返事を出す。
「は、はい!!」
……戸惑いながらではなく、迫力に押されるようにと言うのが正しいが。
でも、背中を押してくれているのだと感じた。ならば、ここでしり込みしているわけにはいかない。
俺は、響と話をしよう。じっくりと、しっかりと、互いのことがわかるように!!
そう決意し、俺は駆け出した。

……とりあえず、響のいそうなところを探ってみるか!!

遊策が居なくなったパーティー会場では、櫻井了子が、はぁ、と大きなため息をつき言う。
「全く世話が焼けるんだから……」

「ふ、さすがだな了子君」
そう言いつつ、風鳴司令がワインを持って来て渡す。それを受け取りつつ、了子さんは、ワインを一気にあおる。
「ぷは～、それほどでもないわぁ～、といっても、解決するのはあの子たち自身だしね」
「そうだな、乙女心難し　悩めよ　少年ってところか……」

なんかいい風に閉めようとしている、大人たちを見て……
「あの言葉、無理ねぇか？」
「ああ、語呂悪いな」
「まあ、いいんじゃないか？」
とかいう会話があったとか何とか。

時、同じくして雨が降りしきる商店街。
未来はまだ響を追っていた。
「待って、響!!」
「……」
「響、響、響響響!!」
「……何、未来？」
何度も呼びかけ、やっと止まった響を見て、ぜいぜいと息をつきその場で膝に手を当てる未来。
響は、グロッキーになった未来を見て、何度も無視していたことに罪悪感が募る。
「未来、大丈夫？　それにしても、陸上部のエースなのにどうしたの？」
未来に駆け寄り、肩を貸しながら問う響。その響にもたれかかりながら、息を整え話し始める未来。
「うぅ……何度も待っててっていってるのに無視してエレベーターで行っちゃうから、階段を全力疾走して追う羽目になって……」
「あっ、ごめん未来……」
申し訳なさそうに謝る響だったが、未来は両腕でギュッと響を抱き

しめて言う。
「でも、これで捕まえた。」
さらに、響の耳元に口を近づけ、そっという未来。
「少し話をしようよ、お兄ちゃんと」
「でも、私は……」
響は顔を下げ、うつむいて黙ってしまう。どうしたものかと、未来は思っていると、そこに救世主が現れる。
「あれまぁ……響ちゃん達どうしたの、びしょ濡れで」
「フラワーのおばちゃん……」
そう、そこに現れたのは、お好み焼き屋「フラワー」のおばちゃんだった。
おばちゃんは言う。
「そのままじゃ、風邪を引いちゃうから、家に上がっていきなさい」
こうして、おばちゃんの家でお風呂と服を乾かせてもらうことになった。

響と未来、お風呂に二人で入る。足の親指と親指を合わせ、頭を突き合わせて風呂に入っていると、硬かった響の顔の表情も少し緩まる。
「ねぇ、響、気持ちいいね」
「うん、未来〜。ふにゃ〜、あったまるぅ〜」
そうやって、へニャっと顔を綻ばせる響を見て、未来はクスクスと笑う。そんな、ひと時だった。

「おばちゃん、ありがと〜、いいお湯でした〜」
お風呂からあがって、ホクホクの響と未来は、アイロンをかけているおばちゃんに感謝と感想を伝える。
おばちゃんは笑って、「いえいえ、それならよかった」とアイロンをかけた服を二人に手渡す。
それを貰った、響たちを見て、おばちゃんは疑問だったことを聞く。
「それにしてもどうしたの？　あんなところにいて？」

響は少し迷ったが、話すことにした。
「うん、実は……」
響はすべて話した。シンフォギアや二課の話を除いて、自身の思いも全部。
それを聞いた、おばちゃんはあっさりと言う。
「じゃあ、響ちゃんが守ったらいいんじゃないかな？」
「え？」
「どこか遠くで、遊策君が傷つくのが嫌な訳なんだろう？　だったら、簡単さぁね。響ちゃんが近くに居て、傷つかない様に守ったらいいんじゃないかい？」
そう言って、おばちゃんは遊策の事を思い出しながら、話を続けた。
「未来ちゃんのお兄さん、遊策君には私も結構助けてもらっていてねぇ……。店の手伝いや、荷物運びをやってもらったもんさ。厄介な客が現れたことがあってねぇ。あまり関わらない方がいいといったんだがね。この店に迷惑だし、おいしく食べている客が不味くなるって言って、関わりに行って殴られたことあったのさ」
「お兄ちゃんそんな事してたんだ……」
「……」
未来は知らなかった自分の兄の事を知って、驚き。響は殴られたと聞いて、顔をしかめた。
それぞれの反応を見て、少し笑うとおばちゃんは続ける。
「確かに、ちっとやそっと言っただけじゃ、止まらない頑固者ってのが遊策君だねぇ。でも、だからこそ、いいところでもある、と、私は思う訳さ」
「確かにそうです……お兄さんのいいところだと私も思います」
響はその話に同意する。
頑固なところは響にもあるが、時たま自分より頑固な時がある遊策を思い浮かべて、少し笑顔になる。
「そう、問題は響ちゃん自分にあるってこと、わかってるんだろう？だったら簡単さ、遊策君が無茶しない様に抑え役になってあげることさ。自身の目の届く場所にいるなら、安心できるだろう？」

「あっ……、そっか、そうだったんだ……」
おばちゃんは今の響には抜け落ちていたことを、埋めてくれた。
もう少しで、答えが出せる。
そう思った時、ノイズの襲来を知らせる警報が鳴り響く。
「ノイズ警報?!」
すぐさま、服を着替えると外に出る。
出ると、目に見える場所から火の手が上がっている。
「未来、おばちゃん連れて早く非難して!!」
「うん、わかった。響、気を付けてね!!」
響はその声をバックに、走り、聖詠を口ずさみシンフォギアを纏って、ノイズの一団に突っ込んでいくのだった。

「くそ、どこにいるんだ……響!! 未来!!」
響と未来を探す遊策の元に、緊急通信で、風鳴司令の声が聞こえてくる。
『遊策君、ノイズだ!! すまないが、急行してくれないか!!』
「っ!! 了解!!」
仕方ないと、一旦響たちを追うのを中止し、ノイズが発生した場所に急ぐのであった。

「ふう、これで終わったかな……?」
すぐに駆け付けたおかげか、誰も犠牲になることが無かった。
周りにはノイズの残骸である炭だけが、散乱している。
変身を解いた響に未来からの連絡が入る。
『助けて』
そう、一文が書かれていた。
それを確認した響は、いてもたってもいられず、ＧＰＳ機能を頼りに駆けだした。

たどり着いた場所は、廃工場だった。
中に入ると、一角が崩れたようになっていて、そこをのぞき込むと

少し下に未来がいるのが見えた。
「未っ……」
急いで、駆け下がり、未来と名前を言おうと、響は口を開くが口に手を当てられ言葉をキャンセルさせられる。
「しー……」
未来は口に指を当て、喋るなという意味の仕草をする。そして、携帯の画面でメモ帳を起動させ、文字を表示させる、
『あのノイズ、音に反応して獲物を見つけるみたいなの。だから、喋らないで!!』
そういって、上を指す未来。ノイズが上に陣とっていた。落下して来たら一たまりもない程の大きさだ。
次に、未来の横を見れば、気絶しているおばちゃんがいる事に気づいた。
状況を理解した響もスマホの画面を操作し、メモ帳を表示させ返す。
『でも、歌わないとギアを纏えない……どうしよう……？　おばちゃんも気絶してるし……』
その時、気絶していたおばちゃんが「うっ」と言葉をもらす。起きかけている兆候だろう。
響はおばちゃんの様子を確認する。足を痛めているようだ。きっとここに落ちた時にひねったのだろう。気絶しているということは頭も打っているのかもしれない。
早めに医者に見せた方がよさそうだ。そう判断する。
おばちゃんを見て、響を見ていた未来が顔を上げ、意を決したように言う。
『私が囮になる。その間に、おばちゃんを連れて逃げて!!』
思わず声が出そうになる響だったが、グッと言葉をこらえる響。スマホを急いで入力し抗議する。
『そんなことは出来ないよ!!』
『でもこのままじゃ、だめ……大丈夫、私の足なら逃げ切れる。それに、安全な所におばちゃんを託したら、響は、助けに来てくれるでしょ

う？』
ジッと未来は響を見つめる。
その瞳は自分に全幅の信頼を寄せていてくれいる事がわかる。わかってしまった。
仕方ないと、折れるしかなかった。
『でも、未来……無茶だけはしないでね？』
『わかってるよ、じゃあ、行ってきます!!』
頷き合うと、未来は階段を上がり、大声を出す。
「行って、響!!　こっちよ、ノイズ!!」
大声をあげたと同時に、響はおばちゃんを抱え、走り出す。
しかし、運の悪いことに、前方にノイズが現れた。
突然の事に絶句する響だったが、さらに、追い打ちをかけるようなことが起こる。
今までの疲労とさっき一・二階下の場所に落ちた衝撃で足にガタが来ていたらしい。未来が足をもつれさせ転んでしまったのだ。
そこに、ノイズが容赦なく襲い掛かる。
「み、未来っ!!!!」
「あ……」
響の叫びもむなしく、ノイズは無防備な未来に襲い掛かった――――

「おおおおお!!!!　らあああああ!!!!」
その時、何者かの咆哮じみた声が聞こえ、次の瞬間、真上から降って来たシンフォギアを纏った遊策により、ノイズはぶん殴られ、炭へと変わった。
「響ィ!!　いけぇ!!　こっちは任せろ!!」
未来を確保し抱きしめながら、遊策は響に向かって叫ぶ。
響はそれを受けて、頷くとシンフォギアを起動させるために必要な歌、聖詠を口ずさむ。
「（ありがとう、お兄さん……やっぱり、そうだよね……私は決めまし

た、お兄さん!!　だから、見ていてください!!　私の、決意の『変身』!!)」
「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ」
ギアが装着され、ゆっくりとおばちゃんを下ろす響。
そこからは、言うまでもなく、ノイズは殲滅されたのだった。

おばちゃんを病院に送り届け、未来は付き添いとして中に入っていった。
俺と響は、待合室に二人だけになる。
響は「そういえば」と、思い出したように言う。
「なんで、あの場所に来れたんですか？」
「ん？　ああ、それはな、これだよ」
俺は携帯を見せた、『助けて』と一言書かれたメールだ。
これの発信源を、二課の人にたどってもらいたどりついたという訳だ。
説明した後、響は納得のいったように、「そうなんですか……」という。
「ああ……」
俺がそう返したきり、会話が無くなる。しばらく、互いにうつむいて黙っていたが、意を決したように響が話を切り出した。
「あのね、お兄さん……」
おっと、女の子に先にいわせてしまうのは、ダメだ。
俺の決意を、響に伝えなければならない。
「待ってくれ、先にいわせてくれないか？」
「いいですけど、何を？」
「……響、お前が誰かを、俺を守るっていうのなら、俺にお前を守らせてくないか？」
俺は今言える精一杯の気持ちで言った。
そっと、響の顔を見る。
「なんだ……お兄さんも私と同じ結論だったんですね……」

そう言って、響は笑っていた。
同じ結論……？
「私もそうです、私もお兄さんの背中を守らせてくれませんか？」
「そっか……同じ結論ってそういうことか……」
フッと俺も笑い、そして、俺は響の腕を俺はおもむろに取る。
「お兄さん……？」
「俺はお前を守る、お前は俺を守る、約束だ」
小指を小指ではさみ、指を結ぶ。
響は意味がわかると、「嘘ついたら、ハリ千本……じゃなくて、結婚届にハンコ押す!!　指切った!!」と、そう言って指を切る。
そして……
「好きです！　大好きです!!　お兄さん!!」
満点の笑顔で、そう言って抱き着いてきた。

そして、待っていた未来と合流した後、遅くなったので寮の前にまで、遊策に送ってもらい、別れた。
その時、ピロリンッ、と響のスマートフォンが震え、メールが表示される。
「あれ？　クリスちゃんからだ。何々『大事な話がある、今二人で会えないか？』とな？」
「そう言えば、クリス、すごくお兄ちゃんと響の事、心配してくれてたんだよ？　会うなら、お礼を言っておきなよ？」
「そうだよね……うん、じゃ、ちょっといってくるよ!!」
響は踵を返し、「じゃ、行ってくるねー」と、一言いうと、クリスの待つ場所まで駆け出した。

息を切らしながら、待ち合わせ場所の路地裏に入ると、そこではクリスが腕を組んで待っていた。
「どうしたのクリスちゃん？　大事な話って何？」
息を整え、そう呼びかけると、クリスは少し言い出しにくそうに、頬

をポリポリとかきながら、切り出す。
「あ、ああ……そうだ、えーと、あいつ、遊策の奴とは上手くいったのか？」
「あ、うんっ!!　おかげさまで、解決しました!!　ありがとうね、クリスちゃん!!」
「ああ、それならよかった……」
　安心したと共に、クリスの目には決意が宿った。しかし、クリスの変化に響は気づかなかった。
「これで、安心して抜ける」
「え？　今何……」
　ぼそっと言った言葉を聞き返そうとした瞬間、パンッと乾いた音がした。
　最初は何をされたのか全く理解できていなかった響だが、ジワリと、制服を着ている腹部が赤く染まっていく。
　撃たれた――――
　そう理解した瞬間、響の全身から力が抜けた。
　倒れこみ、地面に転がる。鋭い痛みが響を蝕んでいる。
「わりぃな……あたしを恨んでもらって構わねぇ。でも、これは貰っていくぞ……」
　そういって、銃を撃った犯人――――クリスは懐から響のペンダント、いやシンフォギア・ガングニールを取り出し、確認すると自らの懐に入れ、踵を返す。
「なん……で、くり、すちゃ……」
　遠ざかっていく、クリスの背中には、なぜ？　どうして？　の声は、届かなかった……

１６話　激槍・ガングニール

「メール？　このメアド誰だ？」
位置だけ表示……なんか、怪しいな。
でも、行ってみるだけ言ってみるか。
……と、来たのは良いが……
「おい!!　どうした響!?　しっかりしろ!!」
響が倒れていた。抱き上げた俺の手から、赤い液体が、ボトボトと垂れる。
……嘘だろ!?
「くり、す、ちゃ……なんで……どうして……」
「おい、クリスがどうしたんだよ!?　くそ!!　今病院に連れて行ってやるからな!!」
ここからならば、俺が運んだ方が早い。
俺は、傷をハンカチで抑え、お姫様だっこで響を抱きかかえると、近場の病院目指して駆け出した。
……俺は何をやってるんだ!!　守ると誓ったばかりなのにっ!!
悔しさと後悔で、グッと噛みしめた口の端から血がこぼれた。

「小日向さん、手術は無事終わりましたよ」
「はい、はい、よろしくお願いします。ありがとうございました!!」
看護婦さんから響は無事助かったと報告され、お礼をいい、安堵の息を吐く。ドッと疲れが押し寄せて来て、待合室の椅子にドッカリと座り込んでしまう。
しばらくそうしていると、響の母と父を連れて未来が入って来た。
「遊策君、響は!?」
「はい、安心してください。峠は越しました」
「ああ、よかった……ありがとうね、遊策君、あなたが見つけてくれなかったら響は……」
素直に俺は、返事が出来なかった。
響は重傷を負ってしまった。俺は守れなかった。俺はその場にい

て守らなくちゃいけなかったのに……!!
もし、これで響が死んでいたら……
そうやって、自責の念に押しつぶされそうになる。
その時、未来が俺を呼んでいることに気づいた。
「お兄ちゃん、ねえ、お兄ちゃん!!」
「あ、ああ、なんだ？」
俺はとっさに口を開き、返事をした。
「響の事なんだけど、いい？」
そう言って、響の両親に一言断ってから、未来は俺を連れ出す。
病院の外のベンチに二人並んで座り、未来は話し出す。
クリスから、連絡を貰ったこと。それで、響は待ち合わせてクリスと会っていたこと。この二つを聞く。
それって、つまり……
「クリスが怪しいってことか？」
「うん、でもそれは無いって思いたい。だって、クリスはツンツンしてるけど、誰かを理由なく傷つける子じゃないし……」
「わかった、情報ありがとう」
未来に礼を言った時、俺のスマホにメールが届く。
また知らないメアドからだ。メールの本文を見る。
『あなたの大切な人の大切なものを預かっている。返してほしければ、今日の午前2時に指定の場所に来い』
なるほど、先程のメールと同じメアドだ。このメアドの持ち主が、響を襲った犯人と見て間違いないかもな。
「お兄ちゃんどうしたの？」
「なんでもないさ」
「……嘘、何か危険なことをしようとする時、いっつも眉間にしわを寄せて難しい顔するもん」
……気づかれたか。でも、譲る気はない。
「知ってる、ちょっと言ったくらいで止まらないのも。だって、兄妹だもん」
何でもお見通しという訳、か……

未来はジッと俺を見つめてから、言う。
「必ず帰って来て、病室の響に顔を出してあげること！」
花が咲くような笑顔で、そう言われた。
やっぱり勝てないな。我が妹様には……
俺は、未来の頭をワシャワシャと少し荒っぽく撫でる。
「ふわあああああ⁉　せっかく整えた髪がっ!!」
「わーってるよ、絶対帰ってくるさ。お前が嫁に行くまで俺は傍にいる。……まあ、簡単には嫁にやらねぇけどなぁ!!」
「なに、なんなの？　誰に言ってるの？　プラチナ意味わからないよ!!」
はっはっは、知らなくていいことだよ未来君!!
俺は頬を叩き、グッと拳を握って気合を入れる。
さて、現在１１時、とりあえず飯でも食って仮眠をとるか!!

「……ところで、プラチナって何？」
「わからないけど、誰かが私の中に領空侵犯してきたみたい」
「なんのこっちゃ？」

約束の時間、約束の場所にて、約束の相手の到着を腕組みして、待つ。ここは、ホテル計画がとん挫し建設中止となった工事現場。近くに公園があるが、異様に人通りの少なくドンパチやってもバレなさそうな場所だ。
背後に気配を感じ、牽制のため言葉を放つ。
「待ってたぜ、クリス」
「なんだ、ばれてんのか……」
「っは、隠す気も無かった癖に」
そうだ、別にばれてもいいと相手は思っていたのだろう。実際、俺のスマホに来たメアドはクリス本人が使っていた物だということは、未来からの情報で分かっている。
自嘲じみた笑いを見せながら、クリスは俺に問う。
「……怒ってねーのかよ」

「ああ……」
そう言った後、一旦、俺は声を落とし、殺意を込めた言葉で言う。
「腸が煮えくり返って爆発しそうだ。今にもお前を、ぐちゃぐちゃに壊してやりたい」
「っつ!!」
自分のやったことに罪悪感があるのか、悲痛な顔を一瞬見せ、それでも許されないだろうと一層自嘲を込めた表情で笑うクリス。
「……でもな!!」
まずは、その顔を崩す。
「理由なく、お前はそんなことをする奴じゃないだろ？」
「は？」
俺の言葉が理解できない、と言った風な表情で俺を見るクリス。しかし、気にせず、俺は言葉を続ける。
「俺はクリス、お前の事は何も知らない……でもな、あんなに二課のみんなに慕われてて、困っている人を助けるような奴が、理由も無く裏切るはずないってことぐらい俺でもわかる」
「っは!! 二課に最近来ただけの奴がエラソーに!! お前にあたしの何がわかるってんだ!!」
「俺だって、知っている!! お前が優しい奴だってことは!!」
「っ!? ……うるせぇ!! これ以上、憶測であたしを語るんじゃねぇ!!」
憶測じゃない、俺は知っている。クリスが響の事を心配して色々動いてくれたことも、二課の職員が困っていたら手を貸していることも、パーティーを企画したのはクリスだってことも!!
恥ずかしながら、これは全部未来から聞いたことだがな。
でも、俺はあの燃えるバルベルデの街で、小さいながらにも一生懸命誰かの役に立とうと頑張っているクリスを見た!!
「だから、理由を聞かせてもらう!!」
俺の言葉に、クリスは顔を歪ませ、言う。
「あたしは、あたしはッ!! あの馬鹿を!! 響をッ!! 撃ったんだぞ!? もう今さら戻れるかよッ!!」

「なら!!　お前が、戻れないって言うなら!!　俺は、お前を気絶させてでも連れて帰る!!　理由は後でぶん縛ってでも聞かせてもらおうかァ!!」
「ｋｉｌｌｔｅｒ　Ｉｃｈａｉｖａｌ　ｔｒｏｎ」
「Ｂｅ　Ｓｔｒｏｎｇ　ｓｏｍｅｗｈｅｒｅ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ」
そう言って、互いに聖詠を口ずさみ、ギアを纏う。互いに武器を構え、一触即発の空気が立ち込める。
……俺は、クリスが響を傷つけたことよりも、俺自身が響を守れなかったということの方が数倍腹が立つ。自分で自分を殺してやりたいくらいだ。クリスを恨んでいないと言えば嘘になるが、今は自分に対する怒りの方が大きい。
しかも、クリスはちゃんと死なない様に、被害が最小限になるようにしていたはずだ。
医者の話を思い出す。
『ちょうど、わき腹を掠（かす）るような感じで撃たれている。が、しかし、確かに、血が結構出るようになってるが、処置されてあるから大事には至らなかったみたいだね。それにしても、これは君が？』
『いえ……』
『なら処置した人に感謝しなきゃならんね』
そうだ、不思議に思っていた。なぜ処置をされていたのか？　誰かが処置したのなら、誰かが救急車を連絡しなければおかしい。
考えるられる可能性としては犯人が処置したと考えるのが、一番適切だ。
つまり、傷つけたが死なないように、後遺症が出ない様に、傷が残らない様に、したということ。クリスは進んで響を傷つけようとしていなかったという証明になる。
……まあ、感謝するも何も撃った人なんですけどね。
そう考え終わった瞬間、クリスが動いた。
腕のボウガンを、ガトリングガンに変え、乱射する。
散弾、しかも、シンフォギアの、だ。通常ならば、そんなもの屁で

もないが、シンフォギアから放たれる銃弾は、まずい。
俺はバックステップで距離を取り、後ろに向かって連続の後転で散弾を避ける。
執拗に追ってくる銃弾に、ついに工事現場の壁に追い詰められるが、俺は壁にあるものを引っぺがし、壁を蹴り上げ、上に飛ぶ。
「っは、空中なら避けられねえよなッ!!」
【ＭＥＧＡ　ＤＥＴＨ　ＰＡＲＴＹ】
腰の格納庫が展開し、その中からミサイルを一斉掃射する技が放たれる。
一斉に放たれた、ミサイルの爆発が俺の姿をかき消した。

モクモクと、爆発時の煙により遊策の姿が見えなくなる。
しかし、煙の奥に確かに何かあることはわかった。
「やったかっ!?」
「やってねーよ!!」
すぐ横から声が聞こえた。
遊策はあるもの――――工事現場の看板を囮に使ったのだ。こいつを蹴り、爆発の嵐を密かに抜け、煙に紛れ接近。
囮に気を取られている間に、遊策は手刀を横一閃し、クリスの首を狙っていた。
それをクリスは首をひねることで回避し、右手のガトリングガンをボウガンに戻し、一斉射する。
これにはたまらず、飛びのくが、甘い。踏み込んできたクリスが今度は、左手をボウガンに戻し、すでにつがえていた。
着地の瞬間とあって、避けられない。十本のエネルギーの矢が遊策を打ち抜いた。
「ぐあああああっ!!!?」
派手に転がり、地面でバウンドするが、飛び起き、距離をとる。
「流石に分が悪い、か……」
冷静に分析しつつ、自身の欠点を補う方法を考える。近接戦は自分としては無手より銃相手ならば獲物があった方がいいのだ。

一つだけあるのだが、それは切り札だ。切りたくはないが、そうも言ってられない状況であると、自分を納得させる。
遊策はしょうがない、と言いつつ切り札を使うため、立ち上がる。
「見せてやるよ、とっておき!!」

俺は切り札を使うと宣言する。
「見せてやるよ!!、とっておき!! これが、俺のアームドギアだぁぁぁぁぁぁ!!!!」
そう言って、腕を掲げると同時に、両腕のガントレットが分離、それぞれが槍として変形し、俺の両手に収まる。
そう、俺のアームドギアは……
「双槍……それが、テメェのギアかっ!!」
「そうだ、つがいの槍……それが俺のギアだ!!」
双槍を構え、歌いだす。俺の、俺だけの歌を!!
「聞け!! 俺の歌!!」

「激槍!! ガング、ニィィィィいいいルッ!!!!!!」

ここからが、俺のステージだ!!

１７話　兄弟子

始まりは呟くように、息を吸って言葉を出し、静かに歌い始める。
それと共に槍を構え、突貫する。
「始まりは突然に　終わりは唐突に……」
「つは、相も変わらず突貫思考、ちょせぇッ!!」
そう言ってクリスは、弾丸をばらまくが俺は右手に槍を片手で回し弾丸をシャットアウトする。
ここで突然だが、俺の槍は柄の部分合わせ８５センチ程度の長さなのだが、バトンを回すように槍を回すことで相手のちょっとした攻撃を防ぐことが出来るの盾になる。
その槍の盾で、俺は弾丸を回避し、一直線に進む。
「甦りみる世界は　綺麗な空を抱いていた……」
途切れないようにしっかりと言葉を紡ぎ、歌う。
グッと足を抱え、一気に伸ばし地面を蹴って、更に距離を縮める。
「君と歩く　道は輝いて見えて
いつも以上に　眩しく感じていたっ!!」
次の歌詞に入る時には、もうクリスの眼前に出る。
クリスは、ツチと、短く舌を打つと、ガトリングガンをボウガンの形に変形させ迎え撃とうとする、が――――
「遅い!!」
俺は、歌詞と歌詞の間の短い時間で、そう言い、槍を振るう。
クリスのボウガンを手から弾き、槍を持ったまま掌底を放つ。
「っく、っっう!?」
「突然に　鳴り響く　始まりの鐘の音色
戸惑いながらでも　心に槍携え　飛び込む　ｗａｒｇａｍｅ」
モロに入り、体勢を崩すクリスをあえて追わず、距離を取りつつ歌う。
先程までの攻防で、あまり深入りしすぎるとクリスは反撃をとっさに行ってくるということがわかっている。

その反撃のタイミングがまた天才的なのだ。その反撃一回で、戦闘のリズムを強引にかっさらっていく。全く、恐ろしい程のバトルセンスだ。
なのであえて深追いせず、少しずつ、確実に一撃ずつダメージを蓄積させていく。
第一、俺の目的はクリスの捕縛だ。それが最も効果的だろう。
クリスは銃を新しく作り出し、銃弾を放ってくるが、今の俺は止まらない。
二、三と、槍を振るうだけで銃弾をはじく。
……と、まあ、それだけで済むわけもなく、銃弾を対処している内にクリスの背後では、音を立ててすごいものが組み上がっていく。
――――そう、ミサイルである。
俺はそれを見て、クリスの元に駆ける。
ミサイルなんてものを撃たれたら一たまりもない!!
「さあ　全力で挑め!!　まだ見ぬ　明日の君に　出会うためにッ!!」
近づくが少し遅い。ミサイルはすでに発射準備が済んでいる。
「さぁぁぁぁ!!」
歌う、と言うより叫び、全速力でクリスの元へと飛ぶ。
が、ついにミサイルは発射されてしまった。
仕方ない、と俺は覚悟を決め、迫るミサイルを睨み、更に速度を上げる。
「勇気踏み込めッ!!　輝く君との明日が!!」
踏み込み、ミサイルとすれ違うように交錯する。
「俺を待ってるは、ずぅぅぅぅ!!」
俺は右手の槍を投げ捨て、頭上を通過していく、ミサイルを掴み、叩き!!　折る!!
爆発するが、俺はそれを利用した。そう、爆発に押されるように急加速したのだ。強烈なGと熱気を感じながら、一気にクリスに近づく。
「んなっ!?　ミサイルを叩き折って爆発に乗るなんて、無茶苦茶な!!」
驚愕するクリスをおいて、俺はさらに踏み込む。

同時に最後の前の間奏、そこで俺はクリスに向かって宣言する。
「知るかよ!! 悪いが、全力で叩くぞ!!」
前傾姿勢のまま、クリスの懐に飛び込んだ俺をクリスは迎撃しようと、ボウガンを俺に向けるが――
「守れ！ 君との明日
守れ！ 見たい景色」
歌いながら、槍を投げ捨て空いた方の腕でクリスの銃を腕ごと掴む。
驚愕に目を見開くクリスと、ニヤリと笑う俺。
そして――
「描けぇ!! 君との、未来(みらい)イィィィィィィイ!!!!!!」
「ぐうっ、はっあ、くぁぁぁアア……ッ!!!!!!」
開いたクリスの腹を、左の槍の腹で横殴り。たまらず、クリスは吹っ飛んだ。何か赤いモノが吹っ飛んだクリスから出て来る。
それは、シンフォギアのペンダント、響のガングニールだった。
飛んできたガングニールは俺の手の中に吸い込まれるように収まり、クリスは、工事現場の壁を悠々と超え、向こうへ消える。
そこで俺は失態に気づいた。
……しまった。クリスを吹き飛ばしてしまった。
俺は、ガングニールをしまうと、急いで後を追う。
「ここは……公園か」
どうやら、公園にまで来てしまったらしい。
不味いな、親子ずれの家族が一組いる。どうやらこちらには気づいていないようだったが、ばれるのは不味い。
が、すでにクリスはギアを纏っていなかった。膝をつき、息も荒々しいが、目だけは死んでいなかったが。
俺もギアを解除し、普段着に戻りながら、クリスに近づき、言う。
「いい加減、理由、教えろよ。あと、お前のバックにいる奴の目的は?」
「っく!! お前には、わからねぇよ……」
そうかよ、と俺は問答無用で連れて帰ろうとした時、気づいた。
ん？ クリスの視線は俺を見ていない。横の家族を見ている。い

や、あれは父親と母親を見て……
その時、俺は思い出した。
『知らない番号からだな？　もしもし……誰だ、お前……パパ、ママ!?
……一体、何が目的だ』
……繋がった。響の事があったため、気が動転していて冷静に考えれなかったが、戦っている内に頭が冷えて来て、思い出すことが出来た。
「なるほど……大体わかった」
俺がぼそっと言ったことで、クリスはニヤッと笑う。
なぜこんな回りくどいことをするのか……と思ったが、答えは単純明快。この場を見ている第三者がいるってことだろう。
つまり、そいつやその組織に両親を人質に取られてる、ってことなのだろうな。
それにしても、よかった、やっぱり何の理由もなく裏切ったんじゃない。それが分かっただけでも、十分だ。
「ここは預ける。次は……お前を殺してでも、お前を貰いに来るからな!!」
「……わかった」
アッサリと見逃す。不自然にとられるかもしれないが、ここでクリスを捕まえるのも不味い。
俺の返事を受け取ると、クリスは満足げに笑みを浮かべ、身をひるがえして公園を出て、あっという間に街の雑踏に消えていった。
預ける、か。あの言葉、俺に両親の件を預けるということだろう。そして、次の次は無いということ……多分、次に会うまでがクリスの両親の生存リミット。
これは、すべて俺にまかされたって事だろうな……
次に出会うまでに、見つけなくてはならない。
しかし、この件は俺の手に余る。俺もマークされているだろうし。
……しょうがない、あの人に頼むか。
とある人探しの天才に人探しを依頼するため、スマホを操作する。
そして、操作しながら思う。

今は3時だが、起きてるかな……起きていてくれよ……
と、俺の思いが伝わったのか、番号を押して何秒か経ったあと、プツッと電話が切り替わる音がして男の声がしてくる。
よかった、起きていてくれた!!
「もしもし?」
『おお、遊策じゃねーか! こんな夜中に、どした? あのお前に求婚してきた子とついに結婚か?』
ああ、俺をからかうその声が妙に頼もしく思えた。
とりあえず、話を円滑に進めるため、俺はそのからかいに応答する。
「籍は入れますけど、まだですよ」
『ゑ?』
うん、約束をさっそく守れなかった俺は結婚届にサインしなければならない。やったね、遊策君、家族が増えるよ!!
「それは置いといてですね!! 大変が大変なんです!!」
『おう、なんか必死さが伝わって来たわ……で、用は?』
流石鋭い、おふざけ無しで本題に入れるのは正直助かる。
「はい、実は依頼があってですね。依頼内容は、ある少女の両親の捜索なんですが――――」
俺は、二課のことを抜きで、大体の流れと依頼内容を説明したのだった。

電話から聞こえる弟弟子の声に応じる男の姿は、遊策のいる公園とは違う場所の公園にあった。
『依頼なんですが、ノイズが事件にかかわってて、あまり派手に動くのは危険なんで隠密でお願いできますか?』
「わかった、まかせとけ」
男は大体の説明と経緯、依頼内容を頭に反芻(はんすう)させる。
弟弟子は、焦りを隠そうともせず続ける。
『お願いします、FG崎さん!! あいつの両親を助けてやってください!!』

「おう、ま、俺に任しとけ。なんたって俺はＳＫＥＴ（スケット）　ＤＡＮＣＥ（団ッス）!!
……っってな？」
天パの男は、力強い笑みを浮かべそう言って、電話を切る。
男は、さて、どうするかと顎に手を当て考える。しばらくして、ぼさぼさの頭をかきながら、これからに必要な奴とモノをはじき出し、スマホをいじり、その人物の番号を出す。
「さて、まずあいつに連絡だな……荒事になるかもしれねぇし、鬼姫子の奴にも連絡しとくか」
クリスの両親捜索の準備に取り掛かる男の首からは、自身の自慢のゴーグルがキラリと光を反射していたのだった。

１８話　お見舞いとデレと野暮用

「そうか、クリス君が……」
「はい」
　俺は今二課の司令室にいる。
　今回の事の報告をするためだ。
「わかった、こちらでも動向は探ってみよう」
「ありがとうございます」
　報告が終わると、風鳴司令は俺のこれからの事を訪ねてくる。
「これから、響君の見舞いに行くのだろう？　これも持っていってやってくれないか？」
　そう言って、結構大きな紙袋を渡される。
　俺は何が入っているのだろうと、紙袋をのぞき込む。
「ん？　ああ、入院生活じゃ退屈だろうと思ってな。家にあるおすすめ映画を３０本ほど持って来たんだ」
「ああ、なるほど……わかりました。しっかり届けますね。それでは」
　そう言って、俺は司令室を出て、エレベーターに乗りリディアンから出ると、近場でタクシーを拾って、野暮用を済ませてから病院へ行く。

「響、来たぜ」
「あ!!　お兄さん!!」
　少し照れながらの太陽のような輝く笑顔……
　ヤバイ……可愛すぎかっ!!
　照れを隠すため、持ってきたものを出す。
「こ、これ、メロンだ。んで、こっちが風鳴司令からの差し入れ。映画の詰め合わせらしいぞ」
「うわぁ～、大きくておいしそうなメロンですねぇ～。これ、高かったんじゃないですか？　それに、映画もうれしいなぁ」
　響は嬉しそう見舞いの品を抱きしめる。

俺は響を抱きしめたい……っは、俺は一体何を考えて……？
なんだか自分が怖くなったので、話をしてごまかすことにする。
「そうそう、今度サクリストD――――デュランダルを移送する任務があるんだ」
「え、デュランダルを、ですか？」
「知ってたのか？」
「はい!!　二課の最深部には完全聖遺物のデュランダルがあるって聞かされてましたから……」
なるほど、それは装者にもということは職員全員の共通認識だったのだろう。なら、ここに来る前の野暮用で聞いた『色々な勢力がデュランダルを狙っている』という、言葉は無視できないな。
壁に耳あり障子に目あり、ともいうが、職員全員が知っているということは、壁や障子どころか人ごみの中で大声で叫ぶ事と同義。完全公開されていると言ってもいい、情報と同じということだ。誰が、スパイであるかもわからないしな。
俺は、これから起きるであろうこと予測し、はぁ、とため息をつく。
そんな俺を見かねたのか、場の雰囲気を変えるため、響は俺に話しかける。
「それより、な～んと、これを見てください!!」
「それは？」
響が手に広げて俺に見せてきたものそれは――――
「千羽鶴……いや、数が足りないから百羽鶴かな？」
「はい!!　これ、友達がくれたんですよ!!　今日、お見舞いに来てくれてですね……」
「なるほど、それにしても綺麗でいい折り鶴だな……折り鶴には、気持ちを込めるものだからな。綺麗なほど気持ちが強くこもっているって聞いたことがあるぜ？　きっと、そんだけ響の事を思って折ってくれたんだろうよ」
「綺麗なほど、気持ちがこもってる……えへへへ」
ハニカミながら笑っている響の横顔を見ていたら、俺も自然と笑顔になれた。

「あ、でもな、汚いからって、相手の気持ちがこもっていないって訳じゃないぞ？　そこは勘違いしちゃだめだ。折り鶴は願いを託すものなんだ。それを折ってくれたってことは、それが良い意味、悪い意味、どちらであれ想いや気持ちは少なからず入っているよ」
「はい、わかってます!!　私は、本当に友達に恵まれてるなーって思って、嬉しくなったんですよ!!」
「ん、そっか……」
その笑顔を見ていると、小さいことがどうでもよくなってくるな。
しばらく、ニコニコと鶴をいじる響を見て過ごす。

ひとしきりいじり倒し、つなぎが切れ、涙目になった響をあやしつつ、つなぎを直していると響が俺を呼ぶ。
「そうだ、お兄さん」
「んー？」
俺はそれに返事をしながら、つなぎを直す。
ここをこうして……っと、出来た。
「デュランダルの移送任務……無茶、しないでくださいね？」
俺が直し終わり、響に渡すと響はそう言ってきた。
「ああ、無茶はしないよ……」
それを聞くと、満足した顔で言う。
「なら、今回は無効にしてあげます」
「無効って？」
「あの約束の話ですよ。結婚届け、今回は勘弁してあげます!!」
「ふっ、ははは……そっか……なら、今度はきっちり守らないとな、響を」
俺は笑ってそう言う。
ただし、と付け加えて言う。
「勘違いしてもらっては困るが、別に俺はお前と結婚するのが嫌だってことは無い。少しアピールが激しいから困惑してるだけだよ」
すると、響は顔を伏せる。
「……響？」

俺はどうしたのかと心配で声をかける。
すると……
バッと、頭を上げ、カッっと目を開け、言う。
「お、お兄さんがデレた!!　聞きましたか、奥さん!!　お兄さんがデレましたよ!!」
……奥さんて誰だよ。
いやしかもデレって、結構俺は響に甘いと思うのだが……
つーか、俺のデレって、誰得だよ!!
「私だよ!!」
響が叫ぶ。いや、地の文に答えるんじゃないよ!?
そして、電話がかかって来た。未来からだ。
『私もだよ!!』
「何がだよ!?」
『いや言わないといけない気がして……』
そう言って、電話が切れる。
うちの妹は電波キャラなのか？
前の病院の時といい……
そんな、こんなあったが、ここから俺は色々な話をした。
今まであった事や、今日あった事、そして――――
そう、クリスのことだ。
響にだけは、包み隠さず、すべて話した。
コイツには知る権利がある。
話し終わった俺に、響は涙を流して言う。
「そうですか……クリスちゃん、そんな理由が……。お願いします……クリスちゃんを、助けてあげて欲しいんです。クリスちゃんは、普段は気取って、かっこつけてるけど、すごくいい子なんです」
「ああ、俺もそう思う」
「でも、責任を感じやすいところもあって……昔、私に一発流れ弾が当たっちゃたことがあるんです。その時、自分の流れ弾で怪我をさせてしまったーって、すごく落ち込んじゃって……」
「そうだろうな、んで、多分今回もお前を撃った事をスゲー気にして

る」
俺は、クリスのセリフを思い出す。
『あたしは、あたしはッ!! あの馬鹿を!! 響をッ!! 撃ったんだぞ!? もう今さら戻れるかよッ!!』
あの心からの叫びが、クリスが自分を責めているであろう証拠だ。
何も思ってないなら、あんなことは叫ばない。
「だからさ、全部解決して、お前の前に縛ってでも連れて来て謝らせる」
「で、私がクリスちゃんを許すっていえばいいんですね？」
「そういうこった!!」
今後の方針は固まっている。
クリスの両親助けて、クリスを開放させ、バックにいる奴を捕まえる。
いたってシンプルなことだ。
やるべきことが決まり、そろそろ面会の時間も迫ってたので、俺は席を立つ。
その時、響が俺に聞いてきた。……答えに困る質問を。
「ところで、お兄さん。聞きたかったんですが、服についてる赤い斑点って、なんです？」
「ん、ああ、ちょっと野暮用をしてる時にペンキがついちまったようだな」
気にするな、と笑顔で、しかし、目は笑わず言う俺に、さほど気にした様子はない響。
その時、ついていたテレビから、ニュースが流れてくる。
『臨時ニュースです。今日、広木防衛大臣がテロリストに襲われたという事件が発生しました。警察では、革新派のテロリストの犯行とみて捜査しています。……なお、広木防衛大臣は怪我を負いましたが、命に別状はないということです』
「はえ～、怖いですねぇ。日本でこんな事件が起こるなんて……でも、無事でよかったですね」
「あ、ああ、そうダナー」

俺の額には滝のような汗が伝っていた。
さて、俺は何も知らないなー。
そうやって口笛を吹くと、看護師が入ってくる。
「立花さーん!!　体を拭く時間ですよー!!」
「なぁに!?　俺はこんなとこに居られるか!!　帰らしてもらう!!　てなわけで、俺はお邪魔になりそうなので帰るわ。んじゃなー響」
「あ、うん!!　また来てくださいね!!」
俺は手を振ると、扉を閉める。
「ヒーロさん、ちょっと待ってくださいよ～」
「ノーサンキューだ、研修医」
病院を出る前に、医者二人とすれ違う。
そして病院を出てから気付いた。
ポケットにある、響のガングニールの事だ。
また今度お見舞いに行ったときに渡せばいいと思い、俺はその場を後にしたのだった。
……今の俺は知らなかった。
お見舞いにはもう来れないということを……

19話　サクリストD

見舞いの日から、一週間と4日が経った。
俺は今現在何をしているかと言うと、了子さんの車に乗り込んでいる。
そう、これからサクリストDの輸送作戦が始まるのだ。
この一週間、何もクリスやその背後の人物のアクションは無かったが、逆にそれが不吉さを物語る。
しかし、この一週間、自分も何もしていなかったわけではない。
犯人の特定は大方すんでいる。だがしかし、犯人を追い詰めるための証拠集めに難航している。このままでは言い逃れされるのが関の山だろう。
それと同時に、クリスの両親の情報も集めて兄弟子に渡してもいるのだが、これが骨が折れた。
実際、あまり情報は集まっていない。兄弟子たちの方が情報を集めているくらいだ。兄弟子たちすごいな……もう、両親を見つけるまで時間はかからないとも言っていたな。
それにしても緊張してきた。上記の理由で、寝ていなくてふらふらだっていうのもあるし、別の理由もある。今はどうでもいいことだが、確か、原作では響がやってたよな、コレ。
でも、圧倒的に違うことが一つ。
「なー、なんであたしらはバイクなんだ？」
「バイクの方が、立ち回りはしやすいでしょ？　遊策、あなたはサクリストDを頼むわ。露払いは私と奏に任せなさい」
そう言って、ヘルメットをかぶる翼。バイクに二人乗りした奏と翼が、俺の乗る了子さんの車の横についている。
そう、ここにいる装者が3人だってことだ。そのことが俺の緊張を少しほぐす。
さて……と。
俺は、そっと同乗する了子さんを見る。
俺の知っている状況とは違うが、この一連の犯行、十中八九この人

が犯人だ。
終わりの名を持つ、先史文明期の巫女フィーネ。それが、櫻井了子の真の姿のはずだ。
原作では、この人がすべての事件の始まりであり、カギを握っている重要人物兼ラスボスだったはずだ。
そう、犯人が特定できたとして、ここで問題が一つ。この人が犯人だとすると、どう出てくる？　ってことだ。
クリスを操っているのもこの人だと仮定すると、クリスは出してくるだろうな。
……まいったな、兄弟子からは捜査でいくつかの場所の目ぼしがついたということで
だが、ここで俺とクリスが合うのは不味い。
そもそも、このサク、サクリ、サクリストD……ええい、面倒だ。デュランダルと呼ばせてもらおう。
このデュランダルは絶対的に奪う必要はないのが現状であると思う。そう、二課にあれば、それで条件は達成できるものなのだし。
ただ、二課に置いておくために妨害は絶対にしてくるだろう。
色々な勢力が狙っているという話もある。
『さて、二課の諸君!!　作戦決行の時間だ。全員、気張っていくぞ!!』
「「「「「はい!!」」」」」
『それでは、ミッションスタートだ!!』
作戦開始の号令がなった。
これから始まる嵐の到来を予感する俺だった。

「それにしても何も来ないわねー」
任務開始からしばらくたった時、そう言った了子さんに、そりゃアンタが何もしてないからだろ……と、突っ込みそうになったがぐっとこらえる。
確かに他勢力からの介入も無く、何事も無く進んでいた。
が、しかし、車が橋に差し掛かった、その時!!
橋全体が振動し、橋の一部が崩壊したのだ。

『う、うわあああああ!!』
橋の崩落に巻き込まれ、二・三台の同行車が橋の下に落ちていく。
……よかった。チラッと見えたが、何とか脱出できたようだった。
しかし、そうして、安心してばかりもいられないのが現状である。
ノイズだ。ノイズが現れ、攻撃してきたのだった。
「ちょーっと、トバスわよ!! しっかり捕まってなさい!!」
「はい!!」
俺は、しっかりとデュランダルが入ったケースを握りしめる。

一台二台とノイズによって同行車が脱落していく中、了子さんの車は工業地帯へと進路をとった。
「おい、了子さん!! なんでそっちに!?」
並走する翼と奏のバイクから奏がそう言ってくる。
「広く戦える場所の方がいいでしょ!!」
「それはそうだけど……」
そう言っている間にも、ノイズは増え続ける。
そして、アッという間に囲まれてしまった。
「っく、ここは私と奏で何とかする。櫻井子女と遊策は先に!!」
翼が、そう言って、シンフォギアでバイクを変形させ、俺達の進む道を切り開く。
俺は車から降り、翼が作ってくれた道を了子さんと一緒にデュランダルを抱えて走り抜ける。それと同時に、翼と奏はノイズの群に突っ込んでいった。
了子さんにしたがい、ノイズのいないところへと、奥へ奥へ俺達は進んでいく。
誘導されていると知りながら……

そして、現在――――
『翼と奏君の方には、クリス君が現れた!! そちらは!?』
司令からの声が聞こえる。

「なるほど、クリスは俺の方じゃなく、奏と翼に当てたか……。こちらは、了子さんが行方不明。そして、今回の事件の黒幕と思われる、フィーネを名乗るＢＢ……女性が現れました」
そう、了子さんははぐれたふりをして、フィーネの姿になって現れた。
「あんたは一体何をしにここへ来た!?」
俺はフィーネとなった了子さんに聞く。
「ふふふ、あなた風に言えば、３つ……一つは、このソロモンの杖の実験」
そう言って、ある杖――――ソロモンの杖と呼ばれる聖遺物を取り出すフィーネ。
フィーネはそれをいじるとノイズを出したり消したりを繰り返す。
「ふむ、出し入れの機能は十全っと」
機能を確かめたあと、言葉を続ける。
「二つは、サクリストＤの回収。そして、最後、三つは、あなたを捕縛すること」
そう言って、俺を見る。
「っち、俺のマネを!!　よく調べておいでで!!」
３つは俺の口癖だ。分析する時は大体、３つを見つけようとしてしまう。
俺の言葉に、薄くフィーネは笑い、さらに追い打ちをかけるように俺の話をする。
「ええ、よく知ってるわ……好物はカレー、特に鶏肉を使った通称チキンカレーが好きね。好きなものは特撮とゲーム、好きなことは通販番組の視聴、口癖は３つ。嫌いな食べ物は、特になし、嫌いなものは、虫……昆虫とかは大丈夫みたいだけどそれ以外は大体駄目みたいね。趣味は料理とジェネシス。妹をエンジェルと言ったこと４００回。命からがら危機を脱したこと５７８９回。人を助けること６８９０回。そして、立花響に結婚を迫られること９９９９回……とまだまだ言えるけど、言う?」
「……ストーカーかよお前」

かなり俺の事を調べていて軽く引く。
そして、響の結婚を迫られた回数が何気なくヤバイ。あと一回で、あらまびっくり～1万ポイント達成だぜ!!
「研究対象の事をよく知らべるのは基本中の基本よ？」
そう言ったフィーネだが、二課の皆さんは『確かにそうだけど、いや、なにもそこまでしなくても……』と、引き気味だ。
俺は首を振り、気を取り直すと、逆にチャンスだと考える。
「しかし、お前が顔を出してくれたのは行幸だ!!　ここで、俺に倒されろ!!」
ここで俺がフィーネを捕縛出来たら、すべての問題が解決するのだ。クリスのことも含めて。
しかし、相手は終わりの名を持つ巫女……ただでここに来ているわけではなかった。
「コイツを相手でも、私を捕まえられるかしら？」
さっと、杖を振るいノイズを出す。
しかも、そのノイズは――――黒かった。
「……嘘だろ、カルマノイズを出した!?」
そう俺の言葉を表すように、黒いノイズ、カルマノイズをフィーネは出したのだ。
何!?　ソロモンの杖で操れるのは、通常のノイズだけではないのか!?
「が、今の俺ならば一体程度なら!!」
困惑したが、一体程度ならばフジサキバレンシアで対処可能だ。アームドギアをある。
そう思い、俺はアームドギアを取り出し、かまえる。
「あら、もうアームドギアをものにしたの？　なら、二体ならどうかしら？」
そう言って、もう一体のカルマノイズを出すフィーネ。
「なっ!?」
驚愕を隠しえない俺に更なる衝撃が走る。
「さらに、もう一体」

もう一体、合計3体のカルマノイズを呼び出すフィーネ。
「か、カルマノイズが……」
『3体だとォ!?』
司令が叫ぶが、そうカルマノイズが3体、それも全部がフィーネに従っている。
これは、不味い。一体ならばまだ対処できたかもしれないが、二体三体と増やされてはたまったものではない!!
「ソロモンの杖、起動実験ＳＴＡＲＴ」
フィーネの合図の後、三体のカルマノイズが俺に襲い掛かった。

２０話　デュランダル

刀を構え、工場の煙突を見上げる翼。
対峙するのは、シンフォギア・イチバルを纏ったクリスだった。
「何故だ！　何故だ、雪音ッ!!　なぜ、立花を撃った!!　なぜ私達を裏切った!!　せめて、理由を教えろ!!」
翼はクリスに向かってそう叫ぶ。
しかし、返答は鉛玉の雨だった。
「っく!!」
一旦後退し、クリスの射線上から退避する翼。
「（……思えば、私は雪音の事をしっかり知ろうとしていなかったのかもしれない……）」
翼は物陰に隠れながら、出会った頃を思い出す。

始めに見たのは、司令……おじさまに連れられ、借りてきた猫のようにガチガチに緊張した雪音だったな……
その後の自己紹介で、仲良くなって……
『第二号聖遺物・イチイバルの装者として呼ばれた、ゆ、雪音クリス、です……よろしく、お願いします……』
『そうか、雪音と言うのか……しかし、無理しなくてもいいぞ？　言いにくいなら、別に本来の喋り方で』
『わかった……よろしくな！　えーと？』
『ああ、私は風鳴翼だ。以後、よろしく頼む』
『翼先輩……で、いいか？』
『翼先輩!?』
『ど、どうした？』
『もう一度言ってくれないか？』
『ちょ、顔が近けぇぞ、アンタ!!』
『もう一回!!　もう一回!!』
『なんだよ!?　つ、翼先輩!!　……こ、これで満足かよ？』
『……雪音ぇ!!』

『わ～、は、放せよ!!　こういうことは家で……って、家でも駄目だろ!!』
そう言って抱きしめた私の中でジタバタと暴れる雪音が可愛くてさらに抱きしめたりもした。
あの時の私は、周りは大人や年上の者たちばかりで、先輩と言われたことが無かった。
あまりにも、新鮮過ぎて何回も言わせようとして、いつの間にか頑として雪音は言われないようになっていたんだっけな……
「翼!!　こっちはノイズ片付けたぞ!!　クリスの方はどうだ？」
身を隠す私にノイズの相手を頼んでいた奏が帰ってくる。
それと同時に、雪音が動いた。
煙突から、煙突へと渡り、銃弾をばらまく。
銃弾により、土の地面から土煙が上がり、煙に覆われる。
私は、煙を突っ切り一気に接近、雪音とつばぜり合いの体制になる。
「雪音っ!!　何とか言ってくれ!!」
「っは、なら一つ言っておいてやる、あの馬鹿の彼氏、ヤバイかもな」
ツバと、ボウガンをそらし、つばぜり合いを脱出、追撃の斬撃もバックステップでかわし、別の煙突に飛び移る雪音。
私は雪音の言ったことを考える。きっと、馬鹿とは立花の事だ。そして、彼氏とは……ああ、なるほど!!
「遊策が?!」
ヤバイとはどういうことだ？
その疑問を口に出そうとした時、巨大なエネルギー発生を感知した。
これは……向こうの方、丁度、遊策たちが逃げた方だ。
「っち、まずいことになりそうだ……。ここはあたしにまかせて、翼は行け!!」
「しかし……」
何かを理解した奏が私の隣に着地し、そう言うが、私は素直に頷けない。
しかし、雪音が……

「大丈夫だ!!　あたしが説得してみるから、翼は行け!!　遊策が連れていかれちまうしれねーぞ!!　遊策の奴は融合症例……つまり、聖遺物の力を研究したい奴らにとって格好の獲物って訳だ!!」
奏がそう言って、雪音に接近戦を仕掛ける。
雪音も雪音で、それを迎え撃ちつつ、私に向かって言う。
「……行けばいいじゃねーかよ、先輩。あたしは、この人の相手であんたを追えね
ーしな」
私は先輩、の言葉に違和感を覚える。
先輩とは、口が裂けても言おうとしなかった言葉だ。それをここで言った意味は？
「そうか、ならば……奏、雪音の相手を頼む!!」
意味はほかならない、何か伝えたいことがあるということだ。
例えば、雪音は遊策と戦った時に何か遊策に頼んだとする。それを達成できなくなるのは困るから、助けに行け……今回はそんな感じか？
ともかく、私は遊策の元に急ぐのであった。

「グッ……、はあ、はぁ……」
ガードした俺の槍が砕ける。
俺は荒い息を吐いて、膝をついた。
「まさか、カルマノイズ3体にここまで抗うとはね」
俺の足元には、カルマノイズの一体が砕けた方とは別の槍で刺しにして、縫い付けてあった。
実は、早々に、一体のカルマノイズを縫い付け、二体のカルマノイズを相手にしていたのだ。
最初の方は、善戦、いや相手が回復するとはいえ圧倒していた。が、急に二体のカルマノイズの動きが急に変わった。
そう、連携を取ってくるようになったのだ。
連携を重ねられ、ガードする一方となり、ついに俺の槍が砕かれて

しまった。
そして、間の悪いことに……俺の縫い付けていた槍を砕いて、拘束を脱出するカルマノイズ。
これで振り出し――――いや、アームドギアが砕かれ、結構なダメージを喰らった。最悪の状態になったと言っても過言ではない。
それにしても……
「ぐっ、なんで急に動きが……？」
そう言って気付く、そう、フィーネがソロモンの杖をノイズに向けていたことを。
「そうか、お前がカルマノイズに指示してやがったのか……!!」
「あら、ばれちゃった？」
おどけたようにいい、ソロモンの杖を振るフィーネ。
悔しいが、今の俺にはどうすることもできない。
カルマノイズ複数が相手では、エオンフヤーの本領が発揮できない……
エオンフヤーは一対一を想定し考案されたものだ。技の発動には相手の攻撃を受け流すことが必要になる。多方向から攻撃は捌き切れずに、攻撃を喰らってしまうのだ。
多人数を相手にすること自体は、やって来たので立ち回りは出来るが、カルマノイズ相手にエオンフヤー、もといフジサキバレンシアが使えないのでは、決定打になりえない。
どうする？　このままでは、不味い。カルマノイズは生半可な攻撃では、すぐに回復する。一撃で倒せるような大火力が無ければ倒せない。そして、俺には火力がある攻撃がない……
完全に詰んでいるなぁ、俺。
「……でも、それが屈する理由にはなりはしないよな!!」
そう言って俺は、ゆっくりと立ち上がる。
グダグダと色々考えたが、やめだ。いつだって、俺は行き当たりばったりで生き抜いてきたんだ。こんなところで、つまずいていられるか。
さっさと、このノイズ倒して!!　クリスの両親助けて!!　心で泣い

てる女の子を助ける!!
今はそれだけでいい!!
「ほう……いい目をするじゃない」
「っへ、この胸の闘志、消せるものなら……消してみやがれっ!!」
「なら、お望み通り!! 消してあげるわ、やりなさい!!」
啖呵を切る俺に、カルマノイズをけしかけるフィーネ。
俺は迫りくる攻撃を右へ左へと避け、喰らいそうな攻撃だけを的確に受け流していく。
「お前らの速さと力は、もう慣れた!!」
確かに攻撃力と機動力は脅威だった。しかし、一度体験してしまえばどうということは無い。
問題である、複数同時攻撃にさえ気を付ければ……
「ぐっあ?!」
駄目でした。
やはり、複数同時攻撃がネックになってきてしまう。
ッチ、複数同時攻撃、連携攻撃の肝はフィーネが持つソロモンの杖!!
奴が居なけりゃあ、まだやりようはあるのに!!
どうする?
考えることは必要だ……
ネガティブに考えるのではなく、生き残るためにも、この状況を打破する方法を考えろ!!
火力が無い、火力……火力?
ふと、攻撃を耐える俺の目の端に、何かを入れてあるようなケースが映る。
そこで俺は輸送していた物がなんであったかを思い出し、頬を釣り上げた。
「(目の色が変わった? 何を仕掛けてくる気だ?)」
フィーネは最大の警戒を持って、何が出て来ても対応できるように

ソロモンの杖を構え、カルマノイズを警戒させる。
これは遊策が規格外の行動をしてくるがゆえに、野行動だった。
しかし、これは逆に遊策に反撃の目を与えるチャンスとなってしまった。
っバと、ケースに飛びつき、中身を手にする遊策。
あっ、と自身の失策をフィーネが悟った時には遅かった。
「これがデュランダルか!! なんていう力だよ……」
大きな力の鼓動を感じる。
そして、手に持ったデュランダルは黄金に光り輝き、光の柱を立ち昇らせた。光が治まるとただの鈍い鉄の塊だったデュランダルの刀身は、黄金に変わっていた。
しかし、同時に、デュランダルを握る俺の手から感情がダイレクトに俺に伝わっていき、感情を揺さぶり、デュランダルは俺を乗っ取ろうとする。
「ぐうぅぅぅぅぅ、意識が、デュランダルに、引っ張られ、そう、だ……」
少しでも気を抜くと、意識を持っていかれそうになる。逆転の切り札として掴んだはいいが、とんだジャジャ馬だ!!
「でも、このエネルギーをカルマノイズに向かって放てば……!!!」
俺はゆっくりとデュランダルの柄を両手で持つと、振りかぶる。
カルマノイズを俺は視界に収め、気合を込め言う。
「喰らえぇぇぇぇ!!!」
次の瞬間、俺は巨大に膨張したエネルギーを解き放ち、横に一閃。
すさまじい破壊の嵐が吹き荒れた。
極太のレーザーのような光の斬撃が、カルマノイズ達を一瞬で溶かし、一掃したのであった。

「っち、カルマノイズがやられたか……でも、データは取れたし、デュランダルも覚醒した。それに……」

そう言って、フィーネはちらりと視線をやる。そこには、遊策が倒れていた。
先程の斬撃を放った後、力を使い果たし、そこで倒れこんでしまったのだ。
「くっ、そぉ……」
倒れ伏したまま、悔しそうに唸る遊策だったが、全くと言っていいほど体が動かない。
「ふふふ、あの子に頼むまでもないわね、ここで――――」
ゆっくりとフィーネが遊策に手を伸ばした、その時。
一発の銃弾がそこに打ち込まれた。
そして、突然所属不明のヘリが現れ、そこから次々と軍隊のような者たちが次々に降下してくる。
「く!! ここで介入してくるか!! 米国政府!!」
厄介そうにそう言ったフィーネは、遊策を回収しようとする軍隊にむけて新しくノイズを放つ。
ノイズは軍隊を蹴散らす。ノイズの炭素化能力と位相をずらす能力に、米国政府の軍隊はみるみるうちに減っていく。

それを見たフィーネは、改めて遊策を回収しようと手を伸ばす。
そこに、大きな壁が現れた。
「こ、これは、壁!?」
「剣だ!!」
そう言って現れたのは、風鳴翼!!
【天ノ逆鱗】
これは、そう呼ばれる技だった。翼の持っているアームドギアを巨大化させ、地面に突き立てることで、フィーネから遊策を守ったのだ。
「っち……まあ、データとサンプリングは済んだ。今回はこれで良しとしましょう」
あっさりと身を引くフィーネに不信感を募らせる翼は、遊策を庇いながら、油断なく構える。
「逃がすとでも?」

「いいえ、あなたは見逃すわ……遊策君がいるものね？」
「……っく、行くがいい」
一度チラッと後ろを見て、遊策の姿を見る。もうすでに意識を失っているようだった。
悔しそうにそう言った翼の姿を一瞥し、身をひるがえし一瞬で姿を消したフィーネであった……
デュランダル移送作戦……失敗

21話　真実は一つ!!　……じゃない

「ん？　ここは……？　俺は確か、デュランダルを……」

眼が、覚めた。

状況を確認するとどうやら、また病院らしい。

日付けを見てみると……

……

把握した、響が入院してから、2週間。デュランダル移送作戦から3日がたったようだ。デュランダルを放ち意識を失ってから、三日三晩ずっと寝ていたらしい。

電話で、二課に問い合わせ、報告ともろもろの確認をすると、響も完全にではないが回復し退院、今では日常生活を送れるようになっている事を知った。もちろん、激しい運動をすると傷が開くということは言われているようだが……

それにしても、回復力スゲェな……流石、原作主人公。結局、お見舞いに行けなかったな……

と、まあ、くよくよしてはいられない。

俺は俺のやるべきことをしよう。

病院から体が動かせないので、ここでとりあえずフィーネの目的を整理しようと思う。

一つ、多分だが、融合症例である俺の捕獲。

二つ、クリスを使って何かをさせたい……これは多分ソロモンの杖の起動だろうと思う。

根拠は、フィーネが実験だといったこと。出し入れしたり起動の確認をしていたことから察すると、まだ、起動していなかったということじゃないのかと結論づける。この1・2週間何も音沙汰が無かったのは、多分、これの起動のためクリスを使っていたからだろう。

そして、三つ……月を破壊する砲台、カ・ディンギルの起動。これは、二課に続く、エレベーターで確認できたことだが、完成していると言ってもいい。原作通り、カ・ディンギルは二課の施設の一部として建築されている。

……もしかして、あれ？　揃ってる？
融合症例の俺のデータは確か戦いを見たり、検査するだけで十分揃うものだったはずだ。つまり、必ずしも俺を捕縛する必要はない。ソロモンの杖の起動とカ・ディンギル……これは見た通り出来ている。
データの蓄積具合次第で、もうフィーネは行動できるんじゃないか、と思った瞬間、電話が鳴り響く。
まさか……
「もしもし……」
『おー、元気かー？』
「ＦＧ崎さん!?」
電話の主は兄弟子からだった。
『今日、お前が言っていた子の親が捕らわれていると思われる場所の見当がついた。今、探っている途中だ、っと……いたぞ、ビンゴだ』
「って、あんたもう潜入してんですか!?」
『ん、今回は確認のみだ。なにも危険なことはねーよ。閉じ込められてるところも、倉庫だ。周りに米国の兵隊がいるがな』
確認のみか、ならばよかった。それにしても倉庫か……
「ありがとうございます!!　これで……」
俺の言う言葉を遮り、ＦＧ崎さんは話を続ける。
『ああ、だがまだ助けられねーな。６時間ごとに交代が行われるみたいでな。一番手薄になるのは……明日の午後４時だな』
「それでも、ここまで来てくれれば……信じてますよ、兄弟子」
『おう、まかせとけ。それじゃ、切るぞ？』
「はい!!」
電話切った俺は、思わずガッツポーズをしてしまう。
しかし、いつまでも浮かれていられない。
「さて、じゃあ、俺に出来る事をやりますか!!」
パンッと、俺は自身の頬を叩くと、俺は頭の中でフィーネを追い詰める計画を立て始めた。
……これはバクチになるだろうけど、もうこれしかない。
俺はとあるところに電話をかけ始めた。

検査のため一日たった後、俺は病院を退院した。
見送りに来てくれた俺の担当医が、ため息を吐く。
「いやいや、それにしても君、よく病院に来るね……」
「あははは……すいません。ですが、今回もお世話になりました！」
俺はお世話になった病院の医者である、カエル顔の医者に頭を下げる。
「また戻ってこないことを祈っているよ」と、医者は最後に言い、俺はお礼を言いつつ、その場を後にしようとした。
その時、俺のポケットのスマホが音を立てて震える。
メールだ。宛名を確認し、俺は覚悟を決めた。
――――そう、メールはクリスからのデートのお誘いだった。

「クリス……」
「あたしは、出来ればもう会いたくなかったんだけどな……」
俺はクリスと廃ビルの一室で対峙する。
「そんなこと言うなよ……俺は会いたくて仕方なかったぞ？」
「は、はぁ!? な、何言ってんだよ!!」
「だって、俺……クリスのこと好きだし」
そう、大切な仲間として。
俺は、パーティーを計画してくれてたときいてすごくうれしかったのだ。俺はそうやって、無条件に誰かに歓迎されたようなことはあまりなかったし、仲間なんて持ったことは無かった。いつも、一人か兄弟子と一緒だったかだ。だからこそ、そうやって、これから仲間だとパーティーを開いてもらって、俺は決めた。
仲間は必ず守ると。
そう俺は決意と共に言ったのだが、クリスは何故か赤くなり、言葉を詰まらせながら言う。
「はぁぁぁぁぁ!!??!! ばっ、ばっ、ばばばバカやろぉ……あたしらはまだ

あったばっかりだろうが!!　大体、お前には響の奴がっ!!」
「今、あいつは関係ないっ!!　あったばっかりでも関係ないだろう!!　好きだっていう気持ちに、会ってすぐとか関係無いだろう!!　お前を好きで守りたいって思って、何が悪いんだよ!!」
仲間として当然の事だ。
誓ったのだ。この魂に。
仲間が泣いていたら、すぐに手を差し伸べれる奴になると。
「だから、困っているクリスを見逃せないし、見逃さない!!」
「っつ!!　う、う、うるさい!!　もう喋るな!!　あたしは言ったはずだぞ、次は殺してでもお前を連れていくって!!」
「黙って連れていかれるわけにはいかないんだよ!!　粘らせて貰うぞ!!　あとちょっとなんだ!!」
そう互いに言い合って、ギアを纏う。両者は、どちらともなく同時に地面を蹴って、激突した。

「始まったわね……」
闇の中に一人、女が居た。闇の中にモニターの光だけが光っている。
女性が見るモニターの中では少女と青年、二人の男女が戦闘を行っている。
少女の方は、ガン＝カタ……
青年の方は、槍と訳の分からないＢＵＺＹＵＴＵ、もとい武術を交えて戦っている。
最初は青年の方が押していたのだが、今では少女に分がある。
理由は簡単だ。青年は少女を傷つけない様に戦っているのに対し、少女は殺す気で戦っている。しかも、槍が大振りできないようなビルの部屋の中だ。
小刻みに振るってくる槍を捌き、胴に蹴りの一撃を加える少女。
青年は防戦一方だ。槍を盾に使ったりしているが限界は近そうだ。
そして、限界は来た

パンッと、少女が放った銃弾が青年を穿つ。腹部に徐々に血のシミが広がっていく。
そして、倒れ伏した……
「まあ、こんなものか……ん？」
女はあっさりとした幕切れに、少しがっかりしような表情だったが、モニターを見て気づく。
少女が、こちらに向かって何か言っている。
女は、モニターを切り替えると音声を拾う。
「なに？」
『約束だ、あんたの望み通りこいつを倒した。あんたがこっちに取りに来てくれ。それで、あたしのパパとママを返してくれッ!!』
女は少し考えた後、ため息をつきその言葉に応じる。
「わかったわ……最後くらい、貴女に姿を見せてあげましょうか」
そう言うと、女はすべて脱いでいた服を着直し、部屋の扉を開けるのだった。

あたしは遊策を撃ち、ギアを解除した後、遊策の傷口をタオルで抑え、手と足を縛った。
あたしの予測通り、数分であたしを操っていた者……フィーネが現れる。
「あんたの事だ。すぐ近くで見てると思ってた」
「あら、中々鋭いじゃない？」
そう言って軽口を叩いて来るフィーネを殴り倒してしまいたくなるが、ぐっとこらえる。
「約束だ。こいつは縛ってある。さっさと連れてけ」
「そうね……」
あたしの後ろにいる遊策に向かって歩いていくフィーネ。
……今だ!!
「な、クリス、貴女何を――――」
「へっ!!」

あたしは捕縛用の手錠をフィーネに対してかける。
「やっと、捕まえた!!」
「貴方、裏切ったの!?」
「っは、誰もあんたの手先になった覚えはねぇ!!」
「っく、なぜ今になって……」
「それは、俺から説明しよう」
そう声が聞こえた――――

俺は、体を起こすと言う。
「それは、俺から説明しよう」
フィーネは俺を見ると、驚愕に目を見開く。
「な!? 貴方、なぜ!? ……そう言うことね」
驚きは一瞬だった。すぐに理解し、納得いったように言う。
「全部、芝居だったのね」
「そう、一芝居うたせてもらったのさ! ま、少し痛かったが、な?」
そう言って、種明かしとして鉄板を腹から出す。鉄板は銃弾によって貫通し、腹に傷があったが見た目に反し軽傷だ。
それを見たフィーネは、俺とクリスに問う。
「全く危険な芝居ね……一体いつ打ち合わせたの? 見たて聞いた限り、そんなことをする暇はなかったはずだし、人質もいるのよ?」
「俺のギアに、スマホを取り付けたのさ」
槍を見せ、スマホが取り付けてあることを見せる。
ギアと言うものはかなり使用者の自由が利くみたいだな。スマホを取り付けれるようにイメージして武装を出したら、本当にできたのだから驚きだ。
「こうやって、袖口にあるマイクで言葉を……」
袖口を口元にやり、ぼそっと、何かを呟く。すると――――
『喋れば、こうやってスマホに表示されるって訳だ』
スマホの画面に俺の言葉の続きが表示された。
「なるほどね、そこで自身を撃つようにいって、私を誘導するための芝

居をうってもらった、と……」
そう、あの時……
『俺を撃ってくれ。フィーネを呼び出して、捕まえる。一芝居うつぞ』
と、書かれた画面と同時にあるものと一緒に見せた。
その後はアドリブで、クリスが全部やってくれたっていう訳だ。
「そーいうことぉ!!」
俺はフィーネに向かってベロを出して、両手の中指を立てて突き上げる。俗に言う、ファ○クサインでフィーネを煽る。
「そう、なら人質の命は……いらないわね!!」
イラッと来たフィーネは電話をかけようとしたが……
「もちろん、助けたさ」
俺に止められる。俺はスマホを槍から取り外し、画面を操作しある動画を、ミュートを解除し見せる。
そこには……
ＦＧ崎さんと仲間二人が、クリスの両親と一緒に映っているところだった。
『救出完了ぉぉぉぉぉぉ!!!!!!　あーい、あーいあいあーい!!』
三人は手を叩き合い、学生のようなノリではしゃぎ合う。
『イッテイーヨ！　イッテイーヨ！』
『カラフル弾幕流すのやめぇ!!』
メガネをかけたＦＧ崎さんの仲間の男性は、ＰＣをいじって弾幕を動画につけているようだった。それに大阪弁の女性がツッコミを入れる。
ＦＧ崎さんは、口をとがらせると、隣の男性と肩を組みつついう。
『音声ねーんだからしょーがねーだろ？　なー、スイッチ』
『全く、実に君は馬鹿だな（わさび声）』
『おーう!?　ケンカか？　ケンカうってるんか？　よし来た、買ったるぞボケぇ!!　どこや？　どこをそぎ落として欲しいんやぁ!?』
スイッチと呼ばれたメガネのＰＣの男性を、大阪弁の女性が締め上げる。
ひとしきり、コントのようなやり取りが終わり、最後として三人が

集まり言葉をそれぞれ言う。
『まあ、音声が後から聞けるようにはした。最後に一言いうなら今だぞ？』
『流石、スイッチィ!!　頑張れよ、遊策!!　こっちは助けた!!』
『遊策!!　ガツンとかましたれや!!』
そこで動画が切れた。
全く、俺へのエールまで入れて来るなんてさ……ありがとうございます、お三方。
エールを貰ったんだ。これは、負けられないな!!
俺はスマホをポケットにしまい込み、話を切り出す。
「さて、人質はこれでいなくなった……ついでに、ここで犯人当てと行きましょうか!!」
「犯人？」
クリスがそう呟く。
俺は「そう」と言って、続ける。
「この事件には二課のある人物が深くかかわっているのさ。ねぇ――――」
一旦ため、俺は告げる。この一連の事件の犯人の名を。
「櫻井了子さん？　フィーネ、それはあんたの今の名だろう？」

22話　暴走

その場を静寂が包み込む。
「……なぜ、分かったのかしら？」
そう絞り出したのはフィーネだった。
「ああ、認めちまうんだな」
「だってそうでしょう。あなたは確信をもってここに来た？　違う？」
ああ、そうだ。俺があんたを犯人だと確信する理由は三つある。
「一つ、俺はある人に櫻井了子……つまり、あんたの有無を確認してもらっていた。
結果、俺とクリスが闘っている時やフィーネが出現している時はあんたが存在しないことがわかった」
クリスが息をのむ音が聞こえた。
「でも、これじゃ決定的とは言えない」
俺は話を続ける。
「そこで、二つ。二課のデータベースを全部洗い直してみた。櫻井了子、つまり、あんたの経歴を、な。そこにはいたって怪しいところはなかった……でも、一つだけ見落としがあったみたいだな。米国の方にあんたの情報があったよ。米国と言やあ、あんたが繋がっていたようなことを言っていただろう？　まあ、不仲になったようで軽く教えてくれたよ……」
そう、今回俺がバクチだと言ったのは、米軍との交渉だ。
いや、交渉とも言えない幼稚なものだったが、何とかなった。
「俺、米軍には知り合いが結構いてな。今回の事は、過激派の独断だったみたいだな？」
狙われている米軍に頼るのは、危険だと思ったが背に腹は代えられない。知り合いのつてで、米軍と取引した。
櫻井了子の情報と俺のギアの一部の交換を申し出たのだ。
……うーん、国際問題になったりしないかな。ま、まあフィーネがいる方が脅威となるはず……何とか、おとがめなしにならないか

なぁ。
まあ、得られた情報も少なくはなかったのでリスクにはあっていたのだろう。さすがに、自国に関する情報、国の不利になるような情報はなかったが、櫻井了子の経歴は山ほど手に入った。フィーネとしてのデータまで教えてくれたのは、多分トカゲのしっぽきりだったのだろう。
フィーネが倒された後、自国はフィーネを見張ってました。別に、何もやましいことはありません。と、主張できるからな。
「そして、三つ目は……必要か？」
「いえ、いらないわ」
「それは結構」
……三つ目なんてないなんて言えない。いや、正確にはあるのだが言えない。
三つ、俺が原作を知っていたから……なんていうことは。
そこまで考えて、ふとフィーネの横にいるクリスの様子がおかしいと気がついた。
「クリス？」
俺は、クリスの名を呼ぶが返事が無い。
「ずっと騙してた、っていうのかよ。あたしだけじゃなく、みんな……」
ポツリとクリスはそう漏らし、そして、ギリッという、歯ぎしりの音がこちらまで飛んできた。
クリスは顔を上げ――――その怒りが爆発した。
「あんたは、あたしの逆さ鱗にふれた……あたしの命より大切な家族を傷つけた!!　絶対許さねぇ!!!」
怒号を上げ、一瞬で歌いギアを纏って銃口を向けるクリスだったが、フィーネは手錠を砂糖菓子を壊すように破壊すると銃を握るクリスの手首をつかみ捻り、そして、襟元をもう片一方の手でつかみ、背負い投げのようにして投げ飛ばす。
「なっ!?」
クリスは空中でやっと、自身が投げられたことを悟る。ここまで、

一瞬のことだった。
背中から落ち、息が一瞬つまり咳き込むクリス。
何とか起き上がるとすぐに銃口を向け放とうとする。
しかし、それを見たフィーネは笑いながら、廃ビルの窓を割って部屋を飛び出した。
「てめ――――」
「――――待て、クリス……」
俺は飛び出していきそうなクリスを手で制する。
「なんだよっ!? 何で止める!?」
「冷静になれ、そうでなければ簡単にあしらわれると思うぞ」
そう、何事も我武者羅に突っ込んでも勝てない。いや、まあ、ガチンコ勝負ならむしろそうするべきだが……
先程の背負い投げ……無茶苦茶綺麗だった。悔しいが、油断していたとはいえあのクリス相手に、だ。結構な力量があると見て間違いない。
そう考察していると俺のスマホが振動する。
ん? 電話だ……こんな時に……
「はい! こちら遊策!! 今、事件の犯人と交戦中です!! ご用件は!!」
そう応じながら、俺はクリスに目配せをして、ビルから飛び出し共にフィーネを追走する。
走って、フィーネを追いながら、電話からの声を聞く。
『何!? っく、こちらは飛行型のノイズが市街地で現れ、暴れているので向かってほしかったのだが……』
「わかりました!! そっちにクリスを向かわせます!!」
『そうか!! 捕らわれの姫を救出したか、よくやってくれた!!』
一瞬で状況を把握する風鳴司令。理解力すごいな……まあ、説明する手間が省けた。
「な!! あたしは、あの女に借りがある!! あたしがケリをつけなきゃ……」
クリスが抗議してくるが、俺は走りながらクリスにあるものを投げ

渡す。
「アイツの相手は俺がする……お前には、これを響に届けてやってほしい」
危なげにそれを受け取り、少し驚くクリス。
「これは……あいつのガングニール……」
ジッと、俺はクリスの目を見る。
最後には根負けした様に、ため息をつき言うクリス。
「わかったよ……届けりゃいいんだろ!!　でも、今更どの面下げてあえばいいんだよ……」
ガングニールを握りしめ、目を伏せる。
ここで俺が何を言っても無駄だと思う、でも一言だけ。
「あいつはきっと、お前を許してるぞ。……ああ、ついでにアイツガングニール持ったら無茶しそうだ。まだ病み上がりだから守ってやってくれ」
「わかった、んじゃ、お前も気をつけろよ……」
「まあ、頑張ってみるさ」
短く言って、クリスは俺のスマホを受け取り二課の指示を受けながら市街地の方に出ていく。
さて、スピードをあげますか!!
「ツッ……」
スピードを上げようと、力を込めた時、腹に鈍い痛みが走る。
無視して、スピードを上げフィーネを追いかけた。

クリスは遊策のスマホを耳に当てたまま疾走していた。
電話の相手、二課の風鳴司令に響の場所を叫ぶように効く。
「おっさん!!　響の奴はどこだ!!」
『もう、そっちに向かっている!!』
しばらく走っていると、司令の言葉通り、大きく手を振る響が見えてくる。
「クリスちゃん!!」

「見つけた……」
クリスはノイズ発生の場所を聞いた後、遊策のスマホを切り、響の前に降り立つとガングニールと遊策のスマホを渡し言う。
「あたしのしたことは消えない……ごめん。こんなことを言っても、許してもらえるとも思ってねぇし、許してもらおうと思ってない。あたしはそれだけの事を、しでかした……」
響に向かって、目を合わせる。響も、それに答え見つめ返す。
そして、クリスは決意を込めて言葉を出す。
「でも、今は!! あたしを信じて、あたしにお前を守らせてくれないか?」
「……大丈夫。クリスちゃんがしたことを、クリスちゃん自身は許せないかもしれない。でも、傷は消えるよ。痛みも消える。……だから、自分を許してあげて?」
そう言って、クリスに向かって手を差し出す響。
クリスは、それを取ろうか迷ったように手をさまよわせる。
「あ……」
クリスから声が漏れる。響がクリスの手を取ったためだ。ギュッと握りしめてきた手を、クリスは、今度は迷わず握り返す。
「行こう?」
「ああ、さっさと片付けて遊策の所に行くぞ!!」
クリスは言葉にうなずき言葉を返す、それを聞いた響は聖詠を口ずさみ始める。
「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ」
ギアを纏った響はクリスと頷き合うと、飛行型のノイズが待つ場所へと駆け出した。

フィーネは、目的の地に降り立つ。そう、このリディアン音楽院に……
この場所の地下には、カ・ディンギルと言う砲台があるためだ。

さっそく、フィーネはリディアンの生徒たちを間引き、カ・ディンギルを起動させるため行動に移そうとする。
「さて、ついたか……」
「待ちな、了子」
フィーネを呼び止める声が聞こえる。
「あら？」
振り返り、声の方向を向くと、そこには――――
「俺もお前を疑い、情報を集めていた……まあ、出遅れてしまったがこれ以上はやらせんぞ」
そこには、風鳴司令――――いや、この場ではただの一人の漢、風鳴弦十郎として、フィーネの前に立ちはだかっていた。
フィーネは、少し砕けた様子になり言う。
「弦十郎くん、見逃してくれないかしら？」
「こちらに投降するのなら」
無論、逃す気はないようだった。
フィーネはため息をつき、雰囲気を全く違うものに変え言い放つ。
「なら、見せてあげるわ……ネフシュタンの力をね」
何か緑色のクスリが入ったピストル型の注射器を自身の首にあて、一気に差し込み、クスリを注入する。
すると、みるみるうちにフィーネの体から鎧のようなモノが突き出て来て、数秒もしないうちに黄金の鎧に身を包んだフィーネの姿が現れた。
「それは……ネフシュタンの鎧!!　あの2年前のライブ会場で覚醒させようとして、失ったままになっていた完全聖遺物だとォ!?」
「そう、私が奪っていたのよ!!　さあ、この鎧の力!!　たっぷりと味わいなさい!!」
鎧に付いた二対の鞭のようなモノをしならせ、弦十郎に向かって放つ。
ただの人間にはこれで十分、そう思っていた。
しかし――――
「っふ!!」

鞭を掴み、鞭ごと繋がっているフィーネを引き寄せる。
「なっ!?」
とっさにフィーネはガードしたが、ガードなど関係ない。
拳が体にめり込んだ。
守りごと吹き飛ばされ、地面を転がる。
「ぐっ、は……?」
フィーネは自身がなぜ、地面に転がっているのかがわからないようだった。
軽く混乱しているフィーネをおいて、弦十郎は次の行動に映る。
「今のうちに生徒の避難を頼む」
「はっ、お任せを」
部下である緒川に生徒の避難を頼むと、自身はフィーネに向き直り宣言する。
「ここは俺を倒してから行ってもらおうか!!」
「ば、かな……出鱈目だ……」
フィーネもいつまでも寝ていられない、ゆっくりと立ち上がりつつ言う。
「映画見て飯食って寝る!! 男の鍛錬はそれで十分よォッ!!」
「くそ、お前!! 本当に人間か!!」
死闘が始まる。

俺はやっとフィーネがいる場所にたどり着いた。途中で見失い、かなり時間が経ってしまった。
「ここは、リディアン……? なんだか地形が変わっているようだけど……?」
そう言って、気づく。誰か、いや、自身の知っている人物が倒れ伏していることを。
「な……風鳴司令!! そんな、酷い怪我だ!!」
この人が怪我をするなんて……
最強は誰かと聞かれると、黄老師と並びたつような人なのに、一体

誰が……いや、一人しかいない……
「フィーネ、お前の仕業か!!」
「まあ、そうね」
そう言いつつ、フィーネが現れる。
「この人がお前如きにやられるはずがない!! どんな卑怯な手を使ったッ!?」
「あら、私が『やめて!!』と言ったら、攻撃を止めてくれただけよ?」
そうか、つまり……
「あんたは、この人のやさしさにつけ込んだのかッ!! いい加減にしろよテメぇ!! ヒトのやさしさを利用しまくって、誰かを犠牲にしまくって!!」
俺は激昂を押さえきれずにいた。気配を感じた。多分、緒川さんだろう。ちょうどいい……
「緒川さん、早く、司令を!!」
「……はい、ご武運を」
そう言って、風鳴司令を抱えて緒川さんはシェルターに戻っていった。
「怒髪天を突いたぜ!! 引導を渡してやる!!」
「やって見なさい!!」
両者は空中で激突した。

俺とフィーネはぶつかり合いながら、会話する。
「あんたを止める!!」
「もう遅いわ!! カ・ディンギルは起動する!! そして、私は月を破壊するのよ!!」
言われて、気付いた。この地鳴りの正体を。
そう、今地響きをあげながら、天を衝く砲台が姿を表そうとしていた。
俺は、フィーネの目的が理解できていなかった。
「なぜ月を……?」

疑問を口にすると、フィーネは律義に答えてくれる。
「ええ、月は人類から統一言語を奪い相互理解を妨げるバラルの呪詛の権化!! あれがあれば人類は相互理解をすることなどできやしない!! あれを破壊し、そして、私はあのお方の元に!!」
あのお方って誰だよ……
「そんなことのために!?」
「そんなこと!? 恋もしたことのないガキに、何がわかる!!」
確かに、俺は恋をしたことは無い。誰かを、狂おしい程愛しいと思ったことは無い……そういうことは、何もわからない。
でも、これだけは言える!!
「知らん!! でも、そのために誰かを犠牲にしていいわけねぇだろうが!! 誰かの幸せを奪っていい理由にはならないだろうがッ!!」
俺はいいながら、ジョブを放ち、フィーネが怯んだところに足、腕交互の連撃を加え、最後に大振りな一撃を加える。攻撃はクリティカルヒットし、鎧が破壊された。
「よし!! グガッ!?」
攻撃をヒットさせ、鎧を破壊したと思ったら、みるみるうちに鎧が治っていく。そして、攻撃を放ち油断したところに相手の鞭が叩きつけられてしまった。
「なっ、回復した!?」
ならば、回復するなら、回復を上回る速度で攻撃するだけだ!!
俺は立ち上がり、右ストレート、左ストレートと繰り出すがすべて避けられる。
フェイントを織り交ぜながら、攻撃するが全く当たらない……どうなっている!?
「もう、あなたの攻撃は届かないわ……」
「ぐ、あああああぁぁぁぁァァァァァァ!!!!!」
エネルギーボールのようなモノを叩きつけられ、俺は地面を転がる。
立ち上がろうとした時、急接近してきたフィーネに、胴体を足蹴にされて立ち上がれない。

「全く、滑稽なものね……こうも上手くいくと」
「どういうことだ……？」
「米軍に私の情報があった、ねぇ？　私がそんなミスをする訳ないじゃない」
「なっ、まさか!?　お前わざと米軍に情報を残したのか!?」
「そういう事、そして、クリスが裏切ることも想定内。だからこそ、フライトノイズ……飛行型のノイズを大量に配置したのよ」
「俺の行動を読んでいた……ってのかよ？」
　すべて、フィーネの掌の上だったてことかよ!!
「ええ、研究対象の行動の割り出しくらい出来るほど、データは揃ってるわ」
「なん……だと……？」
　そして、俺を地面に張り付けたまま続ける。
「貴方が、今、考えてること言ってあげましょうか？　脱出プランを３コほど考えてるわね。けど、全部押さえてあげるわ」
　嘘だろ……？
「嘘だろって顔ね、そして、自分にわざわざなんで教えているかを考えているわね。教えてあげるわ……これが、最後の目的よ!!」
　俺を足蹴にしたまま、何かピストル型の注射器のようなモノを取り出し、俺の首筋に当てる。
「さあ、ショータイムよ」
　ドスッと、俺の首元に注射器の針が打ちこまれ、何か訳の分からないクスリのようなモノが俺の全身に巡る。
「ぐっ、あ……お前一体、何を俺に打った!?」
「ふふふ、直にわかるわ……」
　ドクンッと、心臓が跳ねる。
　なんだ、熱い……
「が!!　あ、あああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁアアａａａａａａアアアアアアアアアアアアアアアアアアａａａａアアアアアアあああああああああぁぁぁぁぁギユぁぁぁアａａａａａａａａａａａａａａＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ

Ａ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」
ナニカ黒いものが俺の中に侵入してくる。
駄目だ、抗えない!!　自分が何を言っているのか、自分が叫んでいる事さえ分からない。
黒が俺の意識を押しつぶす。
「融合を加速させる融合促進剤。私とネフシュタンとの融合を早めるために開発したものだけど、融合症例に使った場合はどうなるのか……さあ、最終実験の始まりよぉ!!」
フィーネのあざ笑う声と、俺の絶叫がリディアンの空に響き渡った。

飛行型のノイズを殲滅した４人は、遊策とフィーネが闘っているはずのリディアンに向かっていた。
「はぁ、はぁ!!　早く急がないと!!　クリスちゃん!!　翼さん!!　奏さん!!　早く行かないと、お兄さんが!!」
そう言って、先頭をトップスピードで走るのは、響だ。その後ろを、翼、奏、少し遅れてクリスと追う。
「ああ、そうだな。しかし、立花!!　お前はあまり動きすぎるな！　負傷している事には変わりないんだぞ!!」
「大丈夫!!　へいき、へっちゃらです!!　そんな事よりも、一人で戦っているお兄さんを早く助けないとっ!!」
「しかし……」
「まあまあ、コイツは言って聞くような玉じゃないさ。今は一刻も早くリディアンに着くために速度を上げるだけだ」
言いよどむ翼だったが、奏がおさえ全体で加速する。
「……」
無言であとに続くクリスを気にした三人は、口々に励ますようにクリスに向かって声をかける。
「クリスちゃんも!!　もう、気にしなくていいから!!　みんなでお兄さん助けよう!!」

「そうだぞ、雪音!!　理由と謝罪は聞いた。ならば、何を気にする必要がある?」
「元々そんなに気にしてねーって言ってんだろ?　お前は両親を守ったんだ。胸を張れよ、誰にでも出来る事じゃないぞ?」
「お前ら……わりぃ、もう大丈夫だ。そうだな、遊策の奴にも謝らなきゃな……」
　クリスは三人からの激励に答え、たまっていた涙を払い顔を上げる。
　決戦の舞台はもうすぐそこだ。

「見えた!!」
　響の言ったように、見えたは見えたのだが……
「ん?　なんか、雰囲気おかしくねぇか?　リディアンに、こんなに瓦礫があったか?」
　クリスの疑問に答えるように、ナニカが咆える。
『BAOOOOooooooooooo!!!!　GURrrrrrrrUGAAaaaaaaaaa!!!!　GYAAAAaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa!!!!』
「な、なんだあれ?」
　突然、空から降って来た、獣のようにも、人のようにも見える、ナニカが尻尾で何かを引きずってくる。
　いや、よく見るとぐちゃぐちゃになっているが、人だ。つぶれた頭、引きちぎれた胴体、棒切れのような腕、そして片足しかない脚。しかし、不思議なことにその人は生きていた。
　ナニカはその死体とも見えるものを放り投げ、視界に響たちを収めると次の獲物を見つけたというように笑う。
「な、なんだよ……これ?　遊策は?　遊策はどこに行ったんだよ?　な、なぁ!!　先輩たち!!　響!!」
　クリスは混乱したようにそう言ったが、響は黙っていた。
　それが、何かを物語っているようで……

「……」
「ぐ、う……まさか……ここまでとは、な。ポテンシャルが高いと思っていたが……」
その死体ともとれるものが、そう声を上げる。
クリスはその声を嫌と言うほど知っていた。
「フィーネ……って、ことは……」
『ＧＵｕｕｕ、ＧＡＡＡＡａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａ!!!!!!』
「あれが、遊策ってことかよ!!」
「お兄さん!!」
響の叫びもむなしく、獣と化した遊策は装者たちに襲い掛かるのだった……

23話　エクスドライブ

時は少し巻き戻り、遊策が闘っている最中、リディアンでのことだ。
「緒川さん!!」
「未来さん。ここは危険です!!　早くシェルターに!!」
未来が走って来て、意識の無い風鳴司令に肩を貸す。
「手伝います。それにしても、酷い怪我……」
「助かります」
そうして、未来はシェルターに入り、一息つく。緒川さんは、風鳴司令の傷の手当てを始める。
処置が終わり、ベッドに風鳴司令を寝かせる。
「避難誘導をしていたんですが、一体、何があったんですか?」
「ええ、リディアンにここ最近の事件の犯人が襲撃をかけてきたんです。それを止めるために司令は戦っていたのですが、相手に油断をつかれ怪我を負い、逃げる生徒を庇ってここまで……」
「そう、ですか……なら、今敵は……?」
「遊策君が食い止めてくれています」
「お兄ちゃんが!?」
驚きの声を上げる未来。それを見た緒川さんは、未来の手を取り連れ出す。
「ついて来てください」
緒川さんが入った部屋は小さめの収容部屋だった。
そこには……
「緒川さん!!」
「未来!!」
「みんな!!」
二課のオペレーターである、藤尭朔也と友里あおいの二人。そして、未来の、響の友達でもある三人娘、板場弓美、安藤創世、寺島詩織と数人がそこに居た。
緒川さんは、オペレーターの二人に指示を出すと、未来を呼ぶ。
「ここからなら、外の様子を見ることが出来ます」

「モニター出します！」
オペレーターの藤尭はそう言ってモニターを出す。
映し出されたのは、戦う遊策の姿だった。
「お兄ちゃん!!」
「お兄ちゃんって、あの人ヒナのお兄さん？」
「な、何よこれ……アニメじゃないんだから」
そこでは、アクション映画顔負けの戦闘が繰り広げられていた。
フィーネにラッシュをかけ、防戦一方にする遊策。隙をついた遊策の回し蹴りでフィーネを吹き飛ばし、瓦礫に突っ込ませる。
「お兄さん押してるね」
「うん、でも、なんだか嫌な予感がするの……」
「あんなに押してるんだから、大丈夫よ!! やっちゃえ!! お兄さん!!」
なんだかわからないが、と調子よく言うが画面では、次の展開に移っていた。
「え？ 攻撃が……」
「当たらなくなった……？」
画面では、遊策の攻撃が当たらなくなり、反撃を受け、組倒されてしまった。そして、何かを首に当てられ注入される遊策が映されていた。
「なに、あれ……」
そして、絶叫を上げながら体から黒い瘴気を放出し、変貌していく遊策が映る。
「お、お兄ちゃん!! っ放して!!」
「どこに行くの!? 今行ったら危ないよ!!」
走り出そうとする未来を安藤創世が止める。
完全に変貌を遂げた遊策はフィーネに狙いを定め……
「動きます!!」
消えた。いや、違う。常人には消えたと思うくらいの速度で接近しただけだ。
大きく腕を振るう遊策。その遊策の一撃がフィーネを地面に叩き

つけ、大地を揺るがし、ズンッという衝撃が地下のシェルターであるここにまで響いてくる。
「あっ、お兄ちゃんが……」
「ッヒ……」
一方的だった、変貌した遊策は一切の遠慮も躊躇も無くフィーネの足を引きちぎり、わき腹を噛み千切った。
一瞬で何とか回復するが、その獣じみた爪で上半身を切り裂き潰す。
そこから、一方的な虐殺でしかなかった。
回復する端から、壊し、潰し、切り裂き、血が舞う。ぐちゃぐちゃと、こねるように血まみれの肉と肉をかき混ぜた。
そして、全身血だらけの獣は楽しそうに、愉快そうに、口を大きく釣り上げる。あごの関節を無視した様に口は引き裂かれ、その牙と肉が見えた。
獣は、大きく開いた口でかき混ぜた肉を捕食する――――
そう、肉を、骨を、命を全て喰らう――――
もうすでにフィーネは動いていなかった。
死んだようではなかったが、強大な力の前ではすべてが無力と悟り、そのままなされるがままになっていた。
「う……」
その殺戮とも捕食とも取れる異様な光景に、胃の中の者が込み上げてくる板場弓美。その場にいるものはもう何も言えなかった。
「誰か……誰か……お兄ちゃんを助けて……」
未来は自身の兄が変貌し、獣となったことに涙し、助けを求める。
――――祈りの声は届いた。
画面の中では、響たち二課の装者が現場に到着したのだった。

そして、現在――――
装者達４人の前に現れた、獣と化した遊策はケタケタと笑い声をあげる。
「お兄さん!!　聞こえますか!?　お兄さん!!　私ですよ、響です!!」

「……無駄だ、とりあえず……来るぞ!!」
響の説得虚しく、獣のように咆哮をあげながら、装者達に襲い掛かる遊策。
「チクショウ!!　一体なにしたら、あーなるんだよ!!」
装者達は散開、攻撃を避けながら悪態をつくクリス。
『ＧＹＵＨＡＡＡＡＡａａａａ!!ａａａａａａａａａａ!!!!　ＡＯＯＯＯＯＯＯｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ!!!!』
遊策は咆哮しながら、地面を蹴り翼に狙いを定め、飛ぶ。
「くっ、なんというスピード!!」
「いや、パワーもしゃれにならないぞ、これは!!」
翼は避けるが、その遊策の速度にギリギリの所だった。先ほどまで翼のいた場所には大きなクレーターが出来ていた。
「くっそ!!　どうすりゃいいんだ!!」
「止むを得まい!!　攻撃だ!!」
「ショックを与えて元に戻ることを祈るしかない、ってことかよ!!」
その間にも、戦況は目まぐるしく変わっていく。
獲物を奏に変え、襲おうとする遊策。奏は自身の槍で遊策の両手をガードし、つばぜり合いのような体制になる。
「ぐぐぐ、攻撃加えるなら今、だぞ……」
「無茶しすぎだ!!　奏先輩!!」
クリスはガトリングガンにギアを変え、弾丸をばらまく。
全て、遊策に当たり血が舞った。
「っつ!!」
クリスは一瞬、舞った血に嫌な顔をする。しかし、遊策は血を流しながら、ニタニタと笑い、意に介した様子はない。
奏は、バックステップでクリスの横に着地する。
「ッチ、これ本当にダメージで元に戻るのかよ!!」
「……戻ることを信じて、攻撃し続けるくらいしか方法あるか?」
そうやって、クリスと奏が相手をけん制しつつ話すが、遊策は次の獲物を見つけ行動に移す。
次の獲物――――そう、今まで何も出きずただ呆けているだけだっ

た響に、だ。

『GYUUUUUUUUUUU、RAAaaaaaaaaaaaaaaaaa!!!!!!!!』

「立花ぁ!!」

「えっ！」

翼が、声を上げるが遅い、鮮血が空に舞う。

「っく……」

「く、クリスちゃん!!　どうして……」

それは、響を庇ったクリスの肩から流れた血だった。

更に襲い掛かろうとした遊策だったが、左右から翼と奏二人の攻撃が迫る。遊策は大きく後ろにジャンプし、その攻撃から自身を逃がす。

着地した遊策は、自身の爪についたクリスの血を舐め、愉快そうに笑う。

「っは、あいつにお前を守れって言われてるんだ。それに、こんな怪我大したことねーよ」

クリスは、響にそう笑って銃をいつものボウガンモードにする。

「でも……ごめん、ううん、ありがとうもう大丈夫だから！」

「おう、それでいい!!　いくぞ、バカ響!!」

「うん!!」

クリスと響は、遊策に向けて同時に駆けだす。

「がはッ!!」

それと同時に、遊策と戦っていた翼が攻撃によりがら空きの背中を殴られ、吹き飛ばされる。そして、奏に向かおうとした遊策だったが、翼と入れ替わるように、現れた響とクリスにより阻まれる。

それを見た、翼は考える。

「(私も雪音も攻撃の威力に反して怪我は軽い……？　どういうことなんだ？　いや、そういうことか!!)」

翼は、結論づけると、響とクリスに向かって叫ぶ。

「立花!!　雪音!!　遊策に呼びかけろ!!　遊策は抗っている!!　私たちに大した怪我が無いのが何よりの証拠だ!!」

「っはい（ああ）!!」

攻撃を加えながら、響とクリスは呼びかける。

「遊策お兄さん!!　帰って来て!!」

「遊策!!　聞こえてんだろ!!　いつまでそのままでいるつもりだ!!」

『GAYUUU!?　GYUUuuuuuuウウウウウウウウウ!?!?!?』

攻撃を受け、なぜこうも自分に効いているのか分からないような咆哮を遊策はあげる。

それを見た翼は確信を絶対に変える。

「効いている!!　やっぱり、完全に飲み込まれたわけじゃない!!」

「なるほど、目に見えて効いている感じがしてるな!!」

翼と奏は、このままいけば必ず遊策を元に戻せると確信していた。

……全く、うざい。

そう、遊策、いや、遊策の中のナニカはそう考えていた。

特にうざったらしいのは、あの赤い奴と黄色い奴だ。アイツらの声が俺を迷わせる。

青い奴と朱色の奴、あいつらも度し難い。相手をすると手元が狂う。

あの四人さえいなければ、もっと自由に暴れられるのに!!　もっと自由に殺せるのに!!

……そうだ、自分は何をやっていたんだ。

――――駄目だ!!

……殺せばいいいじゃないか。

――――やめろ!!

ナニカは、内から響く声を無視し四人を殺すことに決めた。

「お兄ちゃん……どうにかして、響たちに声を届かせられないかな?」

どうやら、兄は呼びかけられるたび自身を取り戻していっているような雰囲気がする。

今も、響に名前を呼ばれ、頭を押さえながら暴れるだけだ。咆哮も、獣のような聞き取れないものではなく、ただ叫ぶようなモノに変わっ

ている。
「声を届かせる……それなら何とかなるかもしれません」
緒川さんは、そう言いオペレーターの藤尭さんに聞く。
「確か、リディアンのスピーカーにここからアクセスすることが出来ましたよね？」
「ええ、ですが、今は電気も止まっている状態で……」
「その電気さえ確保できれば……」
そういって、少し考え込む緒川さん。
数秒して、オペレーターのあおいさんが何か思いついたように声を上げる。
「予備電源!!　確か、予備の電源施設が地下にありましたよね？　それを起動できれば……」
「しかし、アレはスイッチが扉の奥にあります。どなたかが、通路を通って行ってもらうしか……」
「あたしがいきます!!」
そう言って名乗り出る人がいた。
……私の友人、板場　弓美だった。
「こういう時、アニメなら小柄な人が活躍すると思うから……響が頑張ってるのに、友人の私が何もしないっていうのはいや。だから、何かしたいの!!」
そう言うと、他の二人も声を上げる。
「そうだよね!!　ビッキーもキネクリ先輩も頑張ってるのに、私たちが何もしないっていうのはいやだ!!」
「ええ、ナイスです、板場さん。私も微力ながらお手伝いしますわ!!」
三人の視線が緒川さんに行く。緒川さんは少し悩むそぶりをしたが過ぐに返事をする。
「わかりました。ついて来てください!!　未来さんは、残って電源が回復したら、言葉を届けてあげてください!!」
「わかりました!!　みんな、お願い!!」
「「任せて!!」」
そうして、四人は部屋を出ていった。

それを見送ると、私はモニターに視線を戻し、祈るように両手を胸の前で組んだ。

激戦は続く。

名前を呼びながら、攻撃を繰り返し、遊策は翻弄され切っていた。

それぞれ、動き攻撃を加えていく装者達。

行ける――――

装者達の心はそう確信していた。

それ程遊策の消耗は激しい。

遊策は、バランスを崩した。

そして、それを勝機と取った装者達は、遊策を正気に戻すため、最後の一撃として一斉に飛びかかり、遊策を攻撃する。

『グルル……ヴォォォオオオオオおおおおおおおおおぉ!!!!』

しかし、相手は狂っても、強大だった。大きく咆哮し、全員の攻撃をはじく遊策。余波で装者達全員を弾き飛ばす。

「ぐっ」

「どわっ！」

「ああ!!」

「うあ、きゃっ!!」

全員が別々の方向に弾き飛ばされ地面を転がるが、翼、奏、クリスはすぐさま立ち上がり武器を構えた。

しかし――――

「響!!　あぶねぇ!!」

「う、っく……」

響だけ、足をくじき反応が遅れた。

奏が叫ぶが、すでに、遊策は響を殺すことのできる位置にまで来ていた。

遊策は槍のように腕を変形させ、響の首を狙う。

『死……ネ……』

「あ――――」

響は死を覚悟した。

お兄ちゃんが、響に襲い掛かる映像が見えた。
思わず、私は叫んでしまう。
「お兄ちゃん!!　駄目ぇぇぇぇぇ!!!」
その瞬間、パッと施設の電気が一斉についた。
『お兄ちゃん!!　駄目ぇぇぇぇぇ!!!』
何処からか聞こえてきた未来の声に、ピタッと、攻撃の手が止まる。
どうやら、リディアンのスピーカーから声を発しているようだ。

藤堂さんは汗をぬぐう。
「ギリギリ、電源回復!!　スピーカーへ、アクセス完了しました!!」
奇跡ともいう、一瞬だった。

そして、奇跡は続く……一瞬、ほんの一瞬だがその声で遊策は理性を取り戻したのだ。
「ひ、び、き……は、らだ……腹の傷を狙え!!　俺が、俺である内に、早く!!」
迷いは一瞬、だが、このままではどうにもならない。
響は覚悟を決め、拳を握り、叫ぶ。
「お兄さん!!　戻って……来て!!　はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
一発必中、硬く握った拳は遊策のがら空きの腹部の傷へと吸い込まれるように入った。
ドンッと、衝撃が遊策の腹から背を駆け抜けていく。
遊策は、その場で膝を折り、異様な獣のような姿が空気にとけて、元の姿に戻る。しかし、全身の力が抜けたようにその場に倒れ伏してしまった。

「お兄さん!!」
そう言って、遊策を抱きかかえる響。
他の装者も集まってくる。

そして、それを一人の女は待っていた。
「ふふふ、ふはははあっはははははは!!!

「……大丈夫だ、ちゃんと謝りに帰ってくるさ。お前はフィーネを頼む」
「お兄さん!!」
走り出した遊策を止めようとした、しかし……
「行かせてやれ……」
その手をクリスが止める。
「クリスちゃん……どうして」
「アイツは止まらない、いや、止められない……」
確信をもって、そうクリスは言う。
自分を撃たせてまで、目的を完遂させようとする奴だということを、クリスは痛いほど知っている。
だからこそ、カ・ディンギルを止めると言う目的に向かって疾走する遊策を止められないということがわかっていた。
「それでも!! それでも、私は……っ!!」
それでも、遊策がこれ以上傷つくことを望まない響は必死に、走り去っていく遊策に追いすがろうとする。
「大丈夫さ」
そっと、優しく後ろから抱きしめ、優しく言う声があった。
「かなで……さん……」
声の主は、そう奏だ。
奏はギュッと響を抱きしめると、言葉を続ける。
「あたしの時もそうだったろ? あいつは生きることを絶対に諦めない……帰ってくるさ」
そう言って、ニッと笑う。
その奏を見て、響は貯まっていた涙を流す。
遊策を失うかもしれないという現実が、響の心を無残に切り裂いていく。
「お兄さんが、お兄さんが居なくなる……そう考えるだけで私は……駄目なんです……お兄さんがいないと、私はダメなんです……う、うあ、うううう……」
涙を流しながら、自分の心象を語る響に、そっと子供をあやすよう

に頭を撫でながら奏は優しく言う。
「そうか、なら……ちゃんと祈っとかないとな？」
泣く響をゆっくりと、抱きしめるのであった。

俺は走る。血が足りず、ふらついてしまう。腹の傷、体中の銃傷からいまだに血がこぼれている。
が、その俺の前に、フィーネが立ちはだかる。
どうやら、言っても素直に通してもらえそうにはない……なら、押し通る!!
「黙って私がいかせると思うか!!」
「邪魔だ!! どけ!!」
俺は、そう言って、更に速度を上げる。
「我武者羅に速度を上げるだけ!! そんなもので突破できると思うなよ!!」
鞭が、俺に向かって振るわれる。俺は迎撃しようとするが、足がふらつき隙を見せてしまう。
ニヤリとフィーネが笑ったのが見えた……
が――――
「そうだ、邪魔だ。押し通らせてもらおう!!」
翼が割って入った。振るわれた鞭を剣で弾く。
ふらついた俺をグイッと手で引き上げ、前に押し出しつつ言う。
「行け、遊策!! あれを止めて来い!!」
「ああ、言われなくても!!」
飛び出した俺はグッと脚を折り曲げると、地面を思いっきり蹴り上空に飛ぶ。
後ろでは、翼がフィーネの鞭を剣で抑えこみ、フィーネを引き付けていた。
カ・ディンギルの側面を蹴り上げ、さらに上に上がる俺。みるみるうちに、地面が遠ざかっていく。
そして、着いた。
俺は、エネルギー光がほとばしるカ・ディンギルの砲口に身を躍ら

せる。
「ここからどうする?!」
エネルギーは発射寸前。
――――どうする!?
次の瞬間、光が俺を包み込み、カ・ディンギルは発射された――――

光に包み込まれながら俺は、これまであったことを次々と思い出していく。
これが走馬灯って奴なのだろうか?
その中で、一番古い記憶、生前の記憶だ。
今の今まで、思い出しもしなかった記憶が俺の頭の中にリフレインする。
その記憶は5歳。その時の俺は、テレビで特撮モノを見ていたんだ。
何もストーリーや戦うことの怖さ、戦う者の決意なんざ、分からずに。
それで、見終わって興奮冷めぬまま、父さんに自分の夢を語ったっけ……
『父さん!! 俺、ヒーローになりたい!! 誰かを助けれるヒーローに!!』
変〜身、と俺はポーズを取った。
それを見て父さんは、クスリと笑ってこう言ったっけ……
『そうか、遊策はきっとなれるさ……だって、俺の宝物だからな』
そうか……、これが俺の原点……
「そうだ……俺の夢……思い出した……」
確認するように俺は自身の夢を言う。
「誰かを助けるヒーローに……ずっとそうだったんじゃないか、ヒーローに憧れていたんだ……」
自分の憧れを、夢を、思い出し、次に俺が守りたい人々が俺の脳内にあふれかえる。

「だったら、守らないと!!　誰かを、家族を、仲間を、大切な人を!!」
その時、俺のギアが形を変えた。
ガントレットが大きく変わり、大きな爪を持つ龍（ドラゴン）のようなモノへと変わる。
俺は、砲台から発射されたエネルギーを、その手で押しとどめる。
奇しくもそれは、原作で響がやっていたエネルギーを繋ぎ束ねることと似ていた。
そして、そのまま俺は力任せにエネルギーを押し返し始めた。
「見とけ!!　俺の生き様ぁぁぁぁぁ!!」
俺の腰のギアがはじけ飛び、ブースターとして再変換される。
グンと、俺がエネルギーを押し込む速度が倍加した。
ドンドンエネルギーを押し込めていき、カディンギルの中央部までエネルギーを押し戻し――――
「響……やったぜ……」
押し込められた巨大なエネルギーが砲台内で暴れまわり、カ・ディンギル中央で俺の言葉ごと全てをかき消し、大爆発を起こしたのであった。

「あ、ああ、ぁぁぁ……お、にい、さん?」
響は、ストンと膝をつき爆発したカ・ディンギルを見上げる。爆発に紛れて何かが、響の元に落ちてくるモノがあった。
それは、遊策の使っていた半壊した腕のガントレットだった。
震える手で、響はそれを拾い上げ、抱きしめる。
「大丈夫じゃなかったんですか……帰ってくるって言ったじゃないですか……」
響はそのガントレットが意味することが解り、大粒の涙を流しながら叫んだ。
「ああ……いやあああああ!!!!」
響の鳴き声がその場を支配した。
他の装者たちも涙を流しながら、そんな彼女を見て痛ましい表情をする。

「響……」
奏の悲しそうな声が、ポツリと響の名前を呼ぶ。

――ガシャリと音がした。
そこには、響と同じように膝をついた状態のフィーネがいた。
「……終わってしまった……私の計画が……もはや、次にかけるしかない……しかし――――」
そう呟いたフィーネは立ち上がり、怒りをあらわにする。
「虫の居所が、収まらぬ!! 全員、生きて帰れると思うな!!」
クリスと翼と奏は涙を流しつつも、フィーネを見据え、剣を、銃を、槍を構えて宣言する。
「うるせぇ!! 負けるかよ!!」
「散った遊策のためにも、ここでお前の野望は終わらせる!!」
「お前は!! お前だけは!! 絶対に許さない!!」
放心状態の響をおいて、戦闘が……始まる。

「っぐぅ……」
「っく……」
「かっは……」
フィーネの強さは圧倒的だった。
クリス、翼、奏の三人を相手にしてなお、圧倒していた。
「つまらん……こんなものたちに私の計画は、邪魔されたのか!!」
虚し気にそう言って、次に放心状態の響を見る。
近づき、髪を持って響の顔を見る。
「あ……あ……」
「ふん、抗う気力も無いか……」
響を放り、蹴り上げ、地面に転がす。
「あうっ……」
その瞬間に、響の手から遊策のガントレットが零れ落ちてしまう。
響は、急いでそれを拾い上げようとするが、それをフィーネに阻まれる。

「あっ……」
そのガントレットをフィーネは忌まわしそうに見ると、足で踏みつける。
「あの男がいたからだ!!　なんなのだ!!　あの男は!!」
そう言って、何度も踏みつけるフィーネ。次第に、ガントレットは歪んでいき、ひび割れ始める。
響はやめさせようとするが、殴り蹴られ、ガントレットに近づくことすらできない。
「やめて……やめてえええええええ!!!!」
響の悲鳴にも似た静止の声も、フィーネには届かない。
そして、とうとうガントレットは、バキンッと音を立てて壊れ去ってしまった。
空気に融けていくガントレット……
それを響は何もできずに見ている事しか出来なかった。
体中の力が抜ける。最後に残っていた物すら無残に壊され、かろうじて残っていた立ち向かう気力も無くなった響はその場で倒れこんでしまう。
「あ……」
ガントレットの最後の残骸が融けたのを見たフィーネは、吐き捨てるように言う。
「……あっけない。全く……下らない男だったな」
「あ、う、うぁ、うぁぁぁぁぁぁぁ……うう、うあぁぁぁぁぁぁ!!!」
涙を流す、どれだけ立ち上がり言葉を訂正させたくても、無気力感で体が動かない。
ただただ、涙を泣かすしかなかった。

しかし、このままでは終われないものが、一人いた。
『響!!　立って!!　まだ、終わってない!!』
「あ……、未来の声……」
リディアンのスピーカーから、未来の声が聞こえ、言う。
『お願い、響。お兄ちゃんの代わりにお兄ちゃんが、出来なかったこと

をやってあげて!!』
そして、未来は、歌いだす。他にも響やクリス、奏、翼を応援する人たちの声が未来の歌声に重なっていく。
「あたしたちは……まだ、諦めてねぇぞ!! あいつとの約束がある!!」
「そうだ、遊策が残してくれた希望!!」
「決して!! 途切れさせやしない!!」
その歌が仲間たちを立ち上がらせる。次々と立ち上がっていく声がする。
そんな中、未来は響に向けて、更に叫ぶ。
『お兄ちゃんの残した希望を!! 約束を!! 守って、響いいいい

だった。
「私は……了子さん!!　貴女を止めます!!　お兄さんとの約束にかけて!!」
響は、限定解除されたギアを持ってそうフィーネに宣言した。

２４話　我ら思う、故に我ら在り

俺は闇の中にいた。
……なんだここ、安らぐ。このまま、眠ってしまおうか……
そう思い、ゆっくりと意識を闇の中にとかしていく。
しかし――――
『～♪』
俺の耳に歌が聞こえてくる。……これは、未来の歌声だ。
うっすらと目を開けると、黄金の光が目に入ってきて、俺の意識を完全に覚醒させる。
「う、ん……？　あれ、ここ何処だ？」
俺は周りを見渡し、一層黄金の輝きが強い場所を俺は見つける。
そこには……
「デュランダル……」
黄金に光り輝くデュランダルがその場には鎮座していた。
そうか、先程の黄金の光は、デュランダルの輝きか……
そう思い、なんとなく、デュランダルに触れた。
すると、気づくことが一つあった
鼓動している……何かに反応している？　いや、これは何かが呼んでいるような……
俺はジッと、デュランダルに集中する。
――――お前たちは何を束ねた!!
――――歌と……絆だ!!
いきなり、視界が開け何かが見えた。
黒色の混じった赤い竜となったフィーネと、大きな翼をはためかせた響たち……
これは一体……？
――――さあ、覚悟しろよ!!　死んじまった奴のためにもお前はここで倒す!!
――――ああ!!　エクスドライブモード……推して参る!!
クリスと翼がフィーネに向かって飛び立つ様が見えた。

なんだ？　このヴィジョンは？
「お前が見せているのか……デュランダル」
そう問いかけるが、返事なんざあるわけも無く、ただ煌々とデュランダルは光っているだけだった。
しかし、何かを俺は感じ取ることが出来た。
「行けって言ってるのか？」
答えるように、光が一層輝いた気がした。
「そっか……なら、行こう!!」
白い翼が広がった。
後には、白い粒子が羽のように舞っているのみだった。

幾重にも施されたシンフォギアのセーフティ、それらを全て解除した限定解除状態――――エクスドライブモードを発現させた装者達は、今逆境に立たされていた。
「っく!!　なんという執念だ……」
翼がそう呟く。

そう、装者達がエクスドライブモードを発現させ、押していたのは確かだった。今の今までは。
しかし、フィーネもそれでただ倒されるだけの器ではない。
フィーネは大量のノイズを召喚し、体にノイズを吸収しだした。
そして、巨大なノイズの塊――――黙示録の赤き竜と化したフィーネは、ソロモンの杖で3体のカルマノイズを召喚、ソロモンの杖と共に赤き竜と化した自身に取り込んだのだ。
赤き竜と化したフィーネの体に罪を表す黒の刻印が刻み付けられる。
「力が有り余るッ!!　この姿を、これまでと同じと思うなよ？」
大いなる力の暴力に圧倒される響たちだった。

「マジかよ……あいつはどこまで、あたしたちの予想を超えてくんだよッ!!」
クリスは、ダイヤモンドでも砕けそうなほど奥歯を噛みしめ言う。
「ハハハハ、軽い軽すぎるぞ!! 攻撃も、信念も!!」
笑いながら、攻撃を加え、装者４人を蹂躙するフィーネ。
「さあ、幕引きと行こう!! いでよ、デュランダル!!」
フィーネは装者達を更なる絶望へ誘うため、自らの奥の手を呼び出す。
何かが、地底の底から高速で飛び出して、大空に飛び立つ。
「アレは……!?」
「白い、流星？」
それは、大空に一筋の流れ星のように光の軌跡を描きながら、フィーネに急接近するのであった。

「デュランダルだけでは……ない!?」
フィーネの素っ頓狂な声を聴く。
俺はエクスドライブによって追加された白い翼をはためかせ、驚愕に顔を歪めるフィーネの前にまで一気に踊りでる。
「よう!!」
軽く手をあげ、挨拶する。もちろん、フィーネに。
「なっ、あなた死んだはずじゃ!!」
おお、驚いてる驚いてる。でも、なぁ……。
「調べてたならわかるはずだろ？ 俺はしぶとい、って、なぁ……？」
俺はデュランダルを振りかぶり、そして――――
「さぁて、お望みの斬撃（もの）のお届け物だぜぇ!!」
そう言って、気合一閃。巨大なノイズと化したフィーネの一部を切り裂いたのだった。

フィーネの一部を切り裂いた俺は、すぐさま離脱し、後ろに飛ぶ。
「お兄さん!!」
響がそう言って、俺に突撃してきた。

俺は危なげなくキャッチし、抱きとめる。
「「遊策!!」」
響に続き、三人が俺の元に集まってくる。
集まってくるなり、口々に好きかって言う三人。
「お前死んだんじゃなかったのかよ!!」
「まさか幽霊か!?」
「待て待て、足があるぞ翼!!」
「ならば偽物……まさか、ドッペルゲンガーかッ!?」
「いや、クローンって線もあるぞ、先輩たち!!」
「いやいやいや、お前ら真っ先に言うことがそれかっ!?」
完全に死んだことにされていた。
「いやでも、傷も無くなってるし……」
「そこは俺にもわからないが、多分このモードのおかげじゃないか?」
俺にもわからないことはあるが、とにかく俺は生きているということは確かであることはクリス達に言っておく。
そうして、今ここが戦場であることを忘れるような陽気な声が響く。
「おのれ、おのれぇぇぇぇぇぇ!!!!!!　私の計画をことごとくッ!!　邪魔をオオオオオ!!!」
怒声が聞こえた。
そう言って、恥も外聞もかなぐり捨てたフィーネは全身全霊を持って俺達を排除しようとする。
「やれやれ、感動の再会くらいさせて欲しいものだねぇ、全く最近の若いもんは……」
「いやいや、相手は先文明の巫女……つまり、ババアだぞ?」
「空気読めないババアは嫌われるぞ?　あ、もう嫌われてたか」
「「ハハハ」」
ビームが撃ち込まれた。
挑発によって、怒りに身を任せたままの攻撃だったので、軽く避ける。
ビームを避けた、俺は全員の顔を見て言う。

「ふう……みんな!!　力を貸してくれねーか？」
「もちろんっ!!」
「当たり前だ!!」
「いいぜ、全部もってけ!!」
「こ、今回だけだからなっ!!」
許可をもらった俺は、迫りくるビームをデュランダルで切り払い、指示する。
「んじゃ、俺の背中に手を乗せてギアのエネルギーをデュランダルに分けてくれ!!」
俺の言葉にうなずいた４人は、すぐに行動を開始した。
響とクリスが俺の背に手を乗せる。そして、響の後ろに奏、クリスの後ろに翼と背に手を置き、俺を中心に左右二人ずつ並び、エネルギーの受け渡しを開始。
俺は、しっかりと４人から送られてくる力を感じ、デュランダルに巡らせる。ビームはデュランダルに集まるエネルギーがすべてかき消してくれた。
「さて……」
そう言って、眼を閉じ、デュランダルを上段に構える。
「行くぞ、フィーネぇぇぇぇ!!!!　真名、解放……ッ!!」
５人分の高密度のエネルギーが、デュランダルに集まり黄金の光として刀身を覆っていく。
デュランダルの刀身が割れるように変形、そこから黄金の光を吸収し、極大な刀身として姿を変えていく。
俺は、大きく息を吸い、叫ぶ。
「不滅不朽（デュラン）の――――」
それと同時に、極限にまで大きくなったデュランダルを――――振り下した。
「――――永遠（ダル）の剣ッ!!!!!」
光が一直線にフィーネに向かって放たれる。
フィーネも、死力を振り絞り大量のノイズの塊を放つ。
大きな力の衝突。しかし、拮抗は一瞬。

俺達のデュランダルの光は、ノイズ、その先にいるフィーネを飲み込みネフシュタンの鎧と接触、そして――――

太陽光の如き光が辺り一面に広がった。

光が弾ける前、何かが二つ輝いた気がしたが、すぐに光が俺達を包み込む。

眼を開けると、そこは赤き竜の衣が剥がされ息も絶え絶えなフィーネが居た。しかし、その目には闘志の炎は燃え盛っている。

「まだ、まだ終わらない!!」

そう言って立ち上がったフィーネに、俺はデュランダルを構えようとするが、俺の手から、デュランダルは消え去っていた。

つまり、ネフシュタンの鎧とぶつかり合い対消滅したということだろう。

見た所、フィーネもネフシュタンの鎧を纏っていない。

「もうよせ、ネフシュタンの鎧も無いあんたになにが――――」

言って、何か嫌な予感がすることに気づいた。

ニヤリと、フィーネの頬に笑みが浮かぶ。そして、指は空に浮かぶ月をとらえていた。

「っつ――――間に合えぇぇぇぇぇ!!!!!」

俺は本能のままエクスドライブの速度で、フィーネの腕を掴み――――

その瞬間、極太のビームが指から発射された。

発射されたビームは俺が腕の方向を強制的に変えたおかげで、月を破壊するには至らなかったが、一部を壊し、衝撃で月から離れ、重力でこちらに向かって落ちてくる。

「ふ、ふはははは!!! 私の勝ちだ!!! 今は月を完全には破壊出来ないが、一部は破壊出来た!!! そして、破壊された月の一部はここリディアン周辺に降り注ぐ!!! 私はここで終わるが、お前たちも終わる!!! 私は、永遠の刹那に存在し続ける巫女、フィーネ……私は不滅だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」

そう宣言したフィーネに向かって、響が踏み込んだ。

コンッと言う音が響いた。

響は軽くフィーネに拳を当てただけだった。

「終わらせません……世界も、みんなの命も」

「……なぜ殴らない？」

「確かに、私は了子さん、あなたを恨んでます。でも、やっぱり、憎めません……だって、私に誰かを愛して、繋がろうとする方法を教えてくれたのはあなたです。私が悩んでいる時に励ましてくれたのはあなたです。私が落ち込んでいた時に、慰めてくれたのはあなたです。そして、手をつなぐ方法を教えてくれたのは――――あなたです。だから、私はあなたを憎めません!!　了子さんとも、繋がりたいからっ!!　私はあなたを殴りません!!」

響はそう自分の心のままに叫んだ。

フィーネは、その言葉に面食らったような表情になった。

「……君の負けだな。了子君」

逞しい声が、聞こえた。

「し、師匠!!」

響がその人を呼ぶ。

そう、現れたのは、響の師匠こと風鳴弦十郎その人だ。

あちこちに包帯を巻いているがその足取りはしっかりしている。

「響!!　お兄ちゃん!!」

「未来!!」

その後ろから、未来も現れる。

その後も続々と、二課のメンバー達や響の友達などが現れる。

「どうしたんです？　みんなして？」

「お前たちの応援に来たんだが、少し遅かったようだ」

確かに、遅かったかも知れない……でも――――

「ナイスタイミングですよ、風鳴司令……別れを言うなら、今です」

「そうか……」

ゆっくりと近づく司令。
俺と響は、二人の話を聞かない様に下がる。ここからは、大人の話だ。

話し終わったフィーネは、少しすっきりしたような表情をしていた。
「全く、放っておけない子達なんだから……」
そう言って、憑き物が落ちたかのような表情で真っ直ぐに響を見る。
「響ちゃん、命短し　恋せよ　乙女、よ」
「……っはい！」
次に、クリスに向かって言う。
「クリス……悪かったわね……お詫びとは言えないけど、一つあなたに託すわ。それをどう使うかは自由よ」
「……」
「私の研究室のＲＸ―７８番を見てみなさい、合言葉は『フィーネ』よ」
「わかった」
短くクリスはそう言うと、そっぽを向く。
それを見てクスクスと笑いながら、翼と奏に言う。
「貴女達にも謝っておかないと、今までだましていてごめんなさいね。貴女達なら、海外でも通用するアーティストになれるわ。頑張ってね」
「……ええ、もちろんそのつもりです」
「……おう」
そして、視線が俺に向いた。
俺は気になっていたことを単刀直入に聞く。
「なあ、なんで俺にアドバイスをしてくれたんだ？」
「……それは……」
「？」
言葉に詰まるフィーネ。言おうか言わまいかか迷った後、ため息をつく。

「ふう、本当にしょうがないわね……私の初恋の人にあなたが似ていたからよ」
「え？」
　言葉を続けるフィーネ。
「私が、言うあの人にあなたが似ていたからよ」
　なるほど、そうならば納得がいく。俺は自身の推論を述べる。
「あんたがどれだけ怒っても、殺気を感じなかった理由はそれか……あんた、俺だけじゃなく他の奴らも殺す気はなかったろ？」
「……それはどうかしらね」
「俺を殺せるスキなんざいくらでもあった。それに、他の奴らに対しても微妙に爪が甘かったろ？　それが証拠だ」
　フィーネは軽くほほ笑み、否定も肯定もしなかった。
　俺の話はまだ終わっていない。
「なあ、今度は犠牲の出ない方法でやって見たらどうだ？　あんたの目的」
「え？」
　そう言った後、人差し指で鼻をこすりつつ言う。
「あんたならできるだろう？　だって、あんたは天才の櫻井了子なんだから……。そしたらさ、今度は俺もあんたの味方してやれると思うからさ!!」
「っふ、馬鹿ね……でも、嫌いじゃないわ……」
　そう言って、フィーネの体は限界を迎え、朽ちて風にとけていった。……多分、最後の技だ……あれは周りのエネルギーを集め、自身を使い捨ての砲台として、機能させることで放つ技だったのだろう。それを放ち終わった今、体が自壊していき、今この時を持って完全に限界を迎えたのであろう。
　俺はそれをジッと見届けた後、視線を月に向け言う。
「さてと、あのままじゃヤバそうだ。サクッと行って壊して来ますかね……」
「お兄さん!!　私も、行きます!!」
　そう言って、響が俺の横に並び立つ。

けれど、俺はそれを断る。
「一人で大丈夫だ。それにお前、怪我が治ってないだろ？　いや、むしろ悪化してるはずだ」
俺は響の横腹を指さす。指さしたところには、赤い血だまりが出来ていた。
……傷口が開いていると見える。
「そんな状態のお前を連れていけない……」
「でも、お兄さ」
その言葉を最後まで言わせず、首筋をトンッと叩くことにより響の意識を刈り取る。
「悪い、響……でもな、今はこの俺にちっぽけな意地を張らせてくれ」
俺は、響を近くにいたクリスに預ける。
「みんな、手助けはいらねーぜ……ただ、俺が失敗した時だけ、頼む」
「ああ、小さな意地、突き通して来い!!」
そう言って、翼は俺の背中を押す。
「ああ」
「必ず帰って来いよ!!」
「以下同文」
クリスと奏からも背中を押され、そして最後に――――
未来が俺の前に出てこう言った。
「信じてる、から……」
俺は言葉を返さずに、グッと親指を立て、響の顔を少しだけ見て、その場を飛び立った。
「～♪」
俺は歌う。
未来への思いを、未来への歌を。
月の欠片が俺に迫る。
俺は恐れずに、スピードを上げ、瞬間、月の欠片と激突した。
遊策が月を破壊し、２週間が経った。

響と未来は、花を持って、バスに乗っていた。
外では激しい雨が降っている。まさに、響と未来の心を映したようだった。
バス停で降り、ゆっくりと坂を上ると目的の場所へとついた。
そう、目的の場所、それは『墓場』だ。
たどり着いた墓の前で、膝を折る響。頬には大量の涙が伝っていた。
そして、墓には『小日向遊策　ここに眠る』と書かれていた。
「お兄さん……」
そのまま無言で涙を流し続ける響。その姿を見てられない様に、未来は目を伏せた。
雨は、一層激しく降りしきる。
「きゃあああああ!!!!!」
突如、聞こえてきた悲鳴に、バッと顔を上げる未来と響。涙を拭い、悲鳴の主の場所まで走っていった。
「だれか、誰か助けて!!」
そう叫ぶ女性は、ノイズに囲まれていた。
「ノイズ――――」
響は、聖詠を紡ごうとするが、メンテナンスのため二課にガングニールを置いてきたことを思い出した。
「っく、こっちです!!」
未来が走って、女性の腕を取って駆ける。
響と未来は、走る。しかし、距離は広がるどころか縮んでいる。運の悪いことに、女性が足を滑らせ転んでしまう。
その瞬間に追いつかれてしまった。せめて、と、響と未来は女性の盾になる。
響と未来に向かって、ノイズが迫る――――
「エオンフヤー、奥義!!　フジサキバレンシアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!」
叫び声と共に、ノイズが一層される。
「この声、この技は……っ!!」

響は知っている、この技の主を、この声の持ち主を。
「お兄さん!!」
「お兄ちゃん!!」
そう呼んだ先には、一人の男が未来と響の名前を呼びながら走ってくる。
「響、未来!!」
そう、遊策である。
遊策と響たちの距離がゼロになり、そして――――
「お兄さん（ちゃん）の、バカぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
「アベシッ!!!」
響と未来の怒りの鉄拳が遊策にクリーンヒットした。
「今まで、連絡も無く、どこ行ってたの!!」
ポカポカと比較的軽めに、未来が殴りながら言う。
咳き込みながらも、自身がどうやってここまで来たかを言う遊策。
「いやぁ……、海でぷかぷか浮いていた所に米軍に拾われて……御厄介になってました!!　ついでに、1週間ほど監禁されてやっと解放されたので会いに来た次第です!!」
「う、うううう……うううううう!!!」
そうして、ボカボカと比較的にシャレになってない力で殴ってくる響に対応する。
しばらく、叩くと満足したのか、今度はギュッと響と未来は遊策を抱きしめた。
抱きしめつつ……
「まあ、とりあえず……」
響がそう言って、二人が息を吸う。そして、満天の笑みで言った。
「「お帰り!!」」
遊策はそれに微笑みながら、答える。
「ああ、ただいま」
雨はもう、上がっていた。

「ふむ……こんなものか……」
ここではない、何処か遠くの世界で神は呟く。
「これで、物語が一つ終わった」
そうして、手を振りコンソールを呼び出すとあるものを確かめる。
「ストックを今回は４つ使ったか……補充しておかなければな」
コンソールに指をかけ、何かを操作する。
その作業の途中で、ふと気づいたようにこちらに視線を向けて来る。
「おや？　一つ、窓を閉め忘れていたか……」
神はこちらに向かって手を伸ばす。
「これ以上は見せられんな……本来ならばここにアクセスできるのはあの完全聖遺物のみだからな。まあ、上位存在にそんなことは関係ないか……」
神が窓と呼ぶものの取っ手に手をかける。
「さて、画面の前の諸君、今回はここらで幕引きといこうじゃないか……。あの完全聖遺物が見つかるまで、私は全力で隠れさせてもらうよ。私が上位存在に対して出来る、唯一の方法は見せないこと……まだ、真実を知るには早すぎるからね」
何かが閉じる音がした――――

G編開始
26話　英雄問答

列車が走っている。
この列車は先の事件、ルナアタックのおりに起動した完全聖遺物である米軍岩国基地までソロモンの杖を移送する目的で走行していて、三人の装者が警備にあたっているのだ。
そんな爆走する列車の中の一室で向かい合って、男が二人、激しく口論を続けていた。
「英雄とはぁ!!」
二人の内、銀髪の男の一段と大きな声がその場に響く。男は、そこで一旦区切ると息を吸い一気に言い放った。
「英雄とは、犠牲を払い、身を削り、悪とののしられようとも進むものこそ、英雄たりえるッ!!
世界がこんな状況だからこそッ、僕たちは英雄を求めているッ！
そうッ！　誰からも信奉されるッ、偉大なる英雄の姿をッ！」
「チガーナ……もとい、違うな」
「ウェル!?」
「そう!!　確かに、犠牲も英雄の一側面でもある……でもそれだけじゃない!!」
彼、遊策は自らの思ったことを思うがままに言う。
「犠牲なんざ、無い方がずっといいに決まっている!!」
静かに、しかし、熱く、両者は語り合う。
「だからこそ、俺はこう言おう!!　いいか!!　英雄はいたってシンプルでいいのさ!!　そう!!　誰かを笑顔にできる奴こそ英雄と呼ばれるにふさわしい!!」
「なにィ!?」
白髪の男、ジョン・ウエイン・ウェルキンゲトリクス――――ウェル

博士は、英雄通と言ってもいい男であった。英雄を愛し、英雄に焦がれ、英雄を願う、そんな男の自らの英雄像、英雄論からは想像も出来なかった言葉を前に衝撃を受けた。
「馬鹿な!!　そんなことがあってたまるか!?　それならば、お笑い芸人やらも英雄になってしまう!?」
「そうさ、俺からすれば彼らもまた英雄……人類は皆勇気を出すだけで英雄たりえるッ!!」
　そうどこぞの歌詞にもあるように、自分が正しいと思ったことを言う勇気さえあれば英雄になれる、と、遊策は語る。
「ふ、それもまた英雄の側面か……確かに英雄とは、喜を与えるものだ……」
　ウェルは考え、そして、その上で首を振った。
「だが、ボクは貴様を認めん!!　認めんぞ!!　いや、認められん!!」
「おう、上等だぁ!!　犠牲を容認する英雄がいてたまるか!!　犠牲を必須条件にするんじゃねぇ!!」
「はっ、犠牲無き英雄などちゃんちゃらおかしいねっ!!」
「っは、犠牲ありきで語る英雄像なんぞたかが知れてる!!　犠牲なんざ、無い方がいいに決まってんだろ!!　俺からすりゃぁ、犠牲無く終わらせようとすることこそ英雄的だね!!」
「それは君の幼稚な理想論だよ!!」
「理想を語れずして何が英雄だ!!　英雄は理想主義者だろうが!!」
「む!?　確かにそれはそうだ……」
「そうだ、だからこそ人類それぞれに理想の英雄像は存在する!!
　だからこそ、俺はこう主張しよう……」
　息を吸い、一拍おいて、こう結論付け宣言した。
「人類は皆、英雄になりえるッ!!　皆、誰かしら、何かしらの英雄であると!!」
「なん……だと……!?　そんな発想が……?」
　衝撃を受けるウェル。してやったりとニヤリと笑う遊策。
　が、内心、実は最初に驚かされたのは遊策の方であった。先ほどまでの口論で、ウェルの英雄像に触れ、その理想の高さに衝撃を受けた

のだ。
そう言う意味も込めて、遊策は自然と行動していた。
「ありがとう。新しい考えが聞けた。また一つ学ぶことが出来た」
「こちらこそ、あんたの英雄像も興味深かった」
何方ともなく手を取り、互いに相手を認め合う二人。
「でも、てめぇの英雄像は認められねーけどなぁ!!」
「それはこっちのセリフさぁ!!」
しかし、この二人はそろいもそろって頑固だった。
二人は互いに握手をしたまま、『フフフフ……』と黒い笑みを浮かべながら火花を散らし合った。
その時、一層激しく車両が揺れ、体勢を崩す両者。握手したままだったため、ウェルと比べ身長の低かった遊策がつんのめった形になり、丁度、ウェルの顎にジャストミート、頭突きをくらわしてしまう。
「あごオォォォォ、あぎょがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!!!」
「なんかすまんかった……」
そして、その揺れは同時にあるものの到来を示していた。

――――そう、ノイズの襲撃だ。

車両のドアを蹴破るように開き、通路からギアを纏ったクリスがあごを押さえてのたうち回るウェルを踏みつけ部屋に入って来た。
一瞬、状況を理解できず困惑した表情を作ったクリスだったが、今はそんな場合ではないと首を振り、行動に移す。
「っち、こっちだ!!」
そう言って、ウェルの白衣の襟を掴み、空いた方の手で俺の手を取る。
「あ、おい!!」
突然の事に俺は声を上げるが、手を引かれ安全地帯になっている場所に連れ込まれる。
「全く……」

そう言って、白衣の襟が絡まり息が出来ておらず、首を押さえ呼吸を求めて、地面に捨て置かれ死にかけの魚のようにピクピクしたウェルをぽいっと投げ捨て、ため息をつくクリス。
少しピリピリとした雰囲気を感じた。……そうか、これはクリスが起動してしまったソロモンの杖の警護。気を張るのも当然か。
そんな、気を張っているクリスに肩の力を抜かせようと、俺は少しおどけて声をかける。
「おいおい、いいのか？　こんなとこにホイホイ連れ込んで……なるほど、告白かっ!?」
「な、ななっ……ののの、ノ、ノイズの襲撃だ!!　バカなこと言ってねーで、さっさとギアを纏っとけぇ!!　この英雄馬鹿(ヒーロー)!!」
クリスは赤くなりながらそう言った。うーむ、冗談だったのになぁ……そんなに顔を真っ赤にして嫌そうに言わなくてもいいジャマイカ!!
「冗談だ、肩の力は抜けたか？」
説教が始まりそうだったので、ここで俺はネタ晴らしをする。
「〜っぅ。全く、なんでこいつは……そもそも、告白まがいの……」
更に赤くなり、トマトのようになりながら何か言っているが、もうふざけてもいられない。ノイズの襲撃に備えギアを纏うことにする。
「ところで、響はどうしたんだ？」
「他の奴らの避難誘導をしてる!!　あたしらは上に出て、ノイズの迎撃だ!!」
「了解!!」
ギアを纏って、列車の天井に出る。もちろん、その前に気絶したウェルを安全な場所に立てかけておいた。
「うわ、かなりの数がいるなぁ……」
天を埋め尽くす、とまではいわないが数百の飛行型ノイズがいるだろう。これを掃除するのは大変そうだ……
「っは、ちょせえ!!」
「っはあ!!」
クリスは得意の銃やらミサイルやらを繰り出し、空にいるノイズを

撃墜していく。
俺は双槍で近づいてくるノイズを切り払う、が、数が多すぎてきりがない。
「そうだ、クリス!!　時間稼げるか!?」
「時間……？　何するつもりだ？」
「一掃だ」
軽く、思いついたことの概要を説明するとクリスは快く引き受けてくれる。そして、クリスの弾丸が俺に近づくノイズを全て貫いた。クリスは早く準備をするように俺を促す。
さて、やりますか!!
ゆっくりと俺たちの力の源、フォニックゲインを高めていく。
目を閉じ、フォニックゲインを双槍、それぞれに込め槍を変化させ、力の流れを鋭く、強く、イメージを形にするようにアームドギアに集中する。
「まだか、遊策!!」
5分ほどして、クリスはじれったそうにそう言ってくる。
ああ、もう少しだ……よし!!
「今、終わった!!　チャージ完了!!」
そう宣言すると共に、両手に持った槍と槍を掲げる。
そして、完全に変形した双槍の柄を合わせ巨大な一本の槍へと変えた。
「全てを突け!!『クォ・ヴァディス』ッ!!」
そう叫び、俺はその巨大な槍を空に投げ放つ。変形したアームドギアは、空に打ちあがり、数体の飛行ノイズを串刺しにし、炭に変えながらもまだ止まらない。
とうとう、上空の暗雲に突入、隠れて見えなくなってしまった。
「失敗……？　いや、あれは!!」
クリスがそう言った瞬間、雲を突き破り幾万の槍が姿を現した。万の槍と化したアームドギアが空にいたノイズに雨のように降り注ぎ、次々とノイズを炭へと変えしていく。
ああ、もちろん、列車を避けて、だ。

そして、槍の雨が降り止むころには、空には一切のノイズがいなくなったのだった。
『クォ・ヴァディス』
光と化した俺のガングニールを上空に放ち、雨のように万の槍として周囲に解き放つ技であり、ＳＴＡＲＤＵＳＴ∞ＦＯＴＯＮと千ノ落涙を参考にした俺の必殺パート3。
絶大な威力がある反面、チャージまでに時間がかかる。チャージ中も発動中も、俺は一切の動きをその技の動作のみに使わなければならず、途中で邪魔が入ると技がキャンセルされるのだ。
だが、その欠点と引き換えに強力無比な技であり、ご覧のとおり何百といたノイズもきれいさっぱり消え去った。……広範囲の殲滅技と言うことで、敵味方入り混じっての混戦では使えない、ということも欠点か。
ふう、と息をつく。その時、丁度、響が列車の天井を開けて俺たちのいる場所までやってきた。
「避難、終わりました!!　立花響!!　ビシバシとノイズを倒しちゃいますよ～!!　……って、もしかして終わっちゃいました？」
そう言って、ファイティングポーズをとり、シャドーボクシングを始める響。しかし、あまりにも静かなことから状況を察し、気まずそうに問う。
俺はそんな響がおかしくなり少し笑ってしまう。そして、横にいるクリスと目配せすると同時にこういった。
「「おせーよ、バ～カ」」
「そんなぁ、二人ともひどい!!　バカは禁止用語ですう!!　バーカバーカ!!　この息ぴったりおしどり夫婦ー!!　わーん!!」
そう言ってどこかに駆けていった。
「ちょ、どこいくねーん」
「ちょっとそこまでー!!」
「ジブリかっ!!　つーか、なんだ!?　おしどり夫婦って!!」
ツッコミを入れながら響を追いかけるクリス。俺も響を追い、グルグルと列車の天井を走る。

「わーん、お兄さんをクリスちゃんに寝た取られたぁ!!　いいもんいいもん!!　私には未来っていういい人がいるんだからー!!」
「誰がこんなやつと!!　っと、待ちやがれ!!」
少し笑いながらグルグルと列車の屋根を走り回る響と、それを顔を真っ赤にしながら追いかけるクリス。それを走りながら生温かい目で見守る俺。と、まあ、俺たちは平常運転だった。

……それにしても、あれだな、なんか地味に傷つくな、これ。『誰がこんなやつ』とか、そこまで言わなくてもいいじゃないクワァ!!

そうこうしていると、列車は目的の場所に到着。響は一足先に列車内に戻って行く。俺たちも響に続いて列車内に戻ることにした。

列車から降り、研究所の前に来た俺達につい先ほど目が覚めたウェルが振り返り言う。
「君たちのおかげで、無事ここまでたどり着くことができました。ありがとうございます」
「いえいえ、そんな……」
そう言って頭を下げるウェル。響がそれに答えて手を振り振りさせているが、俺とクリスは目を横に逸らす。言えない、もう少しで昇天させてしまいそうになってたなんて……。
「それにしても僕は、なんで気絶してたんでしょうね？」
……本当に申し訳ありません（＾Ｕ＾）。